

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第737集

あいのむら さかい  
**間野村遺跡・境遺跡発掘調査報告書**

主要地方道紫波江繁線星山地区道路改良工事関連遺跡発掘調査

2023

岩手県盛岡広域振興局土木部  
(公財) 岩手県文化振興事業団

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業團埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道紫波江繁線星山地区道路改良事業に関連して、令和2年度に発掘調査を実施した間野村遺跡、令和3年度に発掘調査を実施した間野村遺跡および境遺跡の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代、平安時代、中世の遺構が検出され、平安時代の土器を中心とする遺物が出土し、貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県盛岡広域振興局土木部、紫波町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和5年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団  
理事長 石田知子

## 例　　言

1. 本報告書は、岩手県紫波郡紫波町大吠森字境47-8ほか・紫波町星山字間野村1に所在する間野村<sup>かいの</sup>遺跡、岩手県紫波郡紫波町大吠森字境128-5に所在する境遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 発掘調査は主要地方道紫波江繁線星山地区道路改良工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県盛岡広域振興局土木部の委託を受けた（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡登録台帳における遺跡コード・遺跡略号は次のとおりである。  
間野村遺跡　遺跡コード：LE67-2201　遺跡略号：AIN-20・AIN-21  
境遺跡　　遺跡コード：LE67-1198　遺跡略号：SK-21
4. 発掘調査期間・調査面積・担当者は次のとおりである。  
間野村遺跡　調査期間：令和2年9月1日～11月13日　面積：1,400m<sup>2</sup>  
担当者：福島正和・羽柴直人  
間野村遺跡・境遺跡　調査期間：令和3年10月1日～11月5日　面積：620m<sup>2</sup>（間野村遺跡90m<sup>2</sup>・境遺跡530m<sup>2</sup>）　担当者：福島正和・高木晃・富川悟
5. 室内整理期間・担当者は次のとおりである。  
間野村遺跡　整理期間：令和2年11月16日～令和3年3月31日　担当者：福島正和  
間野村遺跡・境遺跡：令和3年11月1日～12月28日　担当者：福島正和・富川悟
6. 各種委託業務は次の機関等に依頼した（順不同）。  
基準点測量：北栄調査設計株式会社　間野村遺跡・境遺跡  
遺構等写真撮影：岩手スカイイメージ（水沢ラジコン）　間野村遺跡  
遺構等写真撮影：有限会社渡邊測量事務所　間野村・境遺跡  
石器石材鑑定：花崗岩研究会　間野村遺跡  
放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社　間野村遺跡  
放射性炭素年代測定：株式会社加速器分析研究所　境遺跡  
火山灰同定：パリノ・サーヴェイ株式会社　間野村遺跡  
粘土塊等の胎土分析：パリノ・サーヴェイ株式会社　間野村遺跡  
種実遺体分析：パリノ・サーヴェイ株式会社　間野村遺跡
7. 野外調査及び室内整理にあたり、以下の機関等から御協力いただいた（順不同・敬称略）。  
紫波町教育委員会 JAいわて中央東部支所 小野 健司 鈴木 賢治 岩館 岳 八重樫 忠郎  
井上 雅孝 長澤 聖浩 国生 尚
8. 本遺跡の出土遺物及び諸記録類は岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
9. これまでに、調査成果の一部を調査概報等において公表しているが、本書の記載内容を正式なものとする。

## 目 次

序

例言

報告書抄録（巻末）

## 本 文

### I 経緯と経過

1 調査経緯 .....	1
2 調査経過 .....	1
(1) 間野村遺跡（令和2年度調査） .....	1
(2) 間野村遺跡（令和3年度調査） .....	2
(3) 境遺跡 .....	2

### II 位置と環境

1 遺跡の位置 .....	3
2 地形的環境 .....	3
3 歴史的環境 .....	7

### III 調査方法

1 発掘調査 .....	11
2 整理作業 .....	11
3 記載方法 .....	12

### IV 間野村遺跡

1 概要と層序 .....	13
(1) 概要 .....	13
(2) 層序 .....	13
2 令和2年度調査の遺構と遺物 .....	15
(1) 繩文時代 .....	15
(2) 平安時代 .....	22
(3) 中世以降 .....	35
3 令和3年度の遺構と遺物 .....	46
(1) 概要 .....	46
(2) 検出遺構 .....	46

## V 境 遺 跡

1 概要と層序 .....	49
(1) 概要 .....	49
(2) 層序 .....	49
2 遺構と遺物 .....	51
(1) 壴穴住居 .....	51
(2) 土坑 .....	54
(3) 小ピット .....	56
(4) 溝 .....	56
(5) 遺物包含層 .....	59
(6) 遺物 .....	59

## VI 分析

1 分析試料と分析目的 .....	75
2 火山灰分析 .....	76
3 放射性炭素年代測定（間野村遺跡） .....	80
4 放射性炭素年代測定（境遺跡） .....	83
5 出土粘土塊等の自然科学分析 .....	86
6 各分析結果を受けて .....	91

## VIII 総括

1 間野村遺跡のまとめ .....	93
(1) 遺構 .....	93
(2) 層序 .....	94
2 境遺跡のまとめ .....	94
(1) 遺構 .....	94
(2) 層序 .....	95
3 二つの古代集落の関係 .....	95
4 結語にかえて .....	96

## 図 版

第 1 図 遺跡の位置 .....	4	第 24 図 掘立柱建物 3 .....	40
第 2 図 遺跡範囲と調査区の位置 .....	5	第 25 図 堀立柱建物 2 .....	41
第 3 図 周辺の地形分類 .....	6	第 26 図 出土遺物（中世～近現代）.....	42
第 4 図 周辺の遺跡 .....	8	第 27 図 堀 3、土坑 31 .....	47
第 5 図 遺構配置 .....	14	第 28 図 掘立柱建物 4 .....	48
第 6 図 土坑 1～4 .....	16	第 29 図 遺構配置 .....	50
第 7 図 土坑 5～8 .....	18	第 30 図 壴穴住居 1 .....	52
第 8 図 土坑 9～12 .....	20	第 31 図 壴穴住居 1、焼土 .....	53
第 9 図 土坑 13～15 .....	21	第 32 図 壴穴住居 2 .....	55
第 10 図 陥し穴 1～3 .....	23	第 33 図 土坑 1・土坑 2 (1) .....	57
第 11 図 出土遺物（縄文時代）.....	24	第 34 図 土坑 2 (2)、小ピット .....	58
第 12 図 壴穴住居 1 .....	25	第 35 図 壴穴住居 1 出土遺物 (1) .....	61
第 13 図 壴穴住居 2 (1) .....	26	第 36 図 壴穴住居 1 出土遺物 (2) .....	62
第 14 図 壴穴住居 2 (2) .....	27	第 37 図 壴穴住居 1 出土遺物 (3) .....	63
第 15 図 壴穴住居 2 (3)、掘立柱建物 1 .....	28	第 38 図 壴穴住居 1 出土遺物 (4) .....	64
第 16 図 土坑 26～30 .....	30	第 39 図 壴穴住居 1 出土遺物 (5) .....	65
第 17 図 溝 1・2 .....	32	第 40 図 壴穴住居 2 出土遺物 .....	67
第 18 図 堀 1・2 .....	33	第 41 図 土坑 1 出土遺物 (1) .....	68
第 19 図 壴穴住居 1 出土遺物 .....	35	第 42 図 土坑 1 (2)・土坑 2・小ピット 出土遺物 .....	69
第 20 図 壴穴住居 2 出土遺物 (1) .....	36		
第 21 図 壴穴住居 2 出土遺物 (2) .....	37	第 43 図 その他の遺物 .....	70
第 22 図 土坑・遺構外出土遺物 .....	38		
第 23 図 壴穴建物 1 .....	40		

## 表

第 1 表 周辺の遺跡一覧（紫波町内）.....	9	第 5 表 境遺跡（令和 3 年度）掲載遺物一覧（土器）.....	71
第 2 表 遺構名新旧対照表 .....	12		
第 3 表 間野村遺跡（令和 2 年度）掲載遺物一覧 （土器・陶磁器等）.....	43	第 6 表 境遺跡掲載遺物一覧（土製品・石製品）.....	74
第 4 表 間野村遺跡（令和 2 年度）掲載遺物一覧 （土製品・石器・石製品）.....	43		

## 写 真 図 版

写真図版 1 航空写真（1）	99	写真図版 31 堀 1・2	129
写真図版 2 航空写真（2）	100	写真図版 32 壺穴建物 1	130
写真図版 3 航空写真（3）	101	写真図版 33 土器（1）	131
写真図版 4 調査区全景	102	写真図版 34 土器（2）	132
写真図版 5 基本層序 A～D、土坑群	103	写真図版 35 土器（3）	133
写真図版 6 土坑 1～3	104	写真図版 36 土器（4）	134
写真図版 7 土坑 1～3	105	写真図版 37 土器（5）・陶磁器（1）	135
写真図版 8 土坑 4・5	106	写真図版 38 陶磁器（2）・ガラス製品	136
写真図版 9 土坑 4・5	107	写真図版 39 石器	137
写真図版 10 土坑 6～8	108	写真図版 40 航空写真	138
写真図版 11 土坑 6～8	119	写真図版 41 調査区全景	139
写真図版 12 土坑 9～11	110	写真図版 42 堀 3、土坑 31	140
写真図版 13 土坑 9～11	111	写真図版 43 航空写真	141
写真図版 14 土坑 12～14	112	写真図版 44 調査区全景	142
写真図版 15 土坑 12・13・15	113	写真図版 45 基本層序	143
写真図版 16 土坑 14・15、陥し穴 1・3	114	写真図版 46 壺穴住居 1（1）	144
写真図版 17 陥し穴 1～3	115	写真図版 47 壺穴住居 1（2）	145
写真図版 18 壺穴住居（1）	116	写真図版 48 壺穴住居 1（3）	146
写真図版 19 壺穴住居（2）	117	写真図版 49 壺穴住居 1（4）、壠 1	147
写真図版 20 壺穴住居 2 全景	118	写真図版 50 土坑 1	148
写真図版 21 壺穴住居（1）	119	写真図版 51 土坑 2（1）	149
写真図版 22 壺穴住居（2）	120	写真図版 52 土坑 2（2）・小ピット	150
写真図版 23 壺穴住居（3）	121	写真図版 53 溝 1	151
写真図版 24 壺穴住居（4）	122	写真図版 54 土器（1）	152
写真図版 25 壺穴住居（5）	123	写真図版 55 土器（2）	153
写真図版 26 土坑 26・27	124	写真図版 56 土器（3）	154
写真図版 27 土坑 27・28	125	写真図版 57 土器（4）	155
写真図版 28 土坑 27～29	126	写真図版 58 土器（5）・土製品	156
写真図版 29 土坑 30	127	写真図版 59 土器（6）	157
写真図版 30 溝 1・2、堀 1・2	128	写真図版 60 土器（7）・石製品	158

## I 経緯と経過

### 1 調査経緯

間野村遺跡並びに境遺跡は、主要地方道紫波江繁線星山地区道路改良工事の施工に伴って、その工事区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。紫波江繁線と国道456号の食い違い交差となっている箇所では、その形状から深刻な渋滞を引き起こしており、安全性に問題があることから、交差点形状の改良を行うものである。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取扱いについては、今回事業地周辺に周知の遺跡は存在しなかつたが、北側の同一地形面に間木沢遺跡が所在しており、当該箇所においても埋蔵文化財が存在している可能性があるため令和2年4月20日に現地確認が実施された。

現地確認の結果に基づき、岩手県広域振興局土木部から岩手県教育委員会に対し、令和2年5月18日付け盛岡市第4012号「周知の埋蔵文化財包蔵地等の試掘調査について（依頼）」により試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた県教育委員会は令和2年5月29日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該箇所の発掘調査が必要となる旨を令和2年6月3日付け教生第352号「周知の埋蔵文化財包蔵地等の試掘長について（回答）」により回答した。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、令和2年度に間野村遺跡の発掘調査を実施することとなった。

境遺跡については、岩手県教育委員会が令和3年1月22日に試掘調査を実施し、工事に着手するには当該箇所の発掘調査が必要となる旨を令和3年1月26日付け教生第1515号「周知の埋蔵文化財包蔵地等の試掘調査について（回答）」により回答した。これを受け、令和3年度に公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

(岩手県盛岡広域振興局土木部)

### 2 調査経過

#### (1) 間野村遺跡（令和2年度調査）

間野村遺跡（令和2年度）の発掘調査は、岩手県広域振興局土木部との委託契約を経て、令和2年9月1日より開始した。調査員2名、作業員15名で調査を進めた。開始当初は重機による表土除去をおこなうが、重機の搬出入口が道路に面した1箇所のみで、調査範囲全面を掘削できない状況だった。また、埋設水道管が調査区を横断していることが判明し、この管を維持したままの調査となった。これら諸問題から調査区内での反転調査が必要なこと、予想以上に遺構が検出されたことを受け、9月25日の関係三者による現地協議によって、当初の9月末までの調査期間を11月頃に延長し、作業員も増員して20名体制とする方針となった。

調査は搬出入口を除いた調査区東側の調査を優先的に進め、10月5日に三者立ち会いの下、1,400m<sup>2</sup>のうち東側530m<sup>2</sup>について部分終了確認をおこなった。この部分ではおもに堀、土坑などの遺構を調査し、10月9日にドローンおよびラジコンヘリによる上空からの遺構等写真撮影を実施した。

現地説明会等の公開はおこなわなかつたが、11月に岩手日報の取材を受け、調査成果の一部が記事に

掲載された。

以降、調査区西側および南側の表土掘削が可能となる。調査区西側では、古代の竪穴住居、縄文時代の土坑等を調査した。11月6日、この箇所を中心とした上空からの遺構等写真撮影を実施し、11月10日の三者での終了確認を経て、10月13日にすべての作業を終え撤収した。

調査を終えた後、令和2年11月16日より整理作業を開始し、3月31日まで令和2年度調査の整理作業を終えた。報告書の作成も令和2年度分のみとし、全体の編集および最終的な構成は、次年度以降の調査と合わせることとした。

### （2）間野村遺跡（令和3年度調査）

間野村遺跡（令和3年度）の発掘調査は、岩手県広域振興局土木部との委託契約を経て、令和3年10月1日より開始した。調査範囲は前年度調査区の東側であるが、それぞれの調査区の間には私道が横断しており、個人の出入りのために調査範囲外となっている。同様に今回調査区の東側も同様の理由により未調査である。調査面積は90m<sup>2</sup>である。調査は境遺跡と一体での調査となり、より面積の広い境遺跡を先行して進めた。調査区が狭小であるため人力で表土を掘削し、その後やはり人力で遺構検出をおこなった。調査は境遺跡の作業の合間にを利用して進め、10月最終週には目処が立ったため、境遺跡とともに10月29日に終了確認を実施した。10月29日にはドローンによる上空からの撮影をおこなった。その後、人力による埋め戻し作業をおこない間野村遺跡の調査は終了した。

### （3）境 遺 跡

境遺跡の発掘調査は、間野村遺跡と同一事業・同一事業者によるもので、令和3年10月1日より発掘調査を開始した。調査に伴い、隣接する残地（耕作していない畑）を借地し、ここに資材や残土を集め、有効活用した。調査は間野村遺跡と一体となって調査員2名、作業員16名で進めた。調査開始直後にトレーナによる遺物包含層や遺構面の確認をおこない、重機によって表土を掘削除去した。その後は人力による遺物包含層の掘削をおこない、これを終えた範囲については遺構検出作業を実施した。検出作業により竪穴住居等の遺構を見出し、これらの掘削作業と調査区中央の遺物包含層の掘削を並行しておこなった。遺物包含層の掘削が終わったところで、一部間野村遺跡の調査と分かれて作業をおこない、10月27日終了確認、29日ドローンによる撮影をおこない、同日に撤収作業をほぼ終えた。11月は調査員のみで最終的な測量作業をおこない、終了したところで重機による埋め戻し作業をおこなった。これらすべての作業は11月5日で完了し完全撤収となった。

室内の整理作業は11月1日から開始し、12月28日で作業を終了した。この間、概報原稿の作成や報告書の前年度調査分と合わせる編集作業も行っている。

## II 位置と環境

### 1 遺跡の位置

間野村遺跡は、岩手県紫波郡紫波町犬吠森字境47-8ほかに所在するが、今回調査範囲の大半は、紫波町星山字間野村1に所在する。したがって、今回事業における埋蔵文化財行政上の関係書類住所は犬吠森ではあるが、星山地区の間野村に所在する遺跡である点で注意が必要である。

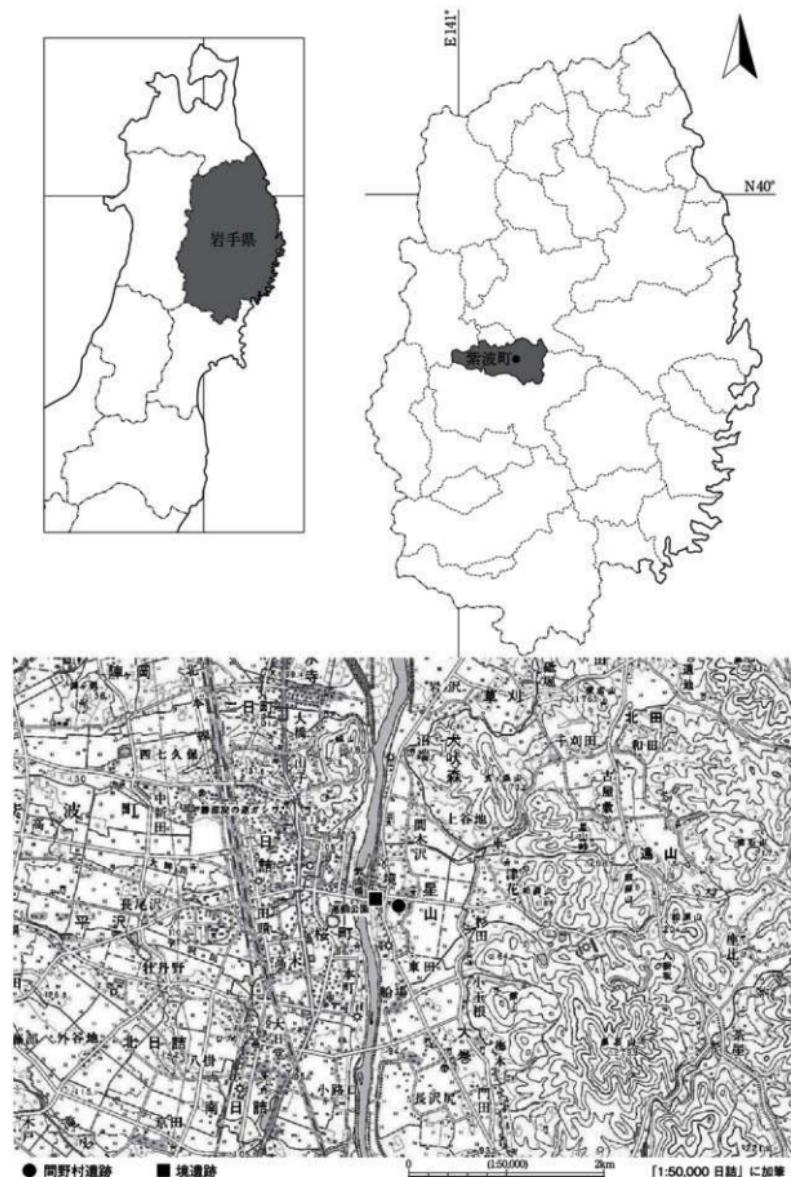
境遺跡は間野村遺跡の西に隣接し、岩手県紫波郡紫波町犬吠森字境128-5ほかに所在する。

これら二遺跡の所在する紫波郡紫波町は岩手県のほぼ中央に位置し、町域を南北に北上川が貫流し、町域西側は奥羽山地、東側は北上山地が山並みを形成している。紫波町は昭和30年、日詰町・明石村・赤沢村・佐比内村・志和村・長岡村・彦部村・古館村・水分村の1町8村が合併して誕生した。令和2年現在の紫波町の町勢は、238.98km<sup>2</sup>の面積を有し、人口約33,200人である。町域の北部は紫波郡矢巾町・盛岡市、東部から南部にかけては花巻市、西部は岩手郡雫石町とそれぞれ市町境が接する。紫波町内には国道4号をはじめ主要幹線道路が多く走り、東北自動車道紫波インターヤ JR東北本線日詰駅・紫波中央駅・古館駅の3駅が設置されている交通利便性の高い町である。町内は大まかに西部、東北本線や国道4号の走る中央部、北上川東岸の東部に分かれれる。町の主要な産業は農業である。宅地化の進む中央部を除き、平野部は農業生産域で、もち米・小麦・そばといった穀物生産が非常に盛んである。一方、東部の山際はぶどう・りんご、西部の山際は洋なし等の果樹栽培と生産が充実している。町中央部の宅地化は、近年県都である盛岡のベッドタウンとしての人口増加が影響している。星山地区および犬吠森字境は、明治22年の旧町村制で旧彦部村管内となるが、それ以前は星山村と犬吠森村にそれぞれ分かれていた。間野村遺跡内には「星山小学校跡地」標柱があり、ここが近世の寺子屋を引き継いだ星山小学校であったようである。現在の星山小学校は調査区の北東に位置するが、令和3年度をもって統廃合された。

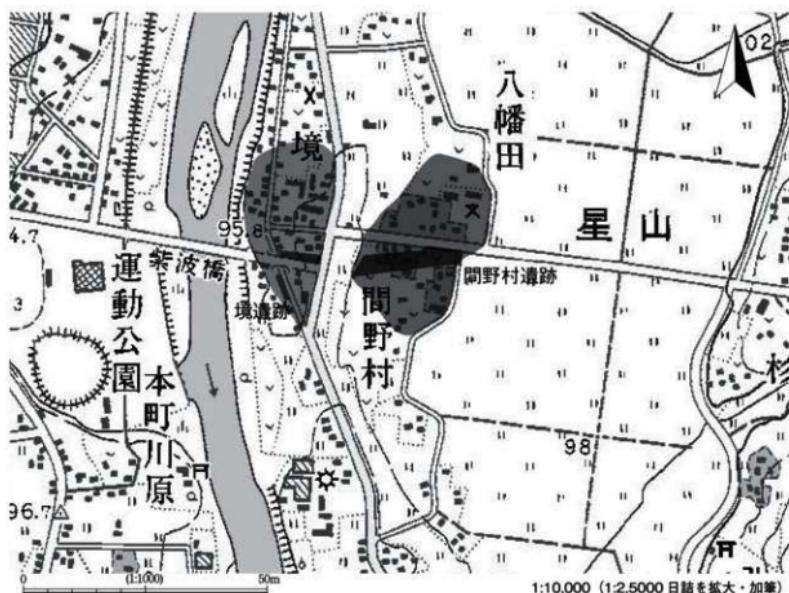
間野村遺跡および境遺跡は、国道345号と国道396号を結ぶ県道脇であり、この道路の改良工事によって発掘調査が発生したものである。すなわち、国道4号から北上川を紫波橋で越え、国道345号を横断し、国道396号に至るルートである。この県道は国道396号を超えて東進し、赤沢地区から江繁方面に延び、折壁峠から早池峰山へ至る。これらルートを鑑みても遺跡周辺は東西交通路の結節点であることがわかる。

### 2 地形的環境

間野村遺跡および境遺跡の立地する北上盆地は南北に流れる北上川の東岸域と西岸域に分けられる。西岸域は西に連なる奥羽山脈と広い平野部からなり、一方で間野村遺跡の所在する東岸域は北上山地（高地）が東に連なり、西岸域よりもやや狭小な平野部を有している。奥羽山脈は火山性山地で標高も高く急峻であるが、北上山地（高地）は大部分が古生層であり、奥羽山脈より古い地質の特徴を具備している。北上山地の古生層は花崗岩・蛇紋岩・石灰岩などの岩塊からなる。遺跡の東側には、北上山地（高地）最大の大起伏帯がみられ、早池峰山（標高1,917m）や薬師岳（1,645m）をピークとする1,400～1,800m級の山々が早池峰連峰を形成している。したがって、これら急峻な地形から北上川河床まで大きな高低差が認められる場所である。



第1図 遺跡の位置



第2図 遺跡範囲と調査区の位置

二遺跡東の北上山地（高地）から遺跡周辺に向かって流れるおもな河川は、遺跡の南に位置する赤沢川、北に位置する天王川がそれぞれ北上川に注ぐ。いずれも早池峰連峰から谷や沢を起源とする小河川である。これら河川は地形を大きく形成・変改するほどの流れではないため堆積物も少量に留まる。赤沢川は今回の改良工事対象の道路である江繁線と途中まで線形を同じくするが、赤沢地区より道路と分かれるように長樋山（標高321m）と黒石山（標高284m）との谷間を流れる。なお、間野村遺跡は黒石山の北西に位置する。

間野村遺跡は東側丘陵地から下がる低位段丘縁辺と沖積平野にかけて立地する。遺跡の西端はおおむね北上川に接する氾濫原の範囲に該当する。低位段丘面上に沖積層が堆積して形成されたものとみられ、段丘端部は北上川の開析によって浸食されている可能性が高いと思われる。そのため、河川浸食崖上に遺跡は立地していると考えられる。一方、調査区西側のより低い地点の堆積層は厚く、下部は北上川に向かって一段と下がっていくものと考えられる。

一方、境遺跡は現在の北上川に接するように位置しており、沖積平野上における氾濫原あるいは自然堤防上に立地する。いずれにせよ北上川の流路の変化とともに形成された地点であると推測され、北上川の増水等のタイミングによっては完全に浸水する危険性の高い場所でもある。

今回の調査範囲は東から西に向かって傾斜する非常に緩慢な斜面にある。調査区周辺は一部改変痕跡が認められるが、同様の緩斜面が広がっており、遺跡の広がりのおよその範囲が推定できる。



\* 国土地理院 1:50,000「日誌」および国土交通省地形分類図を基に作成

第3図 周辺の地形分類

### 3 歴史的環境

間野村遺跡・境遺跡の所在する紫波郡紫波町では、多くの遺跡が確認されている。ここでは二遺跡周辺に分布する遺跡を概観する。

紫波町内では北上川を挟んで東西両岸に遺跡が存在する。西岸域では縄文時代から中世、近世に至る遺跡が東岸域よりも多く認められる。これは、西岸域の平野部は東岸域のそれよりも広いこと、そのため平野部での展開する遺跡の数もさることながら近現代以降の交通網整備や宅地の広がり等開発自体も多いことも要因であろう。

縄文時代の遺跡では西田遺跡が著名である。縄文時代中期の大規模な環状集落として知られているこの遺跡は、集落の中心広場を中心に土壙墓、掘立柱建物、竪穴住居が環状・同心円状に整然と配置されている。各種遺構群が計画的に整備されていた結果を物語っている。

古代は、稻村遺跡や下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡などで奈良時代や平安時代の集落が調査されている。東岸域では長岡西長岡長谷田・沼田遺跡で平安時代の集落が調査されている。集落以外では、古代窯業生産地であると推測される西岸域の杉ノ上遺跡や東岸域の星川窯跡などが知られている。

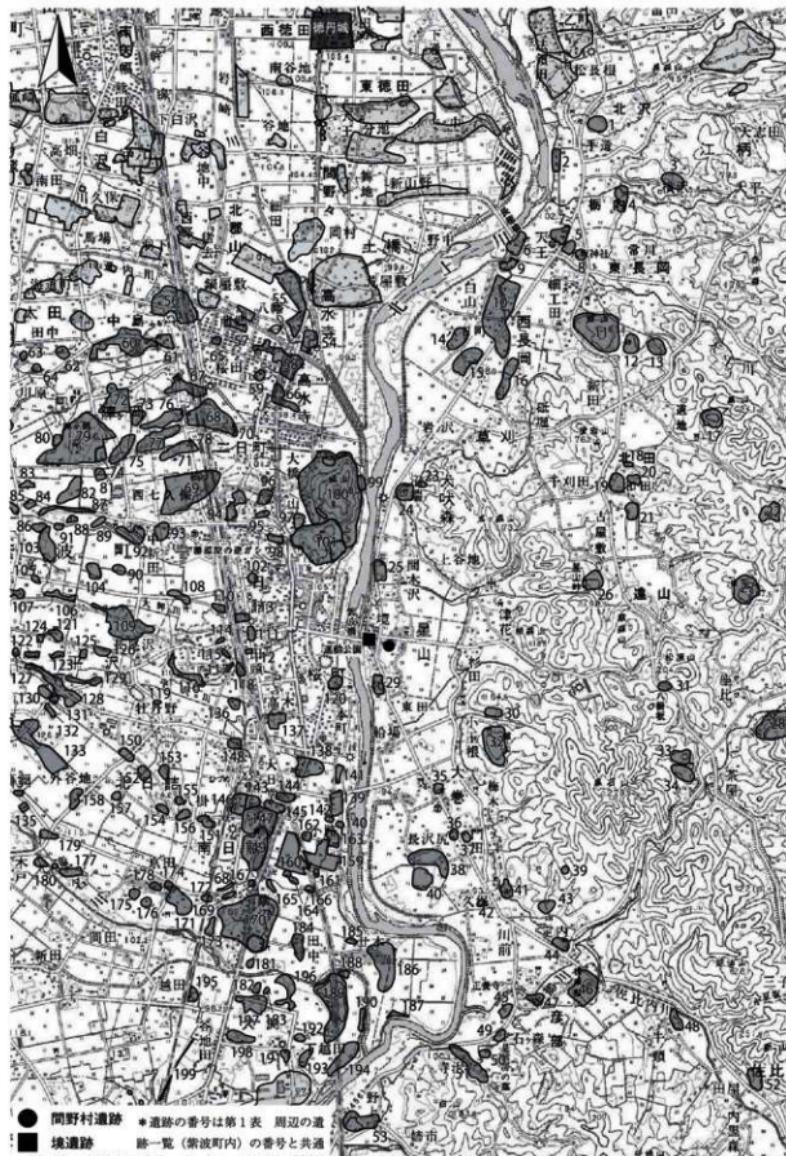
古代末から中世では、平泉藤原氏の同族である比爪氏の居館とされる比爪館跡が現在の紫波町の中心部に存在する幾度も発掘調査がなされた結果、堀で囲まれた居館であることが判明しており、出土遺物からも12世紀後半が中心時期である。また、この比爪館跡から北上川河畔まで12世紀の遺構や遺物がみられる遺跡が數多く見つかっており、居館から都市空間が展開を見せていたことを想起される。これら遺跡は、南日詰小路口遺跡、下河原Ⅰ・Ⅱ遺跡、南日詰大銀Ⅰ遺跡、北日詰城内Ⅰ遺跡、北条館跡などの遺跡群である。

中世では、高水寺城跡が部分的に調査されており、堀等の普請に関わる遺構が確認されている。また、北上川西岸の川に接するように北条館跡が所在し、戦国時代を中心とする堀や掘立柱建物・竪穴建物などが多数調査されている。

間野村遺跡の位置する地点は幕末には小野真庵なる人物が開いた寺子屋があったとされる。屋号は「行人橋」と呼ばれたようである。寺子屋は明治時代になると星山小学校となるが、明治9年の学制発布に伴い、この地より600m北東に移転する。その後この地は、牧畜馬や財閥資本によって乳製品等の加工施設となり、この地域の酪農の拠点として地域をリードする。今回の調査で認められる大規模な擾乱の中には、その名残であるサイロ基礎部分なども部分的に認められた。間野村遺跡の地は、近代における地域の歴史にとっても大切な記憶であると思われる。

#### 引用・参考文献

- 彦部村 1921 「彦部村誌」  
 長沢聖浩 2012 「光井報恩会と岩手県彦部村」  
 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 「西長岡長谷田・沼田遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第103集



#### 第4図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（紫波町内）

北上川東岸域（No.1～53）

No.	遺跡名	種別	時代	備考
1	手道	散布地	古代	-
2	橋内館	城館跡	中世	-
3	橋内塙田	散布地	縄文・古代	-
4	橋内椎原堂	散布地	縄文・奈良	-
5	東長岡天王	散布地	縄文	-
6	東長岡天王Ⅱ	散布地	奈良・平安	-
7	東長岡天王Ⅲ	散布地	奈良・平安	-
8	柳田一里塙	一里塙	-	礎成
9	永一田	散布地	奈良・平安	-
10	西長岡谷田	集落跡	奈良・平安	-
11	長岡城跡	城館跡	中世	町指定史跡
12	東長岡林崎	散布地	古代	-
13	東長岡林崎Ⅱ	散布地	縄文・古代	-
14	六日町	散布地	奈良・平安	H6新規
15	酒田	散布地	奈良・平安	-
16	草薙中原敷	散布地	縄文・平安	-
17	北田館（柳ノ木館・綿川館）	城館跡	中世	-
18	星川宿跡	宿跡	平安	-
19	北田	散布地	-	-
20	星川館	城館跡	中世	-
21	渡山	散布地	縄文	-
22	田村館	城館跡	中世	-
23	大吹森	散布地	-	-
24	大吹森館（東野館）	城館跡	中世	-
25	圓木沢	散布地	-	-
26	津山館	城館跡	中世	-
27	高間館（西野館）	城館跡	中世	-
28	赤沢館	城館跡	中世	-
29	星山館	城館跡	中世	-
30	花立	散布地	-	-
31	水戸築（八卦）一里塙	一里塙	-	町指定史跡、半旗
32	大巻船跡	城館跡	中世	町指定史跡
33	の場跡	城館跡	中世	-
34	赤沢羽官堂	散布地	縄文	-
35	梅ノ木館（八電）	城館跡	中世	-
36	大巻長沢尻Ⅱ	散布地	縄文	-
37	大巻門田	散布地	古代	-
38	大巻長沢尻	散布地	縄文・古代	-
39	彦部赤坂古墳	古墳	-	-
40	赤川館	城館跡	中～近世	礎成？
41	葛坪	散布地	縄文	-
42	彦部久保	散布地	古代	-
43	彦部館	城館跡	中世	-
44	完内	散布地	縄文	-
45	元町	散布地	古代	-
46	横瀬館（彦部館）	城館跡	中世	-
47	船盛	城館跡	中～近世	-
48	牛ノ頭館	城館跡	中～近世	-
49	是信居墓所	-	-	町指定史跡
50	小澤田	散布地	古代	-
51	寺沢	散布地	縄文・奈良	-
52	田原館	散布地	-	-
53	野上	散布地	縄文	-

北上川西岸域（No.54～106）

No.	遺跡名	種別	時代	備考
54	桜田Ⅰ	集落跡	奈良	S53調査
55	桜田Ⅱ	集落跡	奈良	-
56	古船橋	散布地・集落跡	古代	S48調査
57	中田Ⅰ	集落跡	奈良・平安	S53・54・58・59調査
58	中田Ⅱ	集落跡	奈良・平安	S58・H5調査
59	中田Ⅲ	集落跡	古代	S58調査
60	上長根	集落跡	古代	-
61	中鳥館	城館跡	中世	-
62	下竹林	散布地	古代	-
63	上竹林Ⅰ	散布地	古代	-
64	上竹林Ⅱ	城館跡	古代	-
65	念仏堂	寺院跡	-	-
66	古船跡	散布地	-	S53・54調査
67	杉の上Ⅰ	宿跡	古代	S48調査
68	杉の上Ⅱ	集落跡	古代	S48・49調査
69	杉の上Ⅲ	集落跡	古代	S48調査
70	栗木田	宿跡	古代	-
71	川原屋瓦窯跡	窯跡	近世	町指定史跡
72	漆田	集落跡	古代	-
73	平坊	集落跡	古代	-
74	平坊Ⅱ	散布地	縄文・古代	-
75	平坊Ⅲ	集落跡	平安	-
76	鹿沼Ⅰ	集落跡	古代	-
77	鹿沼Ⅱ	集落跡	古代	-
78	川原毛	集落跡	平安	-
79	薄ヶ岡	散布地・集落跡	縄文・古代・中世	町指定史跡
80	日の輪月の輪形	泡跡	-	-
81	追分	散布地	-	-
82	南原	城館跡・集落跡	-	-
83	北田	散布地	-	-
84	宮手越場	散布地	古代	-
85	宮手越場Ⅱ	散布地	平安	H4新規
86	宮手造分Ⅰ	散布地	縄文	-
87	宮手造分Ⅱ	散布地	縄文・古代	-
88	宮手造分Ⅲ	散布地	古代	-
89	宮手造分Ⅳ	散布地	古代	-
90	日詰上新田	散布地	古代	-
91	日詰上新田Ⅰ	散布地	古代	-
92	日詰上新田Ⅱ	散布地	平安	-
93	七久保	宿跡	古代	-
94	善念寺山	散布地	縄文	H30調査
95	善念寺山Ⅱ	散布地	縄文	-
96	善念寺山古墳	古墳	縄文	-
97	山子	散布地	縄文	-
98	戸門御所（西御所）	城館跡	中世	-
99	河岸場	渡し場跡	-	-
100	高水寺城（郡山城）	城館跡	中世	S48・49・58・59・H6-13調査
101	吉良衛門	城館跡	中・近世	-
102	日詰下丸森	散布地	古代	-
103	高Ⅰ	散布地	縄文・古代	-
104	高Ⅱ	散布地	縄文・古代	-
105	平沢越場Ⅰ	散布地	平安	-
106	平沢越場Ⅱ	散布地	平安	-

第1表 周辺の遺跡一覧（紫波町内）

北上川西岸域（No. 107～159）

No.	遺跡名	種別	時代	備考
107	六本松	散布地	平安	—
108	板町下野沢	散布地	平安	—
109	板町上野沢	散布地	繩文・平安	—
110	日詰下野沢	散布地	—	—
111	西畠	散布地	古代	—
112	日詰西	散布地	奈良	H27 新規
113	日詰西Ⅱ	散布地	奈良～平安	JG 元新規、R 元調査
114	板町中桜Ⅰ	散布地	繩文・古代	—
115	日詰社丹野	散布地	古代	—
116	平沢松田	散布地	古代	—
117	平沢松田Ⅱ	散布地	古代	—
118	田瀬	散布地	—	S49 調査
119	北日詰外丹野	散布地	繩文	—
120	本町川原	散布地	奈良～平安	H30 新規
121	伝平沢館	散布地・城館跡	平安	—
122	平沢塙Ⅱ	散布地	平安	—
123	平沢塙Ⅲ	散布地	繩文・平安	範囲拡大
124	平沢塙Ⅳ	散布地	平安	H3 新規
125	平沢塙塙Ⅰ	散布地	繩文・平安	範囲拡大
126	平沢塙塙Ⅱ	散布地	平安	H3 新規
127	平沢塙Ⅴ	散布地	繩文・古代	—
128	平沢塙Ⅵ	散布地	—	—
129	平沢塙田	散布地	古代	—
130	平沢西折	散布地	古代	—
131	平沢新田Ⅰ	散布地	繩文・古代	—
132	平沢新田Ⅱ	散布地	古代	—
133	平沢野田Ⅰ	散布地	繩文・古代	—
134	平沢泥名田Ⅰ	散布地	古代	—
135	平沢泥名田Ⅱ	散布地	繩文・古代	—
136	板町田瀬	散布地	古代	—
137	才土地	集落	古代～中世	H19、H30 調査
138	大日堂	集落跡・城館跡	—	—
139	北条館	城館跡	中世	—
140	北日詰城内Ⅰ	散布地	古代	—
141	北日詰城内Ⅱ	集落跡	繩文	S50 調査
142	北日詰東ノ坊	散布地	古代	—
143	北日詰東ノ坊Ⅰ	散布地	古代～中世	—
144	北日詰東ノ坊Ⅱ	散布地	古代	—
145	北日詰東ノ坊Ⅲ	散布地	古代～中世	—
146	北日詰東ノ坊Ⅳ	散布地	奈良～平安	—
147	北日詰東ノ坊Ⅴ	城館跡	10・12 C	S 40-44-47-49-57-60-62～H12-15-16-21-23-24-25-R01 調査
148	北日詰下戻	散布地	古代	—
149	五郎沼	散布地	繩文	—
150	北日詰外谷地	散布地	古代	—
151	北日詰八折	散布地	古代	—
152	北日詰外谷地Ⅰ	散布地	繩文・古代	—
153	北日詰外谷地Ⅱ	散布地	繩文・古代	—
154	北日詰外谷地Ⅲ	散布地	—	—
155	北日詰外谷地Ⅳ	散布地	—	—
156	北日詰外谷地Ⅴ	散布地	古代	—
157	北日詰外谷地Ⅵ	散布地	古代	—
158	北日詰外谷地Ⅶ	散布地	—	—
159	南日詰小路口Ⅰ	散布地	古代	—

北上川西岸域（No. 160～199）

No.	遺跡名	種別	時代	備考
160	南日詰小路口Ⅱ	散布地	古代	—
161	南日詰小路口Ⅲ	散布地	古代	—
162	南日詰大藪Ⅰ	散布地	古代	S50 調査
163	南日詰大藪Ⅱ	散布地	古代	H27・28・29 調査
164	南日詰百崎	散布地	古代	—
165	南日詰田中Ⅰ	散布地	古代	—
166	南日詰田中Ⅱ	散布地	古代	—
167	伝蛇塚	散布地	—	—
168	南日詰藍沼Ⅰ	散布地	古代	—
169	南日詰藍沼Ⅱ	散布地	古代	—
170	南日詰	散布地	繩文・古代	S62・63 調査
171	南日詰京田Ⅰ	散布地	繩文・古代	—
172	南日詰京田Ⅱ	散布地	古代	—
173	南日詰京田Ⅲ	散布地	古代	—
174	南日詰京田Ⅳ	散布地	古代	—
175	南日詰梅田	散布地	古代	—
176	南日詰梅田Ⅱ	散布地	古代	—
177	南日詰長根	散布地	繩文・古代	—
178	南日詰長根Ⅱ	散布地	繩文・古代	—
179	南日詰野原	散布地	古代	—
180	金船	城館跡	中世	—
181	南日詰澗名田Ⅰ	—	—	—
182	南日詰澗名田Ⅱ	—	—	—
183	南日詰澗名田Ⅲ	—	—	—
184	南日詰澗名田Ⅳ	—	—	—
185	南日詰八坂	散布地	古代	—
186	下越田Ⅰ	散布地	古代	—
187	下越田Ⅱ	集落跡	古代	—
188	西田北	集落跡	繩文	—
189	西田	集落跡・城館跡	繩文・古代・中世	S50～52、H1 調査
190	西田東	集落跡	古代（平安）	—
191	南谷地	—	—	—
192	下越田Ⅲ	散布地	—	—
193	下越田Ⅳ	散布地	—	—
194	下越田Ⅴ	集落跡	古代	—
195	片瀬越田	散布地	繩文・古代	—
196	大潤新田原	散布地	繩文・古代	—
197	大潤谷地田	散布地	古代	—
198	大潤谷地南原	—	—	—
199	疊合街道跡	道路	中世・江戸時代	H23 調査（南側）

### III 調査方法

#### 1 発掘調査

##### 掘削作業

発掘調査は、令和2年度に間野村遺跡、令和3年度に境遺跡と間野村遺跡の東側残りの調査をおこなった。令和2年度は調査現場から約300m離れたJAいわて中央東部支所の敷地を借地し、事務所等を設置した。令和3年度は事業用地に隣接する民地を借地して事務所等を設置した。

調査開始当初は、人力によるトレーナーを設定し、初期段階での層位および遺構の把握をおこなった。トレーナーの結果を加味しながら、その後は重機により表土除去を実施した。重機による掘削が終了した部分については、人力による遺構検出作業をおこなった。検出した遺構の掘削作業は2分法あるいは4分法で掘削し、その状況を記録、残りの部分の掘削という流れで作業を進めた。遺構断面の実測および写真撮影を終えると完掘作業に移行し、遺構の完掘後は写真および平面実測によって遺構を記録した。

##### 遺構実測・写真撮影

遺構実測は、電子平板による遺構平面図を作成し、遺構断面図は手書きによる実測方法を採用した。また、遺構の写真撮影は、フルサイズ一眼レフデジタルカメラによる撮影を基本とし、 $6 \times 45$ 判モノクロによる写真を保存用として適宜撮影した。撮影に際しては、撮影カードの記入・写し込みをおこない、撮影写真的整理に活用した。

##### 諸記録の表記

調査に際して、「AIN-20」・「AIN-21」(間野村遺跡)、「SK-21」(境遺跡)と遺跡名および調査年度を略号で表現した。調査で記録したものすべてが、この略号によって管理されている。

遺構名については、調査において汎用的な遺構略号を用いた。遺構略号は、堅穴住居を「SI」、土坑を「SK」、溝を「SD」など表記し、これら種別毎に「01」から番号を付与した。

#### 2 整理作業

発掘調査終了後の整理作業は、当センターの室内で行ったが、遺物の水洗は現場作業の合間をみて実施することもあった。

##### 遺構実測図・写真

遺構実測図はデータを基に編集し、遺構図版としての体裁を整えた。この作業は発掘現場で取得した点のデータを基に作成しており、これら各測点は変更せざる點や線を加えて整えた。これらのデータの座標値等はデータとしても保存している。発掘調査現場で撮影した写真は、デジタル写真データは台帳を作成し、データ毎フォルダ整理をおこなった。これらは遺構毎に分類してある。また、ネガフィルムについては、それぞれアルバムによる整理をおこなった。

##### 出土遺物（土器・石器）

すべて洗浄をおこない、土器については注記を行い、その過程を経たものの接合作業を行った。これらの中、本書に掲載する遺物を選択し、実測と写真撮影をおこなった。選択基準は、実測可能な残存状態の良いもの原則とし、土器類の破片については、特徴から時期が判明するもの、口縁部のあるも

のを中心とした。遺物の実測作業は、原寸での作業を基本とした。原寸で行った実測図は、縮尺を整えトレースを行い、図版用の版下を作成した。また、縄文土器や古代の土器底部などの器表面は湿拓により拓本とした。遺物の写真撮影は、フルサイズ一眼レフデジタルカメラを用いて当センター内にある写場でおこない、撮影したデータは編集し、写真図版として本書に掲載した。

#### 保管・収納

すべての処理が終了した記録類および遺物は、県立埋蔵文化財センター所定の場所へ収納した。遺物は、掲載遺物と不掲載遺物に分けて収納しており、それぞれコンテナに必要事項を記載したラベルを貼付し保管している。

### 3 記載方法

#### 掲載遺構

遺構名は、調査で使用した遺構略号から新たに本書記載用の遺構名へと変更した。その変更については下記の一覧表で示した（第2表）。

#### 掲載遺物

本書に掲載した遺物は、掲載順に種別を問わず通し番号により掲載番号を付与した。これは本書に掲載された遺物実測図・掲載遺物一覧表・写真図版に付記してある番号が共通している。

#### 図版・写真図版

掲載した遺構および遺物実測図のスケールは図版にスケールバーを付けた。遺構の縮尺は適宜選択し、遺物は土器3分の1、剥片石器2分の1・石製品4分の1で掲載した。なお、写真図版の掲載遺物については縮小を基本とし、図に準拠しつつそれぞれ任意の大きさとした。

**第2表 遺構名新旧対照表  
間野村遺跡**

調査時	掲載時
SK04	土坑1
SK05	土坑2
SK06	土坑3
SK07	土坑4
SK08	土坑5
SK09	土坑6
SK10	土坑7
SK13	土坑8
SK19	土坑9
SK20	土坑10
SK21	土坑11
SK22	土坑12
SK23	土坑13

調査時	掲載時
SK24	土坑14
SK25	土坑15
SK16	陥し穴1
SK17	陥し穴2
SK18	陥し穴3
SK01	土坑26
SK02	土坑27
SK03	土坑28
SK14	土坑29
SK15	土坑30
SK26	土坑31
SK11	井戸1
SK12	井戸2

調査時	掲載時
SI01	豊穴建物1
SI02	豊穴住居1
SI03	豊穴住居2
SD01	堀1
SD02	堀2
SD03	溝1
SD04	溝2
SD05	堀3
SB01	掘立柱建物2
SB02	掘立柱建物3
SB03	掘立柱建物1
SB04	掘立柱建物4

#### 塹遺跡

調査時	掲載時
SI01	豊穴住居1
SI02	豊穴住居2

調査時	掲載時
SK01	土坑1
SK02	土坑2

調査時	掲載時
SD01	溝1

## IV 間野村遺跡

### 1 概要と層序

#### (1) 概要

今回の発掘調査範囲は道路用地であり、東西方向に長い平面形状である。標高は東側が高く西側が低くなる地形である。調査前の現況は、高い方である東側が宅地、低い方である西側が草地として利用されており、現況標高は調査区東端で約97m、西端で約96mであった。調査前の現況では、東西両端の高低差は比較的小さくとどまるが、本来の地形はさらに大きな高低差だったと推測される。すなわち、近・現代に東側を削平、西側を盛土された結果である。これは基本層序断面からも観察できる。発掘調査によって検出した遺構は、縄文時代から近・現代に属し、特に竪穴住居を含む古代および竪穴建物を含む中世においては集落の一角であったことが判明した。出土遺物は縄文土器、石器、土師器・須恵器、かわらけ、中世陶磁器などであるが、古代の出土遺物が最も多く認められる。

#### (2) 層序

調査範囲で確認できた遺跡の基本的な層序は調査区内の微地形による高低差とおおむね呼応している。基本層序は調査区に設定した4箇所のトレンチで確認し、これらトレンチは東から順に基本層序A～D（第5図、写真図版5）とし、掘削と断面の記録をおこなった。

I層は、大まかに2分でき、a：表土・現代盛土・擾乱層、b：旧表土などで構成される。

I a層：10YR3/2 黒褐色シルト（粗粒砂混じる）現代のゴミなどの夾雜物や植物の根が蔓延り土壤の空隙が多い。

II層は、いわゆる黒ボク土で、柔らかな火山灰起源の埴土層である。上面付近で古代の土器などの遺物が散見される。

II層：層上位10YR2/2 黒褐色シルト、層下位は10YR2/1 黒色シルト（中粒砂少量混じる）。

III層は、II層よりも明るい色調で締まりのある火山灰起源の漸移層である。地点によって層厚が異なり、部分的に上下に細分できる。上下の層界は不明瞭だが、層界付近でテフラとみられる粒が散見される。

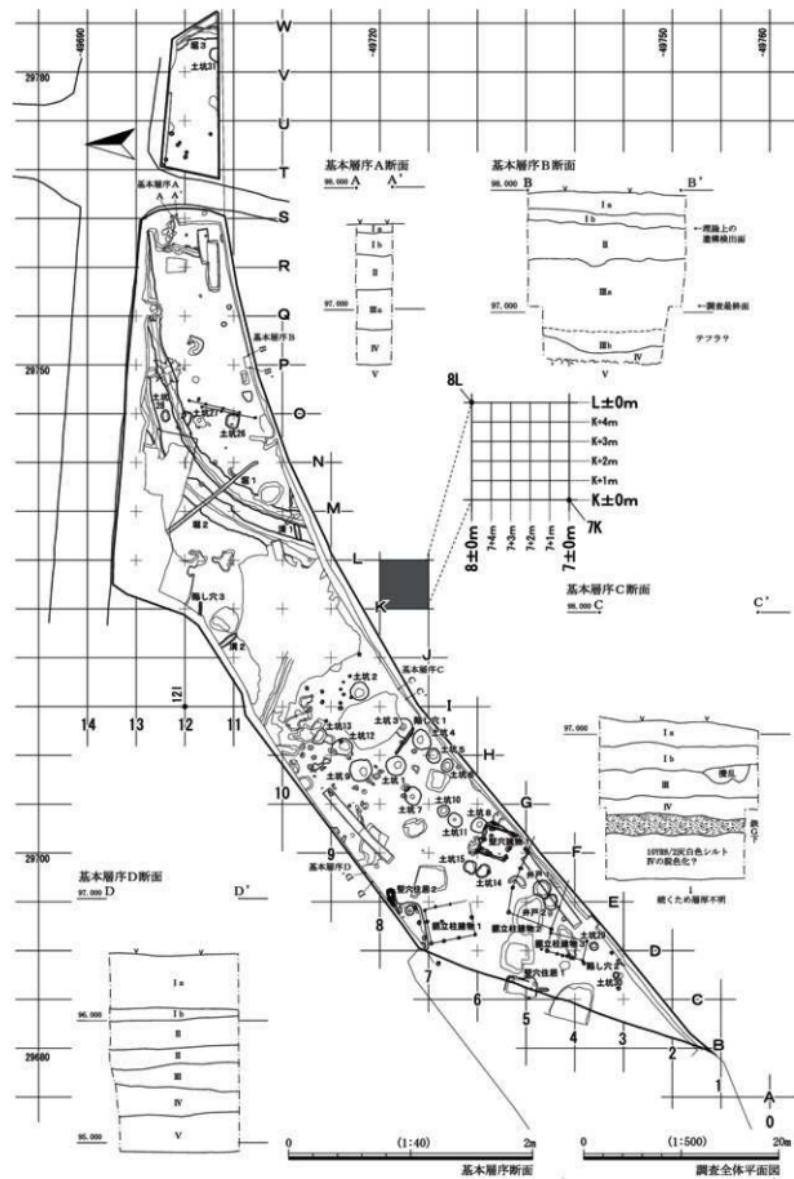
III層：10YR4/2 灰黄褐色シルト～10YR4/4 褐色シルト（細粒砂極少量混じる）。

IV層は、より明度の高い色調、火山灰起源の風成層である。遺物はもちろんのこと礫など不純物もほぼ含まれない。強い締まりと微かな粘性が認められる。基本層序Bでは、鉄分の沈着が著しく、固化した褐鉄鉱が層を形成している。この付近の遺構の様子からみて縄文時代以降に沈着化が進み、形成されたものと考えられる。

IV層：10YR4/4 褐色シルト～10YR5/6 黄褐色シルト（微粒砂混じる）。

V層は、この段丘を構成する砂礫主体の堆積層であり、北上川河床面まで連続するものと思われる。調査区高位面のみ確認したが、低位面では深く沈んでいると思われ、掘削が及んでいない。

V層：10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂～大疎（シルト・砂質シルト極微量混じる）。部分的に鉄分の沈着がみられる。



第5図 透構配置

## 2 令和2年度調査の遺構と遺物

### (1) 繩文時代

検出した縄文時代の遺構は土坑15基、陥し穴3基である。いずれの遺構も良好な出土遺物は認められなかつたが、遺構の特徴や埋土の様子などから縄文時代に帰属するものであると考えた。11基の土坑はすべて円形基調で群をなすが、いずれも出土遺物が認められないため構築年代の詳細を知ることができない。しかし、遺構の特徴が酷似していることから同一の年代に構築されたものとみられる。

今回の調査で出土した縄文時代の遺物は、縄文土器片1点と石鏃1点が出土した。

#### 土坑1(第6図、写真図版6・7)

調査区中央部7Gに位置し、この遺構を確認したIV層上面は標高約96.3mである。本来の遺構切り込み面は、III層上面である可能性がある。平面円形のプランであるが、中央に一回り小さい円形の広がりが確認でき、色調の異なる二重の円に見える。検出時の中央部にみられる円形のプランは埋土最上層の範囲である。この遺構は平面円形の椀形の凹みである。底面は緩やかな凹面である。埋土は3層の堆積が確認でき、それぞれ自然流入した状況が観察できる。最上層はIII層である漸移層に酷似し、そのとおりIII層由来であるとすれば、縄文時代でもかなり古い時期に掘削、埋没した遺構であると推定される。埋土にはII層由来の黒色の土壤も確認できないことからもII層の黒色化が進む以前の遺構である可能性が言及できる。性格は不明であるが、埋め戻されずに機能した遺構であるとみられる。完掘したが、遺物は出土しなかつた。

#### 土坑2(第6図、写真図版6・7)

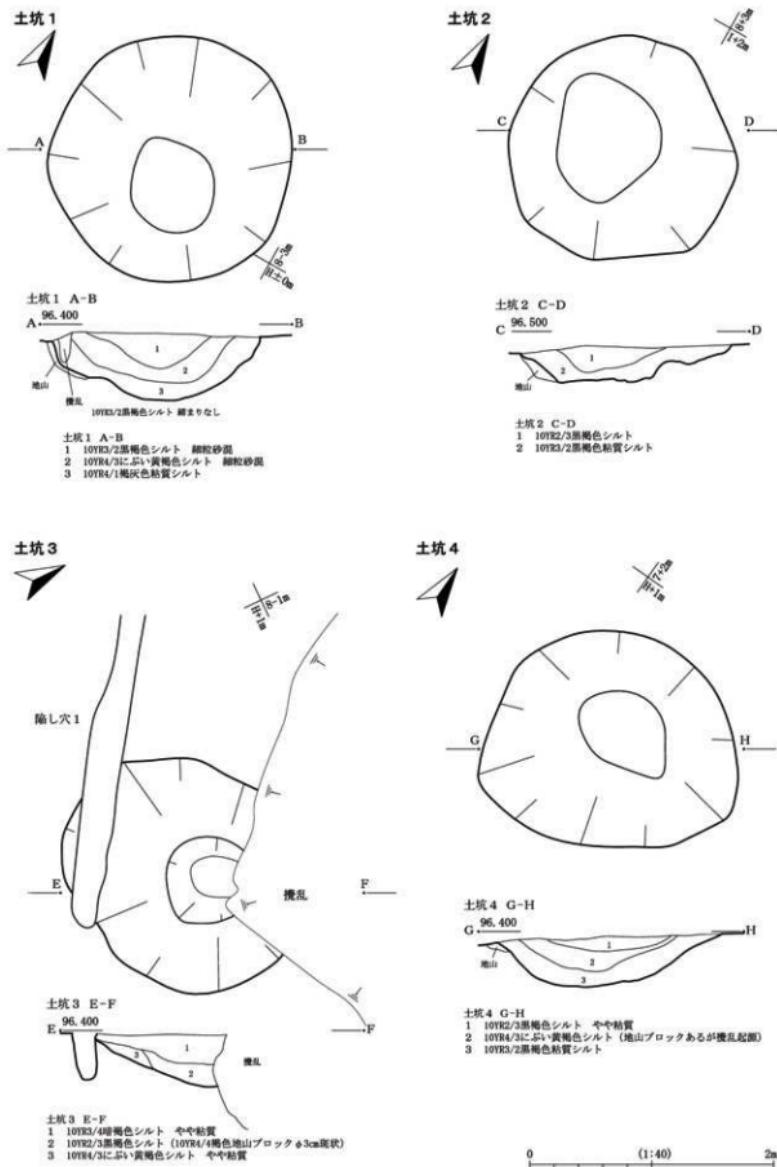
調査区中央部8Iに位置し、削平されたIV層で検出した。検出面の標高は約96.4mである。平面は略円形であるが、鉄分の沈着が著しく、遺構本来の形状をやや逸している。遺構は浅く、底面は鉄分の沈着によって大半が凹凸面である。したがって、本来の遺構底面の様子とは異なっている可能性が高い。埋土は上下2層からなり、いずれも自然流入したものと思われる。埋土には不純物は含まれない。土坑1同様に縄文時代でもかなり古い遺構である可能性が考えられる。また、鉄分の沈着・凝固の現象が生じたのは、この遺構構築以降である可能性が考えられる。性格は不明であるが、埋め戻されずに機能する遺構であるとみられる。完掘したが、遺物は出土しなかつた。

#### 土坑3(第6図、写真図版6・7)

調査区中央部7Hに位置し、微かに検出面より色調の濃い円形のプランを確認した。削平されたIV層で検出し、この面の標高は約96.4mである。遺構北側3分の1大規模な擾乱端部によって破壊されている。また、遺構南側は陥し穴1によって切られている。遺構は平面円形で浅い掘り鉢状を呈する。埋土は3層からなり、最上層はやや濃い色調で粘質気味である。中層には地山起源のブロック土が斑状に少量認められる。いずれも自然流入したものであると考えられる。埋土にはII層由来の黒色の土壤が確認されず、なおかつ最上層はIII層に近い土壤であることから、やはり性格不明ながら縄文時代でも古い時期に構築された遺構であるとみられる。これは、II層由来の埋土が堆積している縄文時代の溝状陥し穴に切られることからも納得できる。完掘したが、遺物は出土しなかつた。

#### 土坑4(第6図、写真図版8・9)

調査区中央部6Hから7Hにかけて位置する。土坑3と土坑5に挟まれるようにそれぞれと近接するが、直接的な切り合いは認められない。周辺の土坑と同様に削平されたIV層の中で微かに色調の濃



第6図 土坑 1 ~ 4

い円形のプランを確認した。また、円の中央部はより濃い色調の上層の範囲が円形に確認できる。検出面の標高は約 96.3m である。平面形態は円形で、削平面で検出したためかやや浅い楕形を呈する。埋土は上・中・下の 3 層からなり、上層はやや粘質の黒褐色シルトである。中層にブロック土が認められるが、局所的で主体の埋土と大きく異なるものではない。このことから、ブロック土も植物の擾乱に起因するものと判断される。最上層はⅢ層である漸移層に酷似しており、そのとおりⅢ層由来であるとすれば、縄文時代でもかなり古い時期に掘削、埋没した遺構であると推定される。埋土には黒色化したⅡ層由来の土壤が確認できることからも同様のことが言及できる。性格は不明であるが、埋め戻されずに機能する遺構であるとみられる。完掘したが、遺物は出土しなかった。

#### 土坑 5 (第 7 図、写真図版 8・9)

調査区中央部 7G から 7H にかけて位置する。土坑 4 と土坑 6 に挟まるようにそれぞれと近接するが、直接的な切り合いは認められない。周辺の土坑と同様に削平されたⅣ層の中で微かに色調の濃い円形のプランを確認した。また、円の中央部はより濃い色調の上層の範囲が円形に確認できる。検出面の標高は約 96.3m である。平面円形で、隣接する土坑 4 よりも円はやや小さく、土坑 6 よりも円はやや大きい。底面に向かって緩やかに窄まる楕形の土坑である。埋土は 4 層に分層できるが、最下層は地山の可能性もあるが、掘削前は地山であるⅣ層よりも粘度があったため掘り分けた。最上層はⅢ層の漸移層由来と思われ、このことから縄文時代でもかなり古い時期に掘削、埋没した遺構であると推定される。性格は不明であるが、埋め戻されずに機能する遺構であるとみられる。完掘したが、遺物は出土しなかった。

#### 土坑 6 (第 7 図、写真図版 10・11)

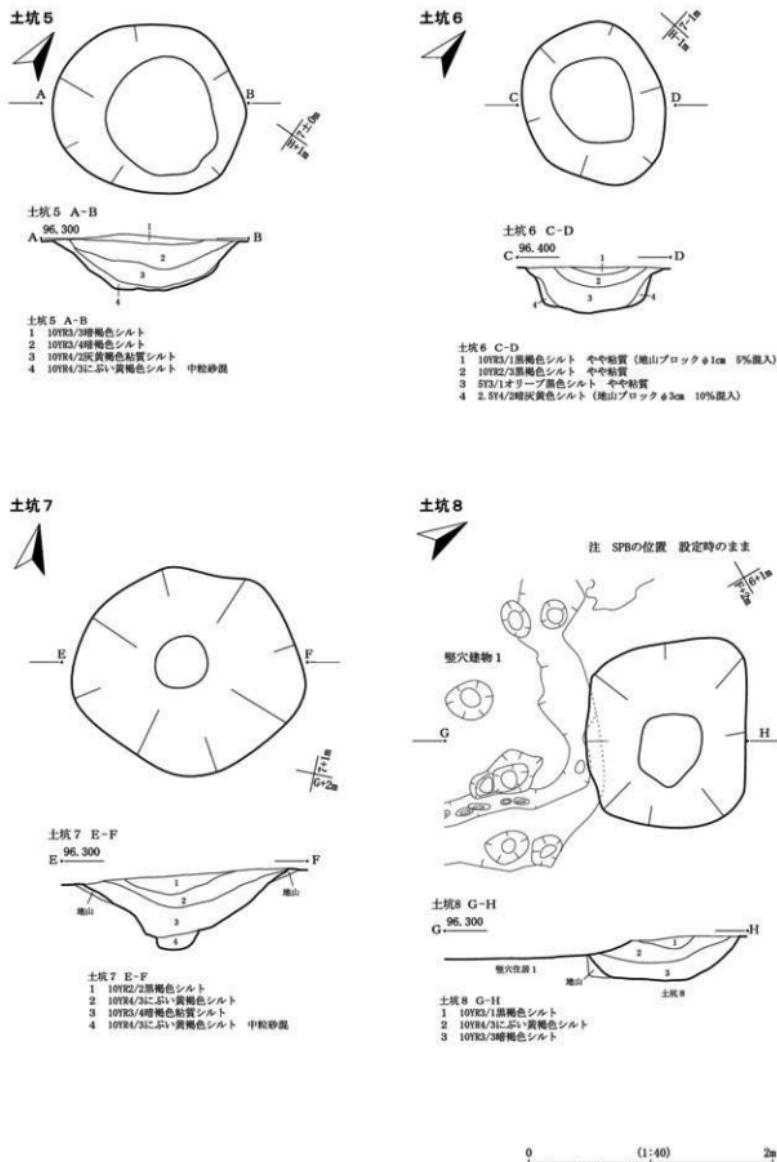
調査区中央部 6G に位置する。土坑 5 の南西に近接するが、直接的な切り合いは認められない。周辺の土坑と同様に削平されたⅣ層の中で微かに色調の濃い円形のプランを確認した。また、円の中央部はより濃い色調の上層の範囲が円形に確認できる。検出面の標高は約 96.3m である。平面円形で近接する土坑 5 よりもやや平面規模が小さい。断面形態は側壁が急角度で立ち上がり、壁が緩やかに立ち上がる周辺の土坑よりも桶形に近い。埋土は 4 層に分層される。最下層は壁の自然崩落によるものであると考えられる。その他は土坑外部から自然流入したものと判断される。最上層はやや粘質であるが、Ⅲ層に近似する。これはこの遺構が縄文時代でもやや古い時期のものである可能性を示唆している。ただし、性格は不明である。遺物は出土しなかった。

#### 土坑 7 (第 7 図、写真図版 10・11)

調査区中央部 7G、土坑 1 の南西、土坑 10 の北東に位置する。削平されたⅣ層の中で微かに色調の異なる円形のプランを検出した。やはり、他の土坑と同様に円の中央部はより濃い色調であり、最上層の堆積範囲となっている。検出面の標高は約 96.2m であり、周辺に擾乱が分布するが、それ以外は平坦な検出面である。断面形態は側壁が緩やかに開く鉢形を呈し、底面中央部が微かに凹む。埋土は 4 層に分層でき、最下層に砂粒が混じり、下層に粘性が確認できる。いずれも遺構外部から自然流入した堆積であると考えられる。最上層はⅢ層である漸移層に酷似し、そのとおりⅢ層由来であるとすれば、縄文時代でもかなり古い時期に掘削され、埋没した遺構であると推定される。また、Ⅲ層より上位層の混入は認められない点も他の土坑と同じである。遺構の性格・時期の詳細も不明である。

#### 土坑 8 (第 7 図、写真図版 10・11)

調査区中央部やや西寄り 5 ~ 6F、土坑 11 の南に位置する。中世の竪穴建物 1 と一部重複し、遺構南側埋土を建物側壁や周溝によって切られる。したがって、土坑は竪穴建物よりも古いことは明らかである。周辺の土坑と同様に削平されたⅣ層の中で微かに色調の濃い円~方形のプランを確認した。



第7図 土坑5～8

また、プランの中央部はより濃い色調の上層の範囲が円形に確認できる。検出面の標高は約 963m である。平坦な底面と緩やかに立ち上がる側壁であり、断面鉢形を呈する。埋土は 3 層に区分でき、上層と下層はやや濃い色調だが、中層は地山に酷似する褐色のシルトである。他の土坑同様に、上層がⅢ層に近く、埋土にⅡ層等の混入が認められないことから考えて、縄文時代でも古い遺構である可能性が高い。ただし、性格は不明であり、遺物が出土しておらず、詳細な時期も不明である。

#### 土坑 9 (第 8 図、写真図版 12・13)

調査区中央部 8G に位置する。削平されたⅣ層の中で微かに色調の異なる円形のプランを検出した。やはり、その他の土坑と同様に円の中央部はより濃い色調であり、最上層の堆積範囲となっている。検出面の標高は約 963m であり、周辺に擾乱が分布するが、それ以外は平坦な検出面である。平面はやや歪な円形である。断面形態は東端部が突出するような杓子状を呈する。埋土は 4 層に区分でき、下位の 2 層は地山と区分が難しいが、やや粘性を帯びている点、軟質である点が地山とは異なる。埋土下層よりフレイクが 1 点出土したが、人為的なものかどうかも含め不明である。他の土坑同様に、上層がⅢ層に近く、埋土にⅡ層等の混入が認められないことから考えて、縄文時代でも古い遺構である可能性が高い。ただし、性格は不明であり、遺物が出土しておらず、詳細な時期も不明である。

#### 土坑 10 (第 8 図、写真図版 12・13)

調査区中央部西寄り 6F の東隅に位置する。削平を受けたⅣ層で微かに暗い色調の円形プランを確認した。比較的小規模の平面円形、皿状を呈する土坑である。埋土は上下 2 層からなり、いずれも自然堆積である。下層は地山Ⅳ層にかなり近い。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。ただし、その様相は他の円形土坑と共通するため、縄文時代でも古い遺構である可能性が高い。

#### 土坑 11 (第 8 図、写真図版 12・13)

調査区中央部西寄り 6F に位置する。土坑 10 に近在するが、直接的な重複関係はみられない。削平を受けたⅣ層で微かに暗い色調の円形プランを確認した。平面円形で浅い皿状を呈する。埋土は上下 2 層からなり、いずれも自然堆積である。近在する土坑 10 と同じような埋没状況にあったとみられる。出土遺物はなく、時期・性格ともに不明である。ただし、その様相は他の円形土坑と共通するため、縄文時代でも古い遺構である可能性が高い。

#### 土坑 12 (第 8 図、写真図版 14・15)

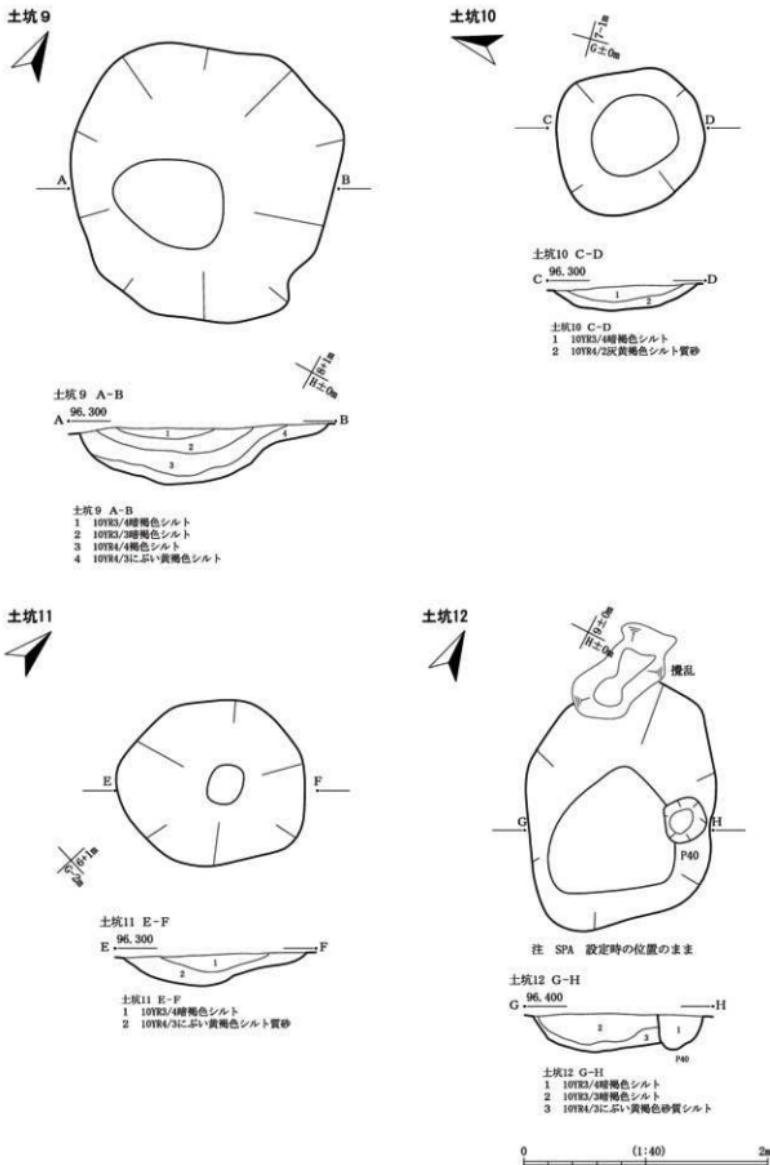
調査区中央 8H に位置する。単独の柱穴 40 および北側を擾乱によって切られる。削平を受けたⅣ層で微かに暗い色調の円形プランを確認した。平面不整な楕円形を呈する。埋土は上下 2 層の自然堆積層からなる。下層はやや砂質傾向である。遺物は出土していない。特徴から他の円形土坑と同様、縄文時代の土坑であると考えられる。

#### 土坑 13 (第 9 図、写真図版 14・15)

調査区中央 9H 南に位置する。擾乱に囲まれている中、削平されたⅣ層でプランを検出した。平面は楕円形を呈するものとみられる。埋土は明褐色シルトの單層で、遺物やその他不純物は認められない。特徴から他の円形土坑と同様、縄文時代の土坑であると考えられる。

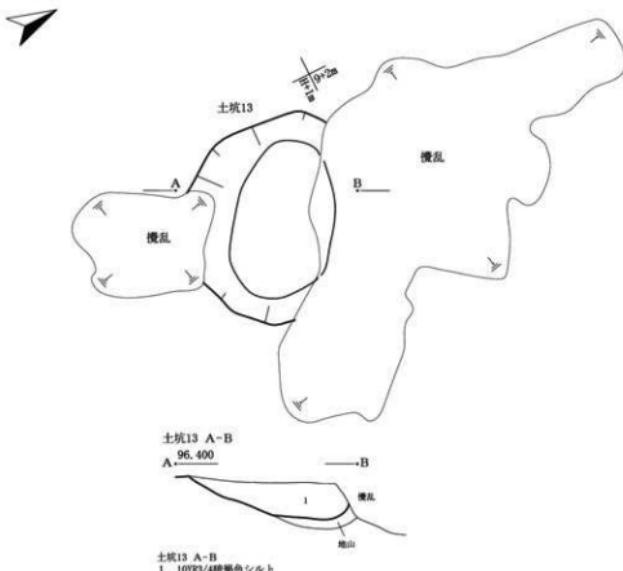
#### 土坑 14 (第 9 図、写真図版 14・16)

調査区西側 5E に位置する。土坑 15 に隣接するが、直接的な切り合い関係は認められない。Ⅳ層で周りのⅣ層よりも微かに暗い円形のプランを確認した。平面は不整な円あるいは楕円形である。埋土は上下 2 層からなり、やや粘質傾向のシルトである。遺物は出土せず、時期の特定も困難であるが、埋土の特徴等から縄文時代の古い時期に構築された土坑であると考えられる。

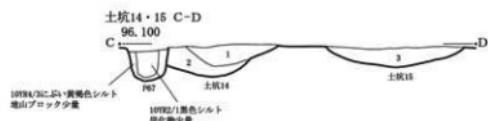
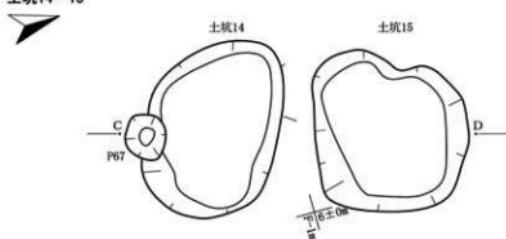


第8図 土坑9～12

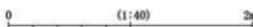
## 土坑13



## 土坑14・15



土坑14・15 C-D  
1 10YR4/1褐色シルト やや粘質  
2 10YR4/3にぶい黄褐色シルト (中粗砂混)  
3 10YR4/1褐色シルト やや粘質



第9図 土坑 13～15

**土坑15（第9図、写真図版15・16）**

調査区西側6Eに位置する。土坑14に隣接するが、直接的な切り合い関係は認められない。IV層で周りのIV層よりも微かに暗い円形のプランを確認した。平面は不整な円形である。埋土は上下2層からなり、やや粘質傾向のシルトである。遺物は出土せず、時期の特定も困難であるが、埋土の特徴等から縄文時代の古い時期に構築された土坑であると考えられる。

**陥し穴1（第10図、写真図版16・17）**

調査区中央7Hに位置する。土坑3と一部重複が認められ、土坑3南側を切る。削平されたIV層で細長い溝状のプランを明確に検出した。遺構は北西から南東方向に延びる。遺構両壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黒色シルトと黒褐色シルトからなる自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、縄文時代前期以降に帰属するものとみられる。本来は漏斗状の断面形態であると考えられるが、幅広の上部は認められない。このことからも上部が大きく削平されている可能性が高く、本来はさらに深い遺構であったことが推測される。規模や形態から考えて縄文時代の陥し穴であると判断される。

**陥し穴2（第10図、写真図版17）**

調査区西側3C南端に位置する。調査区南端にあるため遺構の全体を検出することはできなかった。III層上面で検出可能であることは、調査区際壁面にて確認した。埋土はやや粘質傾向のシルトで濃いである。自然に周囲から流入したものと考えられる。埋土より遺物は出土しなかったが、規模や形態から考えて縄文時代の陥し穴であると考えたが、あまり深くないため別の遺構である可能性もある。

**陥し穴3（第10図、写真図版16・17）**

調査区東側11Jから11Kにかけて位置する。調査区北端に位置するため遺構の一部のみを調査した。大幅に削平を受けた地点のIV層で暗い色調の長細い溝状プランを検出した。平面形態は細長い溝状で、遺構両壁は垂直に立ち上がる。埋土は地山ブロックを含む層と含まない層の互層となっている。いずれもシルト主体であるが、地下水の影響で色調が変化している。これは、以降の調査中も水が壁面や底面から染み出していたこととも関係すると思われる。調査した範囲で埋土からの遺物出土は認められなかった。縄文時代に帰属すると考えられるが、前期以降のものとみられる。本来は漏斗状の断面形態と考えられるが、幅広の上部は認められない。上部が大きく削平されている可能性が高く、本来はさらに深い遺構であったことが推測される。規模や形態から縄文時代の陥し穴であると判断される。

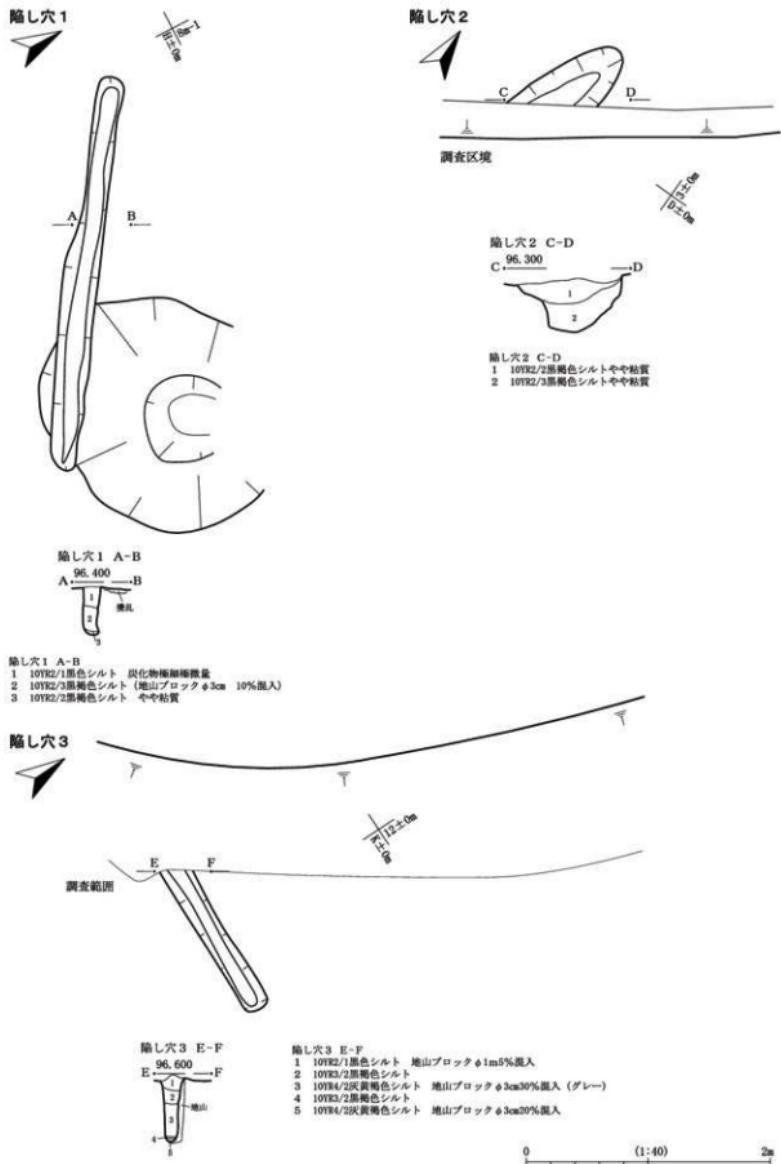
**出土遺物（第11図、写真図版33・39）**

縄文時代の出土遺物は、縄文土器片1点(1)と石錐1点(68)、フレイク1点(69)である。縄文土器、石錐は縄文時代の遺構と直接関わらないが、フレイクは縄文時代の土坑埋土より出土した。

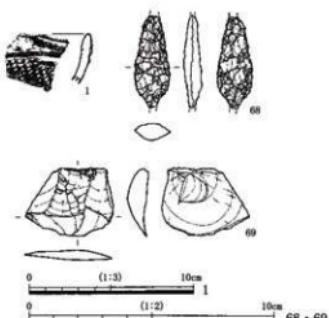
1の縄文土器は古代の竪穴住居2より出土した混入遺物である。小片で摩滅著しいが、外面には貼付の細い隆線が認められる。文様構成から縄文時代中期(大木8a)の深鉢であると考えられる。68の石錐は北端部調査区間12Qの堀1や凹門箇所で黒褐色シルトの埋土より出土した。茎部が作り出された有茎凸基形の石錐である。茎部・錐身とともに先端部は欠損がみられる。時期は不明である。69のフレイクは、土坑9の埋土下層より出土した。今回検出した縄文時代の土坑群で出土した遺物はこれのみであるため、フレイクであるが掲載した。縄文時代浅黄橙～褐色を呈する石材である。刃部は作り出されていない、使用痕も認められない。黄橙色を呈する凝灰岩である。

**(2) 平 安 時 代**

今回の調査では平安時代の遺構として竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟土坑5基、溝2条、堀2条を検出した。竪穴住居の調査から、遺跡内は9世紀の集落に該当するとみられる。2条の堀は、時期



第 10 図 陥し穴 1 ~ 3



第11図 出土遺物（縄文時代）

不明であるが、現段階ではこの時代に位置付けている。出土遺物は竪穴住居や土坑から出土した9世紀を主体とする土師器・須恵器が出土している。

#### 竪穴住居1（第12図、写真図版18・19）

調査区の最も西端、4C・5Cに位置する。調査区西端は農業用水によって区切られている。この遺構の部分的あるいは大半が用水路の西に続くものと思われる。ただし、用水路よりも西側は水田となっており、その田面は竪穴住居床面よりも低くなっている。よって、統きの遺構は開田時に削平されて失われている可能性が高い。土坑31・32はこの遺構を切るが、検出時はこれら土坑のプランは不明であったが、断面等で確認したものである。

II層の黒色シルト上面で概ね方形のプランを確認したが、調査区端水路際に關しては、表土および盛土を除去すると、床面近くの遺物がすでに顔を覗かせていた。遺構西側が失われているが、平面形態は概ね方形であるとみられる。この方形プランの南にはカマドから延びる煙道が認められ、南カマドであることがわかる。この煙道と軸方向を同じくする南側、東側の壁面が確認できただが、異なる軸方向の方形プランも重なるように存在することが、遺構掘削の過程で判明した。すなわち、このプランと検出したカマドから煙道とは別の遺構と考えられ、規模・平面形態は近いものの、切り合い関係を有する別の竪穴住居であると考えられる。しかし、出土遺物の分別はかなり困難であった。

埋土は、黒褐色のシルトを主体とする。両プランの層界は不明瞭である。これはモグラや水路の構築時の攪乱等が識別を困難にしたためである。床面は段差が認められ、両プランの床面の高さが異なることを示している。

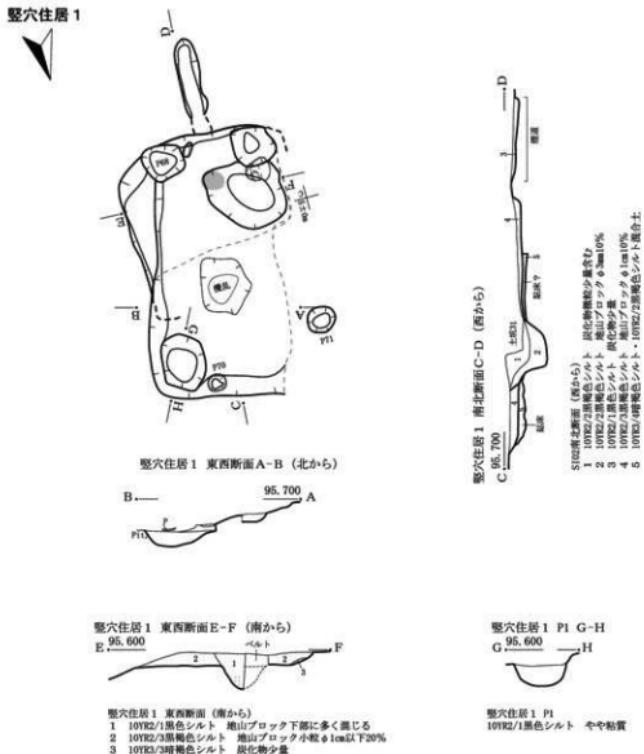
床面ではカマドの燃焼部とみられる焼土を確認した。純粹な床面よりも下位で検出した可能性も考えられるが、平面的な位置関係は煙道部と適切な位置関係である。先述したとおり、遺物の分別、埋土の層界ともに不明瞭であるため先後関係は十分に掴めなかった。

出土した遺物は9世紀代の土師器と須恵器が出土したが、時期差を認め得る個体が存在していないため、2つの遺構であったとしてもかなり近い時代のものであった可能性が高い。

#### 竪穴住居2（第13～15図、写真図版20～25）

調査区北西隅7D位置する。遺構の大半は調査区外へと連続する。地山黒ボク土であるII層上面でより淡い黒色の三角形プランを検出した。同時に煙出し部に施された礎の廻いも検出している。この礎の検出作業時には最上段の一部を取り外してしまった。竪穴住居本体と煙出しとの間には、煙道の天井石の上部を塞いだ構築土が溝状に検出できた。この構築土は、検出面であるII層の混入しないIII層およびIV層を主体とする混合土であり、II層上面の黒色シルトとは明瞭に異なる。すなわち、この煙道天井部の構築土は、煙道や煙出しの掘削土でも礎を組み込む際の基部の微調整として掘削された発生土が用いられた可能性が考えられる。

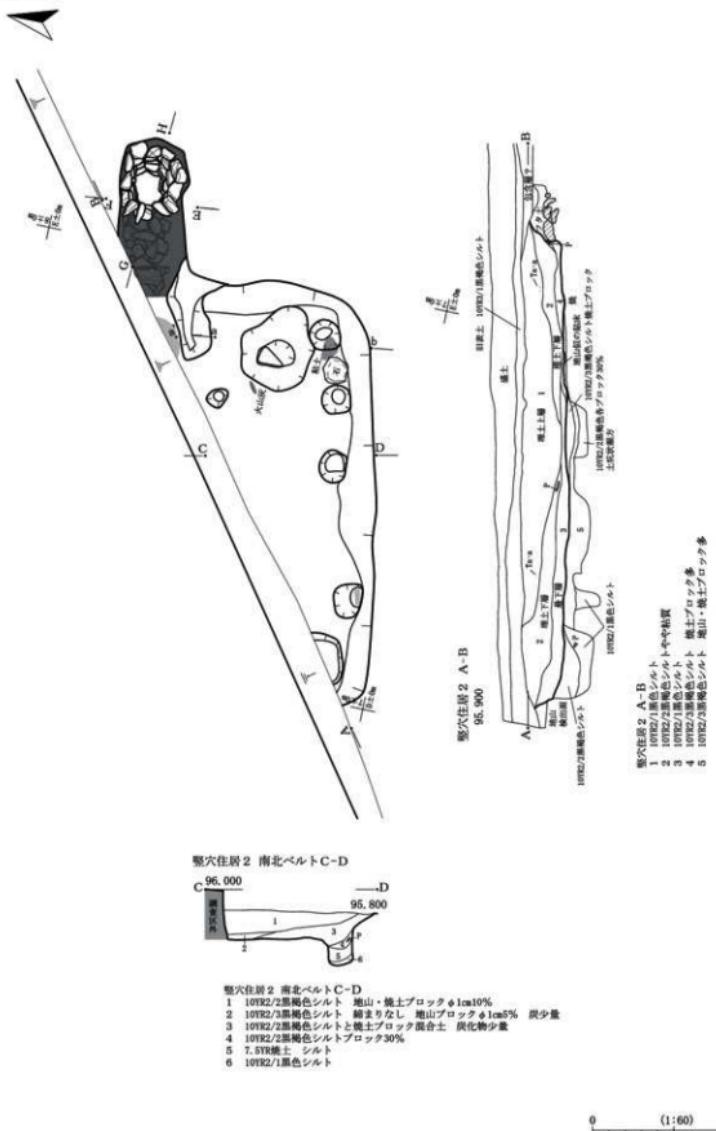
平面形態は大半が調査区外に延びるが、南北隅および南東隅の両隅が検出できたことで概ね正方形を呈するとみられる。規模は、調査区内で確認できた東西方向の南壁が5mをわずかに超える。南北方向の北壁は、南西隅から煙道まで20mである。床面までの深さは1.2mであり、これは調査区際の壁面で確認しているものであるため、機能時の深さにより近い値であると思われる。



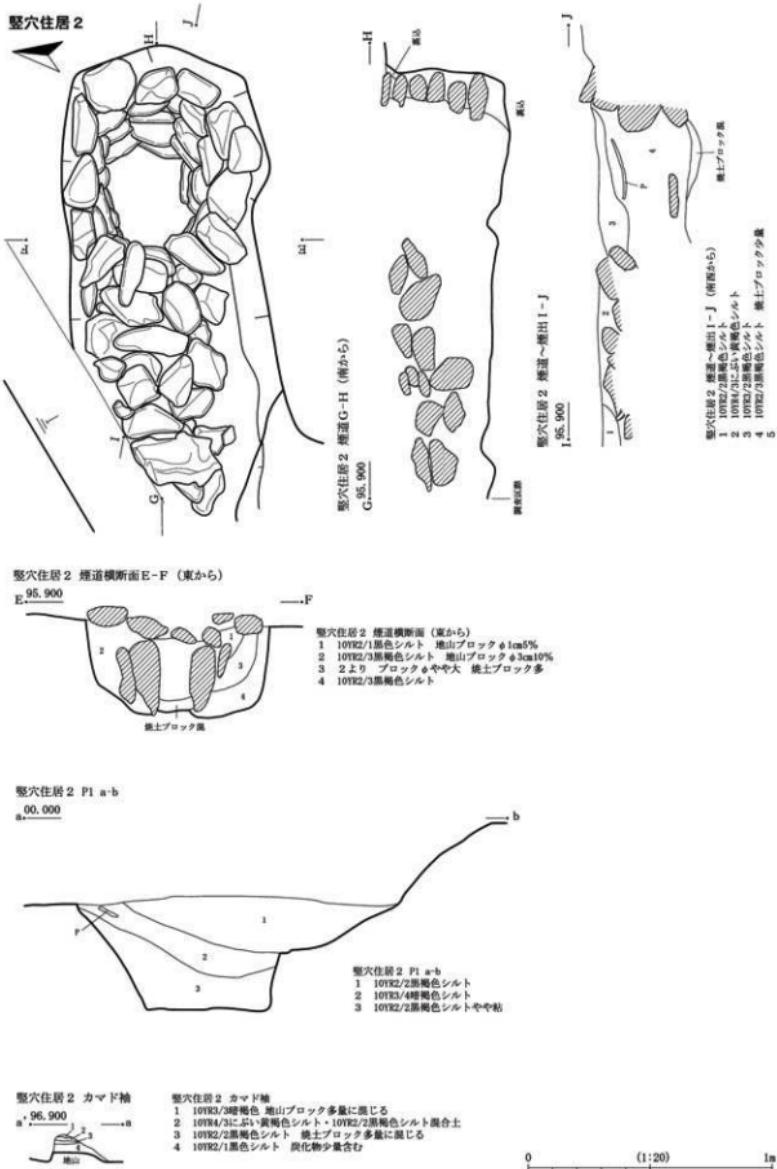
第12図 堅穴住居1

埋土は、住居内を埋めている埋土については大きく3層からなる。調査時の掘削単位は上層、下層、最下層とそれぞれ呼称して調査を進めた。上層は暗色の強い黒色シルトである。II層由來の自然堆積であり、下層が埋積した後の中央が凹んだ状態で流入したものである。すなわち、この埋土上層は、時間幅不明ながら、比較的長い時間をかけて徐々に堆積したものであると理解できる。上層には多くの遺物が含まれないことから、住居の最終埋没時にはこの地点を含めた周間に集落が活況でなかったことを示している。また、この埋土上層には火山灰(Ⅵ章に分析結果)の混入が少量認められ、外貌からも十和田a火山灰であると推測された。分析結果も十和田a火山灰であることが確実となり、10世紀前半、あるいはそれ以降に最終埋没したものとみられる。下層は黒褐色シルトを主体とし、軟質で、周囲のII層よりも淡い色調である。平面的な検出時にはこの下層とII層の区分によって検出をおこなった。埋土下層は遺物を一定量含み、焼土や炭化物等その他の不純物の混入も認められる。少なくとも10世紀前半以前に堆積を終えていたものと考えられ、上面は微妙に土壤化していることから、周囲よりも凹んだ地表面となって一定期間埋没が停止していたものと考えられる。最下層は黒色シルト

## 竪穴住居2

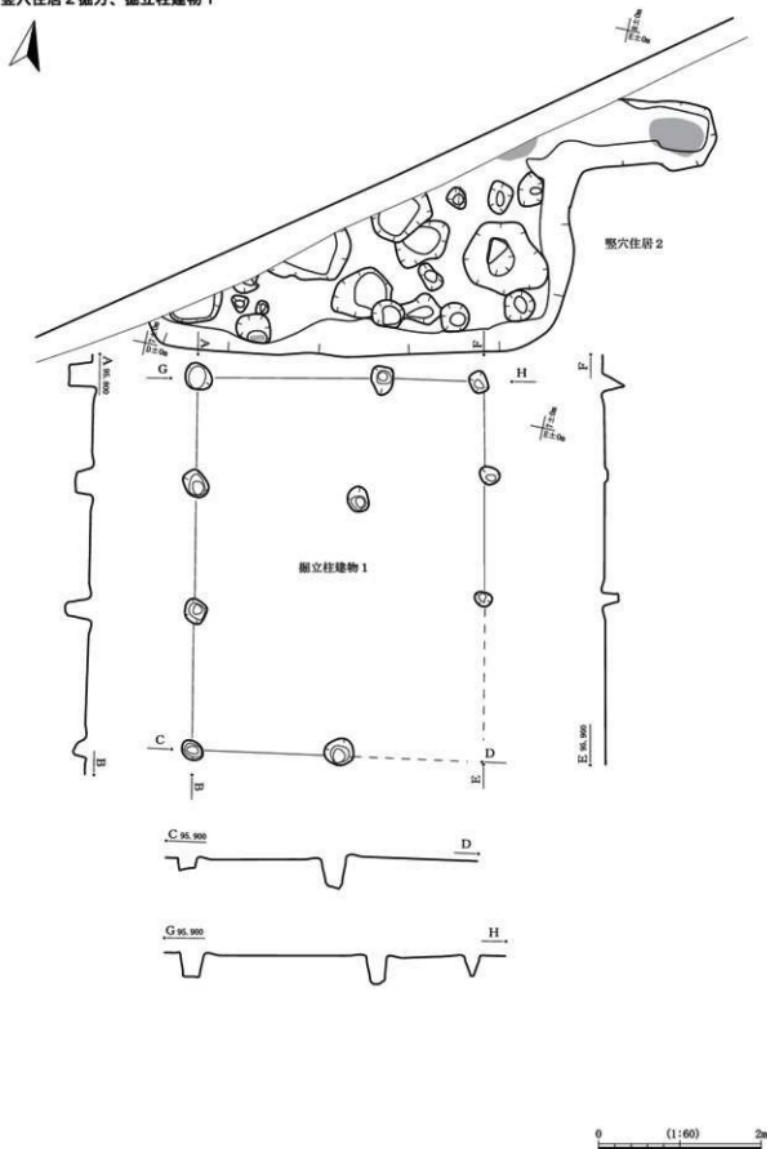


第13図 竪穴住居2 (1)



第14図 整穴住居2(2)

竪穴住居2 据立柱建物1



第15図 竪穴住居2（3）、据立柱建物1

ト主体であり、上屋の崩壊が進む頃周囲から自然流入したⅡ層起源のものであると考えられる。このことから、機能停止時には周囲の地表面はⅡ層であることが推測され、当然その上に堆積する下層とは大きく起源を異にしているということになる。したがって、下層の起源は周囲の地表面からの流入ではなく、何らかの構築土等に由来するものと推測される。想定される構築土として、住居掘削土を用いた周堤や屋根裾の補強土等の成因を考慮する必要がある。この下層の堆積状況からみて発生には人為が介在しているものの、堆積自体は人為的ではないようである。

床面は最下層を除去すると埋土と比べて硬化した平坦面が認められた。床面には炭化物や焼土の小粒が多く認められ、柱穴や土坑のプランが平面的に確認できた。地山削り出し部分は限定的で、大半が貼床となっている。

カマドは南袖のみ検出できたが、対応する北袖は調査区壁から調査区外に位置する。燃焼部は赤化しているが、その範囲は限定的である。

煙道は住居から東へ延びる。両側壁および天井部は礫によって構築されており、トンネル状の底面のみ地山面となっている。側壁は比較的大きく扁平な形状の礫を縦長方向に歯列状に並べられている。

煙出しは円筒状の場方に礫が積み上げられ、構築されている。この石組は調査で6段、検出時に取り外した最上段を加えると7段の石積みで構築されている。礫は平らな面を上にするように積み上げられており、煙道部、煙出し部とそれぞれ加工していない自然礫を計画的に用いている様子が看取される。数個は調査区外に存在すると思われるが、大小約90個もの礫が用いられている。

埋土、床面、その他付属施設から多くの土器が出土した。これらは9世紀前半代の土師器・須恵器であり、この時期に機能し、10世紀前半頃完全に埋没したものと考えられる。

#### 土坑26（第16図、写真図版26）

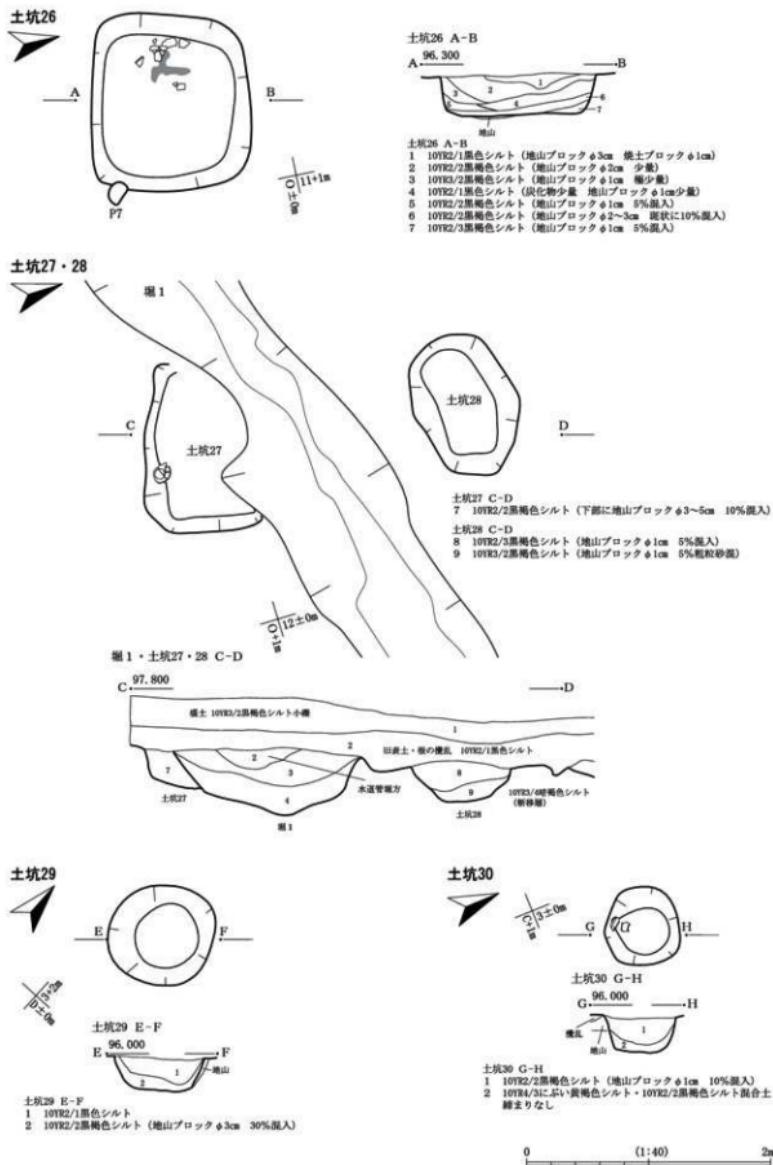
調査区東側、10N・11Nにかけて位置する。Ⅱ層上面で検出可能だったが、調査工程の都合上、Ⅳ層で検出した。平面方形、箱形の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。埋土は7層に細分され、いずれも様々な地山ブロックが認められることから、人為的に埋められたと判断される。調査時の埋土最上面において土師器甕がまとまって出土した。また、この土器を取り外すと、その下面では弱い焼土面を確認した（図は底面ではなく、最上面の様子を図化したもの）。性格は不明であるが、規模・形態・最上面の様子等を鑑みると墓壙である可能性が考えられる。掘削、埋葬、埋め戻し後あるいはその途中で何らかの祭祀行為がなされたと推測する。出土した土師器は9世紀のものであることから、この時期の土坑であると考えられる。

#### 土坑27（第16図、写真図版26～28）

調査区東側、11Nの北東隅に位置する。攪乱等多く不明瞭であったが、Ⅲ層上面で検出した。平面長方形、箱形の土坑であると推測されるが、堀1によって遺構の大部分が切られている。埋土は単層の黒褐色シルトであり、地山（IV層）起源のブロック土が少量混入する。ブロック土は動植物の擾乱である可能性も否定できないが、人為的に埋め戻された可能性を示している。南東隅の底面付近では約半分欠損した土師器甕が出土した。また、埋土中より出土した土師器甕片は堅穴住居2出土の破片と遺構間で接合しており、両遺構の近い関係性を示している。出土遺物からみて9世紀前半の土坑であると考えられ、土坑26と同様墓壙である可能性が考えられる。

#### 土坑28（第16図、写真図版27・28）

調査区西側、12N・12Oにかけて位置する。堀1と堀2の間でそれぞれと近接するが、直接的な切り合い関係は認められない。Ⅲ層上面で検出した。平面は長方形から梢円形を呈する。埋土は上下2



第16図 土坑 26～30

層からなり、いずれも埋め戻されたかのようにⅢ・Ⅳ層のブロック土が混入する。遺物は出土しなかつたが、遺構の特徴から土坑26・27と同様の時期、同様の性格を有する墓壙である可能性が考えられる。

#### 土坑29（第16図、写真図版28）

調査区東端部、3Dに位置する。Ⅲ層上面で検出したが、Ⅱ層で検出可能であると推定される。小規模な方形、箱形の土坑である。埋土は上下2層からなる。上層は黒色シルト、下層は黒褐色シルトであり、それぞれ竪穴住居2と酷似する。埋土中より土師器壺・壺の細片がそれぞれ1片出土した。遺構の性格は不明であるが、埋土や出土遺物からみて9世紀頃の土坑であると考えられる。

#### 土坑30（第16図、写真図版29）

調査区東端部、3Cに位置する。調査ではⅢ層上面で検出したが、Ⅱ層で検出可能であると推定される。ごく局所的に攪乱を受けている。小規模で方形、箱形である点は土坑29に共通する。埋土は上下2層からなり、黒褐色シルトの埋土上層の下位より土師器壺が略完形で出土したほか土師器壺片も同一レベルで出土した。これら出土遺物から9世紀の土坑であると推測される。ただし、遺構の性格は不明である。

#### 溝1（第17図、写真図版30）

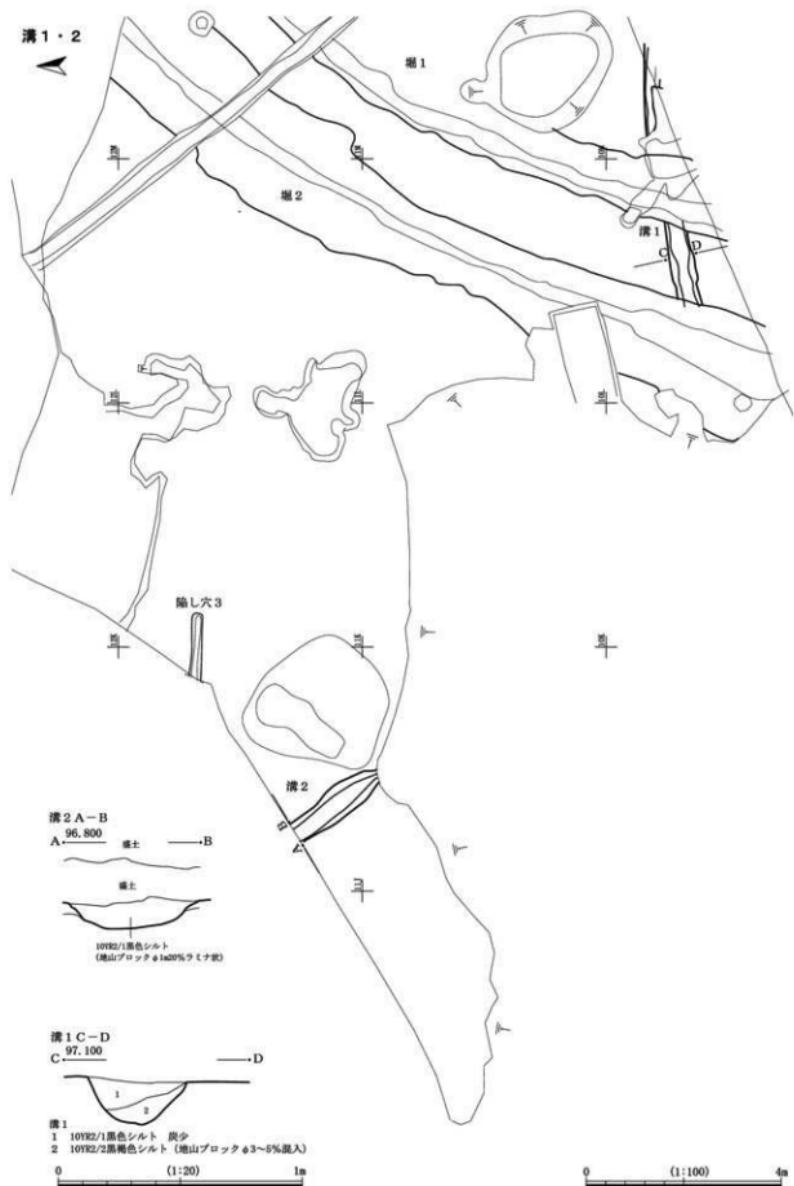
調査区東側、9Mに位置する。Ⅲ層で検出したが、上部を削平されておりⅡ層が本来の検出面であると考えられる。東西方向に細長く延びる溝である。東は調査区外へ延び、途中堀1に分断され、西は堀2および大規模な攪乱によってその行方は不明となる。溝の方向は東西方向であるため、東に向かって高くなる面である。顯著な流水痕跡は認められなかったが、流水したとして東から西へ向けて水は流れると推測される。埋土は黒色シルトと黒褐色シルトの上下2層からなり、埋土の特徴はその他の古代に属する遺構と近似する。また、断面の観察から自然に埋没したものとみられる。遺物は出土しなかつたが、埋土の特徴より古代（平安時代）の溝であると考えられ、堀より古い遺構である。

#### 溝2（第17図、写真図版30）

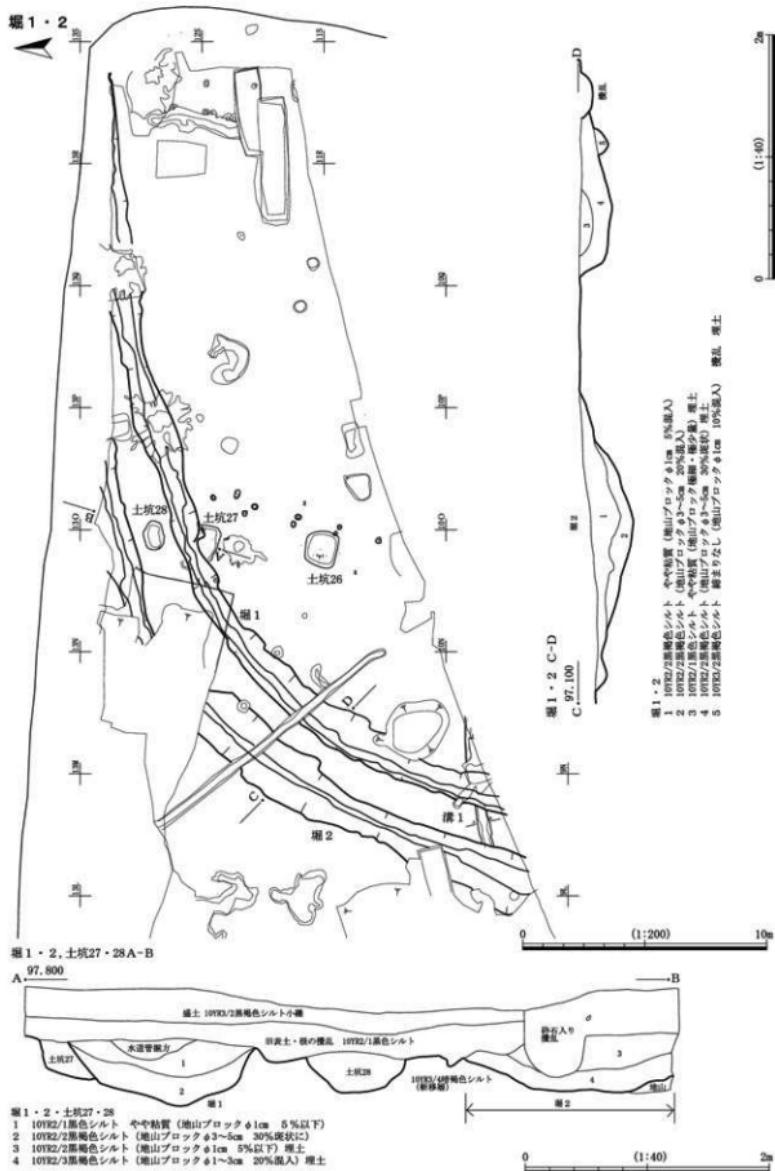
調査区東側、10J・11Jにかけて位置する。Ⅳ層で検出したが、上部を大幅に削平されておりⅡ層が本来の検出面である可能性が考えられる。ほぼ底面のみ残存する溝であり、このことからも削平の程度が推し量られる。約45°傾いた南北方向を指向する溝であるが、北は調査区外へ延び、南は大規模な攪乱群によってその行方は不明である。溝1と同一遺構でこれに接続する可能性も考えられるが、可能性にとどめておきたい。埋土は黒色シルトの單層である。遺物は出土しなかつた。埋土や規模などから平安時代の遺構であると推測される。

#### 堀1・2（第18図、写真図版30・31）

調査区東側、9K～12Rにかけて弓なりに延びる長大な2条の堀である。内側の1条を堀1、外側の1条を堀2とした。両者は近接しているが切り合はない。両者は重なることなく一定間隔を保ちながら併走することから、2重の堀として併存したものと推測される。調査区内では東西方向が長く直線的に延び、Nのライン付近から緩やかなカーブを描き、2条とも南側調査区外へと延びる。北は外側に位置する堀2が現在の県道下へ延びているようである。堀1も東へ延びつつ、調査区外へと向かう。両者は各所で攪乱を受けているが、9世紀の土坑や溝などの遺構を切っていることから平安時代前半以降のものである。埋土は概ね上下2層からなり、最上層が黒色シルトでⅡ層由来、下層は黒褐色シルトであるが、地点によって細分可能である。遺物は堀1から土師器が出土したが、出土地点が土坑27付近のみであるため堀1が直接切る土坑27に本来帰属するものであった可能性が高い。



第17図 溝1・2



第18図 堀1・2

### 掘立柱建物1(第15図)

調査区西端部6Dに位置する。Ⅱ層上面柱穴9個ないし10個からなる梁行2間、桁行3間の南北棟の建物であると推定される。しかし、南西隅柱は意識して探ったが検出できなかった。柱穴の埋土はやや淡い黒色シルトが主体であり、Ⅱ層に近いため検出困難なものがばかりである。この特徴からも平安時代に構築された建物であると考えられ、近接する竪穴住居2を前後する時期であると推定される。

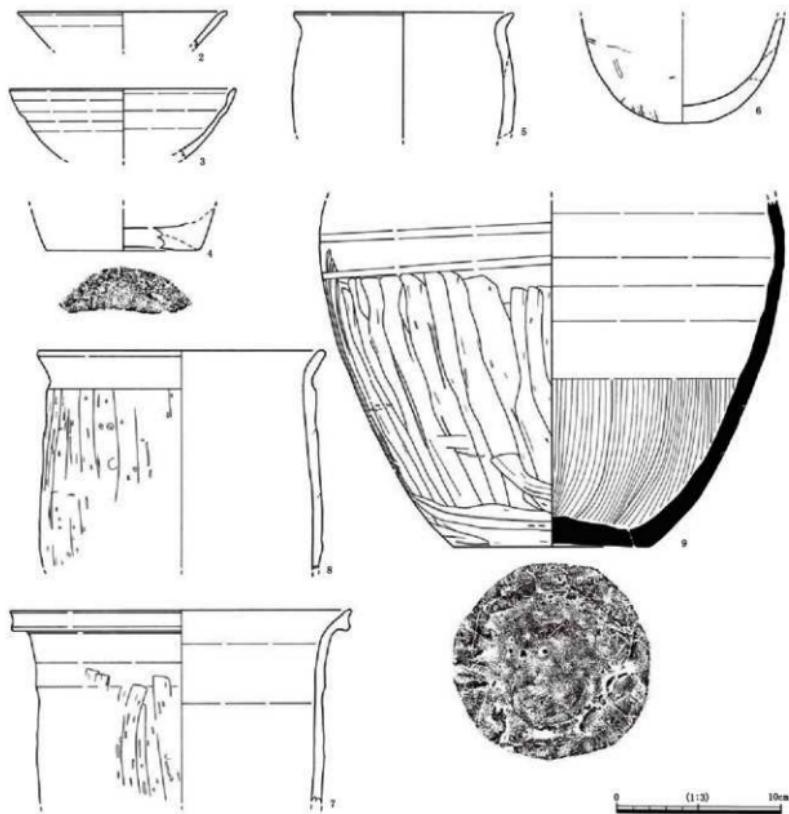
### 出土遺物(第19～22図、写真図版33～37・39)

平安時代の遺物は大半が2棟の竪穴住居から出土した。特に多くの土師器・須恵器は竪穴住居2で出土したものである。

2～9は竪穴住居1の出土遺物である。2・3は土師器壺、4～8は土師器壺、9は須恵器壺である。2・3の土師器壺は黒色処理されていない。ロクロによる調整が施されている。4は外底面に微細な砂粒が外周部に付着し、いわゆる砂底である。6は丸底の底部である。8は頸部に段が認められ、やや古相を示している。7はロクロ調整された壺である。灰白色で口縁部は短い。9は須恵器広口壺の下半とみられる。外面はタテ方向のケズリ、内面はタテ方向のハケが認められる。底部の様子からみて粘土紐積み上げの成形後、ロクロによる調整が施されたものとみられる。

10～26・70は竪穴住居2の出土遺物である。10・11は内面黒色処理された土師器壺である。10は内面下半に放射状のミガキが認められる。11は底部糸切り後にヘラケズリによる再調整がみられる。12は柱穴の埋土より出土した須恵器壺である。内面に火拂が認められ、重ね焼きの際に付いた痕跡であると考えられる。外側面には墨書きで「巾」という文字が書かれており、布を表す「キレ」と読まれた可能性が考えられる。13は須恵器蓋である。端部には返りがみられ、返り外面に端面を有する。天井部は回転糸切り後無調整である。12の須恵器壺の口径とも合致する規格である。内面天井部は、著しく摩滅しており、手触り滑らかになっている。蓋をひっくり返し、坏身の上に乗せ、硯として転用する例は、官衛・拠点集落等の出土遺物でも認められ、その事例に合致すると考えられる。すなわち、このような蓋の転用方法についてその作法を知っている人間の所作であることが推測され、官衛等に関係する人間そのもの、あるいはそのような人間との交わりが密にあったことを示す遺物である。14は土師器壺である。14～20・26は土師器ロクロ壺である。14・15・18・19・26は小形、17・20は大形の壺である。20は体部上半が残存する。残存部外面は斜位の平行タキが埋め尽くしている。タタキはロクロによる回転ナデで消えている箇所があることから初期段階の調整であることが推測できる。また、斜位のタタキ痕は直交方向にも認められることから、左右で工具の持ち手を変えるなどしているようである。19は底部回転糸切りであり、体部下端部は回転ヘラケズリである。21～25はロクロが用いられていない土師器壺である。22は頸部に段を有する。器壁は薄く細やかな胎土である。23は体部下半のみ残存する。外底面には砂粒が多量に付着した、いわゆる砂底である。非ロクロ壺は22のような精緻な作りのものとそれ以外の粗雑な作りのものに分かれる。70は壙出の上から2段目で用いられていた礎である。片面に微かに磨り痕があると思われる。磨り痕は弱いことから柔らかい素材のものを対象物とした可能性がある。

27～37は土坑等で出土した土器である。27～29は土坑26より出土した土師器壺である。30～32は土坑27より出土した内面黒色処理された壺と土師器壺である。33・34は土坑30より出土した土師器である。33は黒色処理されていない壺である。色調は橙色であるが、須恵器に近い胎土である。34はかなり小形の鉢である。底部は回転糸切りであることから成形段階からロクロが使用されたものと考えられる。35は堀1、土坑29より出土した土師器壺である。本来は土坑29に帰属する土器

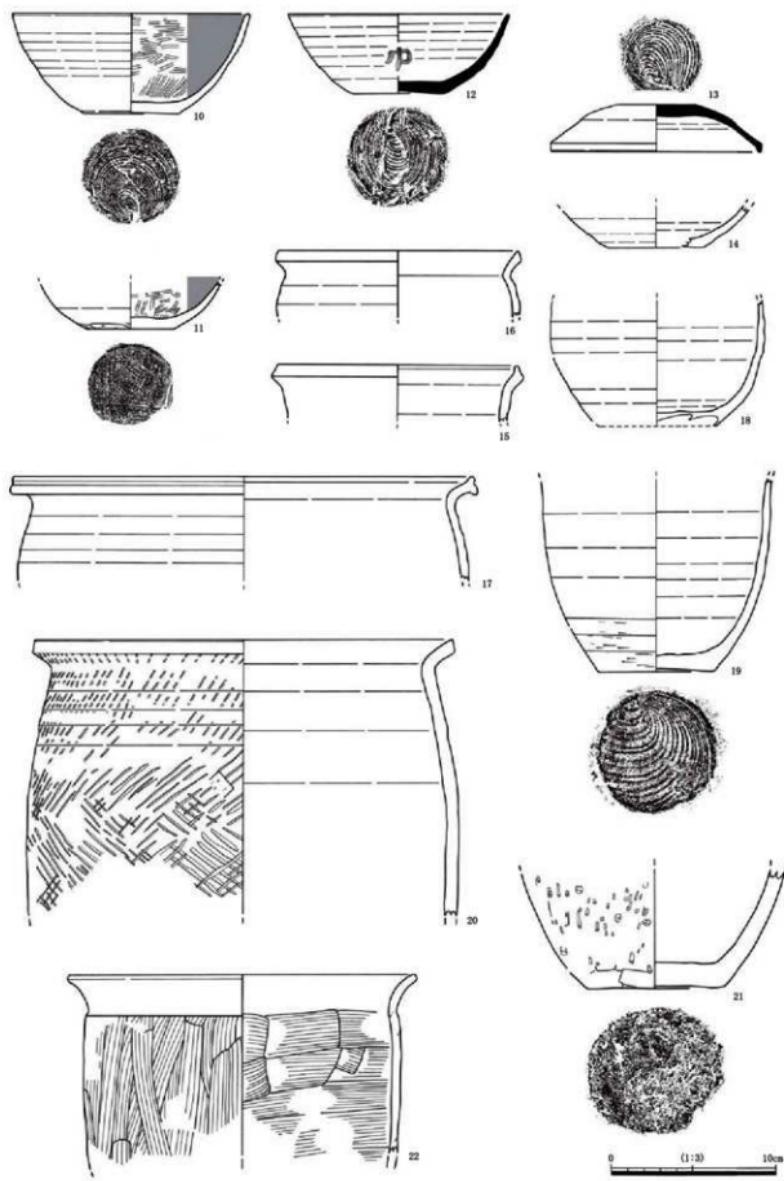


第19図 竪穴住居1出土遺物

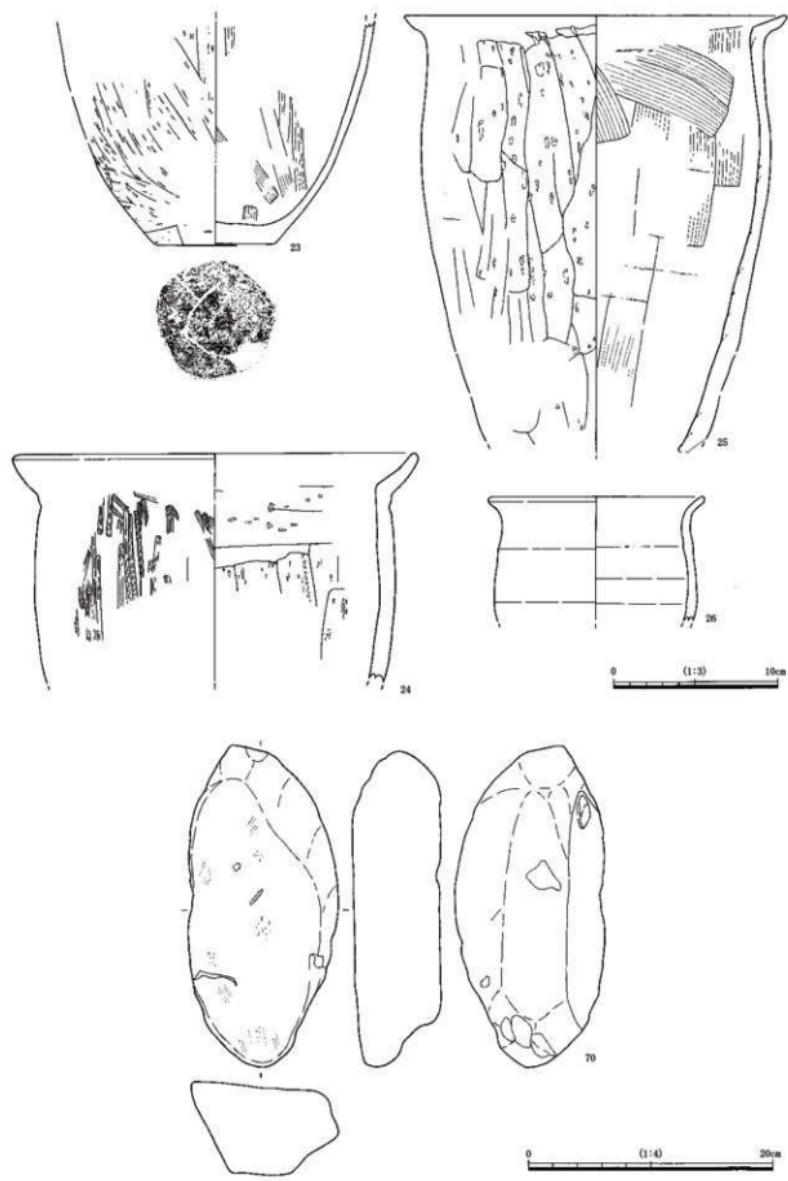
であった可能性が高い。36は土坑31より出土した須恵器坏である。やや軟質の焼成で、内面に2次被熱による細かな剥離が多数認められる。

37は堀1から出土した土師器坏である。非常に精緻な胎土であり、砂粒が含まれない。底部は回転糸切り後、ヘラケズリによる再調整が施されているが、砂粒が含まれていないためにヘラケズリに見えない。内底面に付着粘土が観察され、須恵器のような焼成がなされたものと思われる。

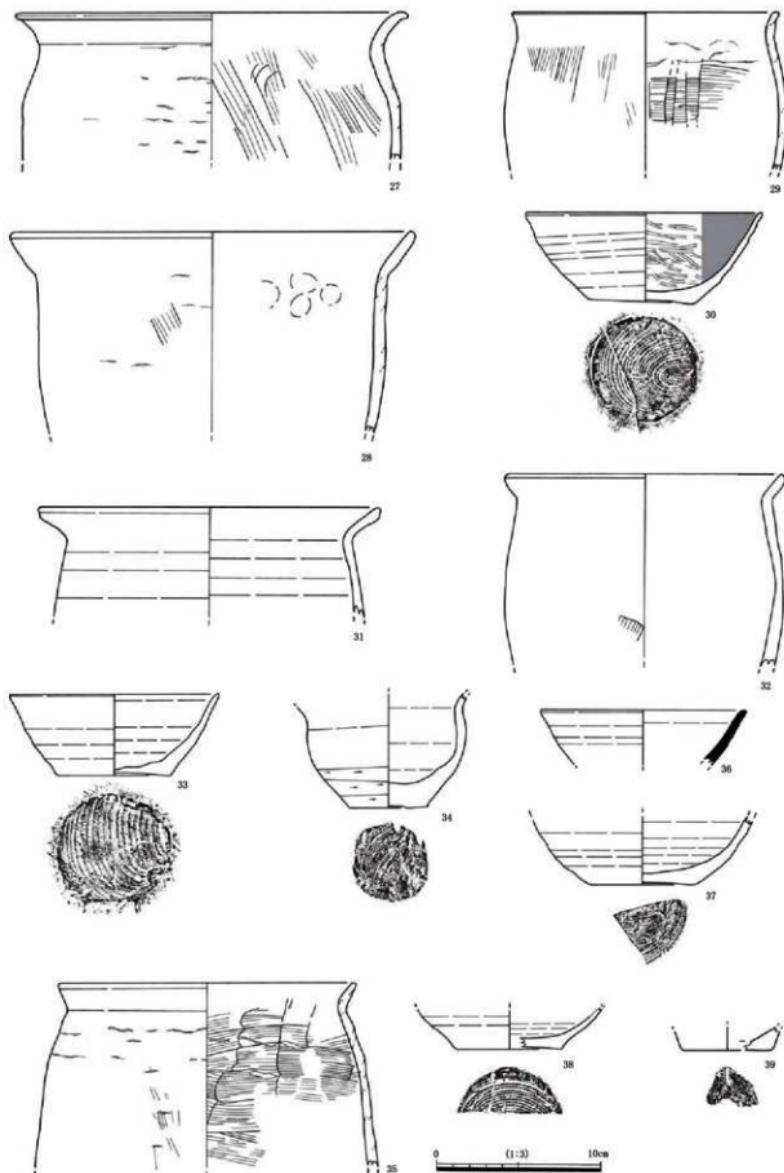
38・39は遺構外出土の土器である。38は土坑27・28付近の表土から出土し、底部は回転糸切りである。39はロクロが用いられた土師器小皿あるいはロクロかわらけであると考えられる。底部は回転糸切りであり、胎土・色調・形態・大きさなどは11世紀後半～12世紀初頭頃の土器に似ている。



第20図 穴住居2出土遺物（1）



第21図 積穴住居2出土遺物（2）



第22図 土坑・遺構外出土遺物

## (3) 中世以降

中世以降と考えられる遺構は、中世の竪穴建物、掘立柱建物である。また、井戸1・2は、近世以降の遺構である。

## 竪穴建物1(第23図、写真図版32)

調査区西側、5F位置する。削平されたIV層で方形のプランを検出した。微かに埋土が残存するが、ほぼ床面近くが見えている状況であった。西側の一箇所を除き、周溝が方形に巡る。この周溝の途切れる箇所が残存していないものの張り出しおよびそれに付随するスロープであったと考えられ、張り出しを有する中世の竪穴建物であったと想定される。張り出し側の床面には焼土が形成されていたが、その性格は不明である。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、この一角が中世集落の一角であったと推測される。

## 掘立柱建物2(第25図)

調査区西側、4Dに位置する。竪穴建物の西にあり、何らかの関係性が想定される。6個の柱穴からなるが、柱筋の通りは良くない。梁行1間、桁行3間以上の建物である。中世に位置付けておく。

## 掘立柱建物3(第24図)

調査区西側、4Dに位置する。竪穴建物および掘立柱建物2の西にあり、何らかの関係性が想定される。6個の柱穴からなるが、柱の個数が足りない。梁行1間、桁行3間の小形の建物である。出土遺物なく、時期不明であるが、現段階では、中世に位置付けておく。

## 出土遺物(第27図、写真図版38)

中世以降の遺物は、白磁碗1点、陶器片1点である。

40は柱穴から出土した白磁碗である。体部片で形態は不明であるが、透明釉が掛かり下半部に露体が認められる。

41は瀬戸・美濃産陶器皿である。端折の口縁部に内面菊花状の造形がある。釉は灰釉で、緑黄色を呈する。瀬戸・美濃大窯IV期のものと推測され、戦国期のものである。

43は近世陶器紅皿、43は土瓶の注口である。

71は砥石である。時期不明であるが古代～中世のものである可能性が高い。

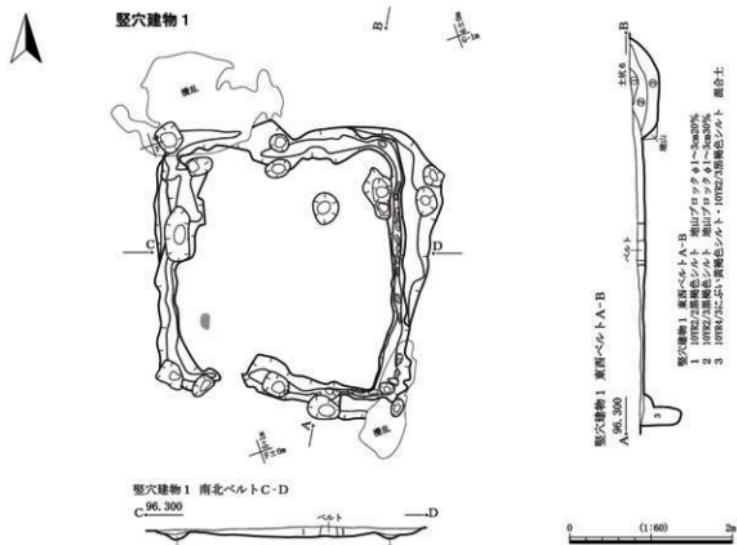
72も砥石であるが、石材が岩泉二升石産の石材であるため近代以降のものである可能性が高い(写真のみ掲載)。

44～60は当地の昭和17年10月の火事場整理の溝出土の一括資料である。

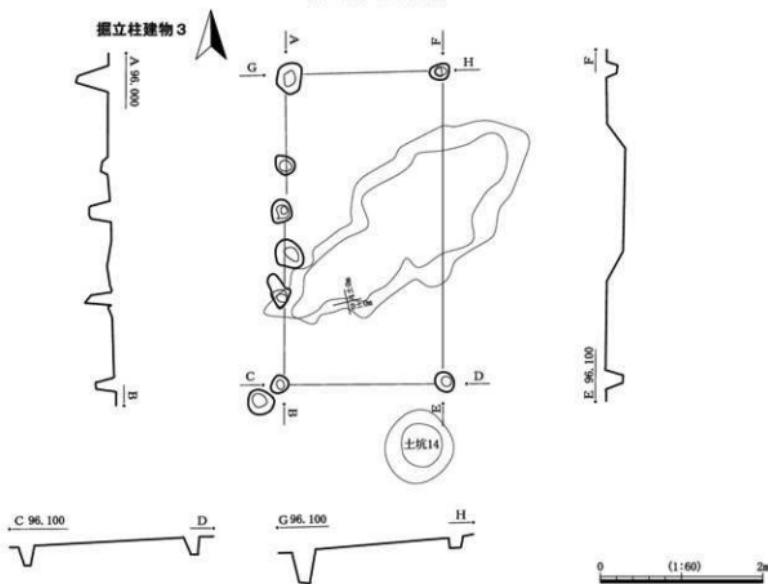
注目されるのは、44の1940年東京オリンピック記念の湯呑みである。統制陶器で、競技の図柄、「1940 TOKYO」の文字などがプリントされている。

53も陶製陶器である。淡緑色の施釉がみられ、底部は六角形である。底部外面には「ゴロー」とブランド名がエンボスで記されている。統制番号は欠損する体部に記されている可能性がある。64は森永練乳製のコーラスの瓶である。

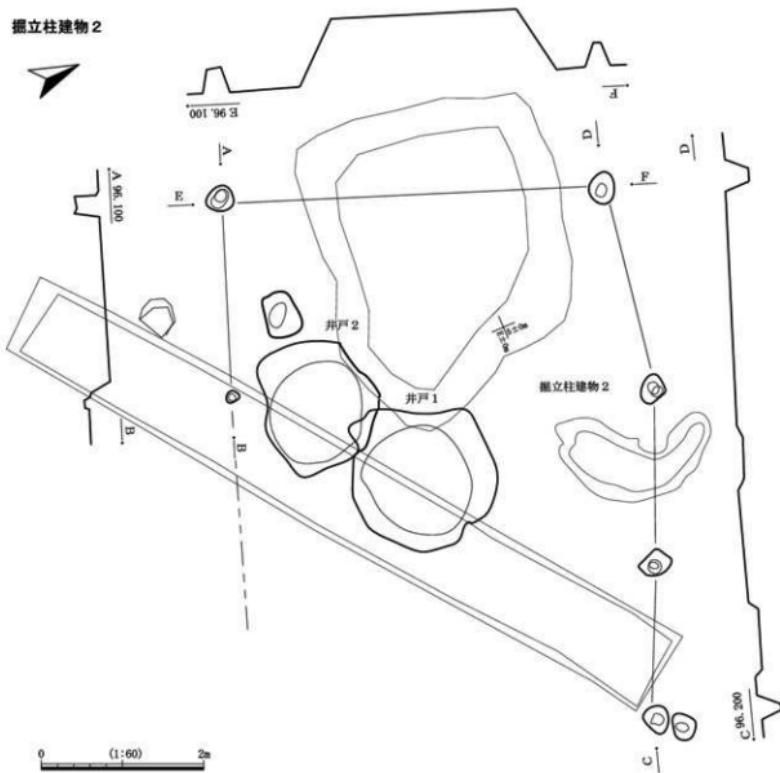
65は文字から大日本ビールの瓶であると推測される。



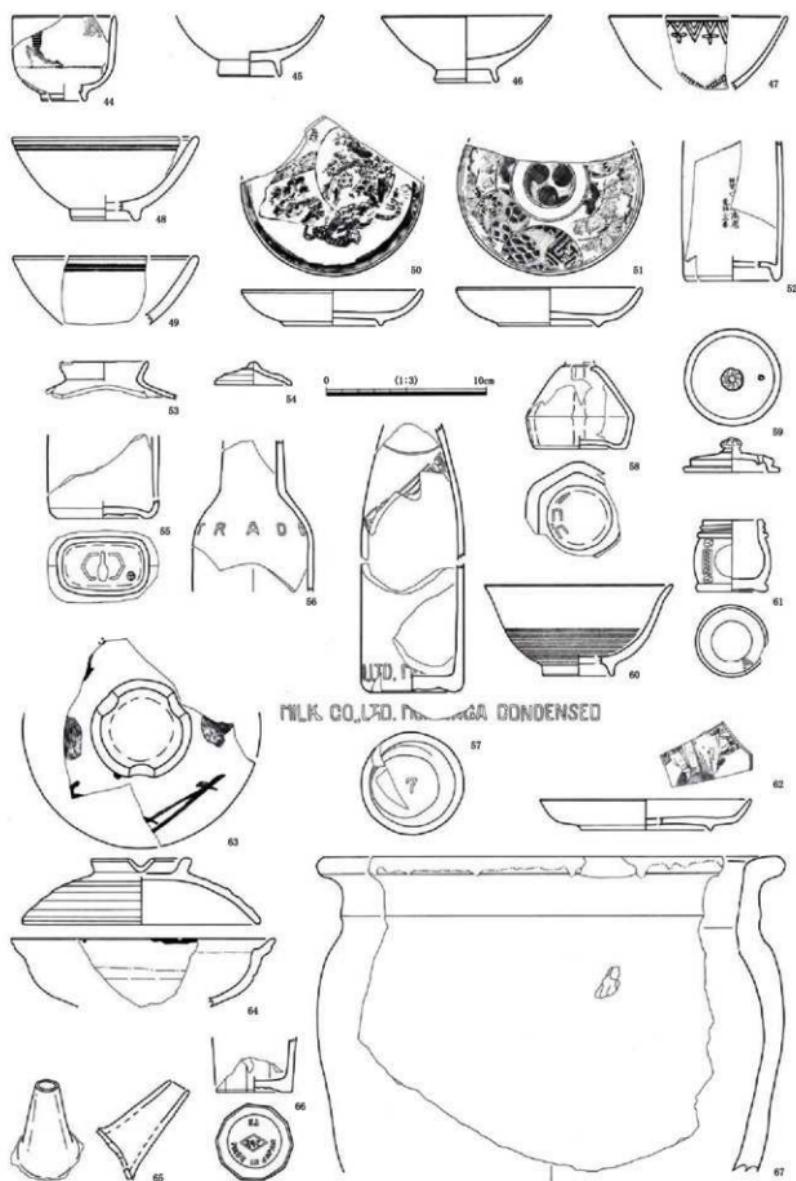
第23図 竪穴建物1



第24図 掘立柱建物3



第25図 挖立柱建物2



第26図 出土遺物（中世～近現代）

第3表 間野村遺跡（令和2年度）掲載遺物一覧（土器・陶磁器等）

編號 No.	種別	器種	出土遺構	位置・層位	調査・文様	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			重量 (g)	備考
									口径	高さ	底径		
1	磚	深鉢	堅穴住居1	検出面、埋土	後沈縫・堆積 (LR)	精良	良好	10YR6/3 にぶい黄 褐色	—	—	—	76	縄文時代中期 (大木8a?)
2	土	壺	堅穴住居1	埋土	回転ナデ	精良	良好	75YR7/6 褐色	(12.8)	(23)	—	6.8	
3	土	壺	堅穴住居1	埋土上層	回転ナデ	やや粗	良好	75YR7/3 にぶい黄 褐色	(13.8)	(43)	—	322	
4	土	甕	堅穴住居1	南西コーナーピット	ナデ	やや粗	良好	5YR6/6 褐色	—	[26]	(9.4)	52.2	砂底
5	土	甕	堅穴住居1	南西コーナーピット	ナデ	やや粗	良好	10YR5/4 にぶい黄 褐色	(13.4)	(7.7)	—	72.4	
6	土	甕	堅穴住居1	埋土、埋土上層	ナデ	やや粗	良好	10YR5/4 にぶい黄 褐色	—	[6.4]	—	152.3	
7	土	甕	堅穴住居1	埋土上層、検出面～埋土 下層	ケズリ・回転ナ デ	やや粗	良好	10YR7/2 にぶい黄 褐色	(20.8)	(11.8)	—	64.9	
8	土	甕	堅穴住居1	住居、床面? 壁土上層	ハケ	粗	良好	75YR6/6 褐色	(17.8)	—	[134]	185.5	
9	瓶	壺	堅穴住居1	住居、床面? 壁土上層、 検出面、埋土	回転ナデ・ケズ リ	精良	良好	75Y6/1 灰色	—	[21.2]	12.0	1517.6	
10	土	壺	堅穴住居2	床面、埋土、埋土下層	回転ナデ・ミガ キ	精良	良好	75YR6/6 褐色	(14.9)	6.2	5.8	135.1	底部回転糸切
11	土	壺	堅穴住居2	埋土、ペルト内、埋土下 層	回転ナデ・ミガ キ	精良	良好	75YR7/4 にぶい 褐色	—	[29]	5.2	47.3	底部再調整
12	瓶	壺	堅穴住居2	埋土中位、埋土	回転ナデ	精良	良好	75Y7/1 灰白色	13.5	4.9	5.5	130.7	「山」墨書き、底部 回転糸切
13	瓶	壺	堅穴住居2	南壁	回転ナデ	精良	良好	N5-0 灰色	—	2.9	(12.8)	53.8	内上面、縦に輪用、 天土部回転糸切
14	土	壺	堅穴住居2	埋土下層、埋土	回転ナデ	やや粗	良好	10YR8/4 浅黃褐色	—	[26]	(5.8)	21.5	
15	土	甕	堅穴住居2	埋土	回転ナデ	やや粗	良好	5YR6/6 褐色	(14.6)	(35)	—	21.2	
16	土	甕	堅穴住居2	検出面	回転ナデ	やや粗	良好	10YR6/1 灰褐色	(14.8)	(41)	—	32.6	
17	土	甕	堅穴住居2	埋土	回転ナデ	精良	良好	75YR5/4 にぶい 褐色	—	[28.2]	(6.4)	—	58.0
18	土	甕	堅穴住居2	埋土	回転ナデ	やや粗	良好	10YR6/3 にぶい黄 褐色	—	(7.7)	—	133.3	丸底か?
19	土	甕	堅穴住居2	貯蔵穴、埋土、оч窓内、 埋土下層	回転ナデ・回転 ナデラグリ	やや粗	良好	10YR6/3 にぶい黄 褐色	—	[11.8]	7.2	257.3	底部回転糸切
20	土	甕	堅穴住居2、 土坑26	検出埋土、埋土下層、 埋土	回転ナデ・タタ キ	やや粗	良好	10YR6/4 にぶい黄 褐色	(25.6)	(16.9)	—	945.6	
21	土	甕	堅穴住居2	埋土下層、埋土	ケズリ	粗	良好	75YR5/4 にぶい 褐色	—	(7.1)	8.3	425.1	
22	土	甕	堅穴住居2、 土坑26	оч窓内、ペルト内埋土下 層、埋土	ハケ	やや粗	不良	10YR6/4 にぶい黄 褐色	(11.0)	(11.9)	—	249.9	
23	土	甕	堅穴住居2	埋土下層、埋土	ケズリ	粗	良好	7.5YR5/4 にぶい 褐色	—	[137]	7.2	350.1	砂底
24	土	甕	堅穴住居2	埋土下層、埋土上層	ケズリ・ハケ	やや粗	良好	75YR6/6 褐色	(24.8)	(14.0)	—	864.9	
25	土	甕	堅穴住居2	検出埋土上層	ケズリ	粗	良好	7.5YR5/4 にぶい 褐色	(23.4)	(26.7)	—	869.8	
26	土	甕	堅穴住居2	埋土上層、埋土、оч窓内、 埋土下層	回転ナデ	やや粗	良好	10YR6/6 明黃褐色	(13.1)	(7.6)	—	86.1	
27	土	甕	土坑26	上段埋土、水道管管、黑 色土	内面ハケ	やや粗	良好	10YR7/4 にぶい黄 褐色	(24.0)	(9.7)	—	181.3	
28	土	甕	土坑26	上段埋土、埋土上位、 燒土下层	内面ハケ	やや粗	良好	10YR6/4 にぶい黄 褐色	(24.0)	(12.4)	—	211.3	
29	土	甕	土坑26	埋土中位	ハケ	やや粗	良好	75YR6/6 褐色	(16.2)	(6.7)	—	95.6	
30	土	壺	土坑27	埋土、埋土下層	回転ナデ・ミガ キ	精良	良好	10YR8/3 浅黃褐色	14.3	5.8	6.3	164.5	底部回転糸切

第3表 間野村遺跡（令和2年度）掲載遺物一覧（土器・陶磁器等）

編號 No.	種別 器種	出土遺構	位置・層位	調整・文様	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			備考
								口径	最高	底径	
31	土 瓢	堅穴住居2, 壁土坑27	壁上土層	回転ナデ	やや粗	良好	75YR7/4 にぶい 橙色	(20.0)	5.7	—	141.6
32	土 瓢	土坑27	壁土、壁下層、水道管 柱(大)、壁1付近	ケズリ?	やや粗	良好	10YR6/4 にぶい黃 橙色	(16.0)	(11.2)	—	98.7
33	土 环	土坑30	壁上土層	回転ナデ	粗良	良好	75YR7/3 にぶい 橙色	(22.8)	5.0	6.8	144.7 底部回転糸切
34	土 瓢	土坑30	壁上土層	回転ナデ、回転 ハラケアリ	やや粗	良好	10YR6/4 にぶい黃 橙色	10.4	[7.0]	4.8	190.5 底部回転糸切
35	土 瓢	土坑29, 壁 1	壁土、水道管部	ハケ	やや粗	やや 不良	10YR5/3 にぶい黃 橙色	(18.0)	(11.0)	—	163.5 底部回転糸切
36	土 环	土坑31	壁土(堅穴住居1を切る 土坑)	回転ナデ	粗良	やや 不良	75YR8/1 灰白色	(22.0)	(3.4)	—	11.6
37	土 环	壁1	水道管際、壁土	回転ナデ	粗良	良好	75YR7/6 橙色	—	[4.2]	[6.4]	27.1
38	土 环	遺構外	水道管際、北半黄土～模 出田	回転ナデ	粗良	やや 不良	10YR7/3 にぶい黃 橙色	—	(2.5)	(5.4)	29.0 底部回転糸切
39	か 小瓶	遺構外	下段北半中央、表土、檢 出田	回転ナデ	粗良	良好	10YR8/4 浅黃橙色	—	(1.2)	(5.4)	9.8 11～12c 稕か?
40	磁 瓶	遺構外	P67 壁土	回転ナデ	粗良	良好	5Y8/1 灰白色	—	—	—	2.69
41	陶 瓢	遺構外	生文深トレンチ7、壁土	回転ナデ	粗良	良好	75Y6/3 オリーブ 黄色	(11.0)	(1.5)	—	4.5 灰釉折縫
42	磁 紅里	遺構外	表土～檢出田	—	粗良	良好	5Y8/1 灰白色	(4.4)	[0.9]	—	2.2
43	陶 土瓶	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	SY2/2 オリーブ黒 色	—	(8.2)	—	46.3
44	陶 汤舟	遺構外	中段、火事場整理跡	1940 ロゴ	—	良好	5Y8/1 灰白色	(6.2)	(2.8)	5.2	22.5 東京五輪記念陶器
45	陶 茶碗	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	—	(3.9)	(3.8)	45.0 統制陶器
46	陶 茶碗	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	(10.4)	4.1	(4.0)	44.1 統制陶器
47	陶 茶碗	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	(11.0)	(4.5)	—	10.7
48	陶 茶碗	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	(11.5)	5.1	(4.3)	72.9 49と同一個体?
49	陶 茶碗	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	(11.4)	(4.2)	—	31.0 48と同一個体?
50	磁 瓢	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	11.1	2.2	6.0	71.3
51	磁 瓢	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	11.4	2.4	6.2	71.7
52	陶 徳利	遺構外	中段、火事場整理跡 「…兵商店」	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	—	(8.6)	(5.0)	30.5
53	ガ ラン ブ春	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y8/1 灰白色	5.4	(2.3)	—	33.3
54	陶 ラン ブ春	遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y7/4 浅黄色	—	1.4	4.7	13.3
55	ガ 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	—	[5.1]	5.7	5.0	—	—
56	ガ 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	5Y6/6 オリーブ色	—	(9.3)	—	54.7	—
57	ガ 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	10Y5/2 オリーブ 灰色	—	(16.5)	6.3	218.0	—
58	陶 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	10Y7/1 灰白色	—	(5.4)	5.6	30.2	—
59	陶 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	2.5Y4/6 オリーブ 褐色	—	2.1	5.9	25.2	—
60	陶 遺構外	中段、火事場整理跡	—	—	良好	7.5YR3/4 暗褐色	(11.6)	5.6	(4.4)	56.6	—

第3表 間野村遺跡（令和2年度）掲載遺物一覧（土器・陶磁器等）

掲載 No.	種別	器種	出土遺構	位置・層位	調整・文様	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			重量(g)	備考
									口径	器高	底径		
61	ガ	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	白色	37	44	44	71.4	
62	陶	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	5Y8/1 灰白色	(13.0)	1.9	(8.0)	125	
63	陶	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	25Y7/2 灰白色	—	4.1	(4.6)	100.6	
64	陶	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	10YR8/2 灰白色	(16.2)	(4.2)	—	251	
65	陶	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	7SY6/2 灰オリーブ色	—	[6.2]	—	34.0	
66	ガ	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	橙色	—	[3.4]	4.6	39.1	
67	陶組	遺構外	中段、火事場整理跡				良好	25Y3/2 黑褐色	(28.8)	(19.4)	—	1027.6	

種別欄：縄…縄文土器、土…土器、策…策器、か…かわらけ、陶…陶器、細…細器、ガ…ガラス  
寸法欄：( )…復元値、〔 〕…残存値

表4 間野村遺跡（令和2年度）掲載遺物一覧（土製品・石器・石製品）

掲載 No.	種別	出土遺構	位置・層位	寸法(cm)			重量(g)	備考		
				長さ	幅	厚さ				
68	石鏡	縦1	東端	—	[3.8]	1.9	0.8	3.41	珪質頁岩	新生代第三紀 奥羽山脈
69	網片	土坑9	東面直上	28	3.6	0.9	4.72	凝灰岩	新生代第三紀 奥羽山脈	
70	磨石	堅穴住居2	壁面、構成壁	26.3	12.3	7.6	3350	砂岩	古生代 北上山地、石城山遺構成程	
71	砥石	遺構外	檢出面	69.9	5.1	4.15	2479	流紋岩	新生代第三紀 奥羽山脈	
72	砥石	井戸2	壁上下層	68.0	6.7	4.6	3938			

### 3 令和3年度調査の遺構と遺物

#### (1) 概 要

令和3年度調査は、令和2年度調査区の私道を挟んで東側を調査区として調査をおこなった。調査面積は80m<sup>2</sup>である。調査前の現況は畠および花壇であった。

地形面は前年度調査区の東端部と同一であり、現地表面はほぼ平坦である。また、基本層序についても前年度調査区東端部と共通しており、大きな差は認められないが、今回の調査区の方が近現代の擾乱も多いながらも削平の度合いは比較的軽微なものであった。したがって、調査区のほぼ全面で残存するⅡ層上面において遺構を検出した。調査では、Ⅱ層中に遺物は含まれていなかったが、念のためⅢ層を人力で除去し、下位の面でも遺構の確認をおこなったが、遺構は検出されなかった。

検出した遺構は、前年度調査区からの延長であると考えられる堀1条、土坑1基、掘立柱建物1軒、柱穴4個である。出土遺物は近世以降の陶磁器類やガラスなどが少量出土したが、これらの掲載は割愛した。

#### (2) 検 出 遺 構

##### 堀3(第28図、写真図版42)

前年度調査区の堀1および堀2が伸び、今回の調査区で確認できる可能性があった。これは地形や地割等からこれら2条の堀は、東へ伸び、どこかで向きを変え東から南に向けて伸びることが予想された。堀1・2はそれぞれ併走する何らかを区画する遺構である。前年度調査では紫波江繁縝現道の下に伸びていることから連続する北辺部の調査は叶わなかった。また、遺跡のより東部のある水田では、岩手県教育委員会の試掘調査で遺構が確認されなかつたため、それより西側のどこかで東辺部が検出される可能性があった。

今回の調査では調査区東端部で堀の続きとみられる遺構を検出した。昨年度の堀と同一遺構である可能性が極めて高いが、別遺構である可能性も皆無ではないので、堀3と呼称する。前年度の堀は2条併走であったため、仮にこれらの併走が解消されなければ、内側の堀1の延長と考えられる。

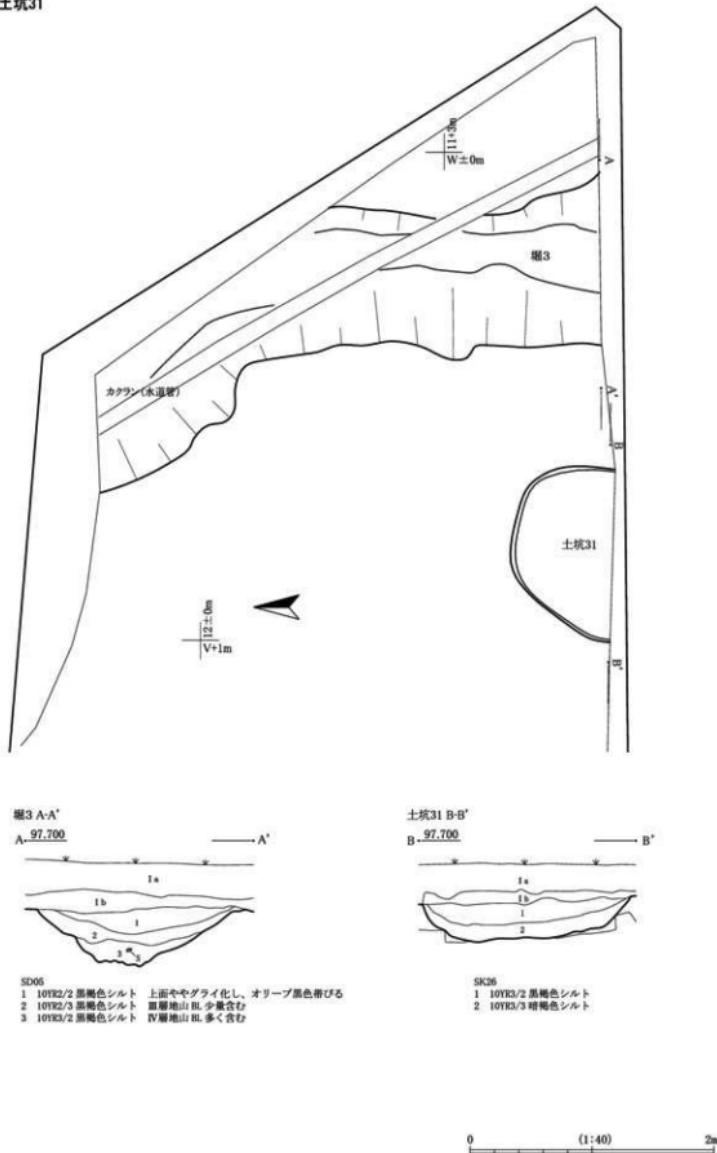
堀は現代の水道管等の擾乱に切られているが、おおむね南北方向に伸び、南北とも調査区外へとそれぞれ伸びている。北辺部はやや西に向きを変えつつあるかのごとく、緩やかに曲がっている。現道の下では、西に向きを変えているようにみえる。仮に、これが堀1へと続くのであれば、外側を併走する堀2は今回の調査区東側の私道直下に位置しているとみられる。今回は調査範囲となっていないが、将来的にこの私道の一部も新規道路となるため、工事の際には注意が必要である。

埋土は黒褐色シルトを主体とし、自然堆積である。底面はV層の礫層の上面まで掘が掘り込んであるため最低面では構成礫が一部顔を覗かせている。遺物は出土しなかった。

今回の調査では、前回に比べ遺構面の削平が大きくなないことから、堀上部も機能時から大きく下がっていることは想定できない。したがって、この堀は本来1mを超えるような深く掘り込まれた遺構ではないものと推測される。今回の調査で東側に巡ることが確認できたことから、地形や現在の地割に沿うように巡っている可能性がより高まった。南辺については現段階では不明瞭であるが、これら2条の堀東辺が伸びると推測される私道の変化点をコーナーに当たる可能性を考えられる。おおむね旧小野家宅地範囲を巡るものと推測される。

詳細な時期は不明であるが、現段階では古代末から近世までのものであると思われる。

堀3・土坑31



第27図 堀3、土坑31

**土坑 31（第 28 図、写真図版 42）**

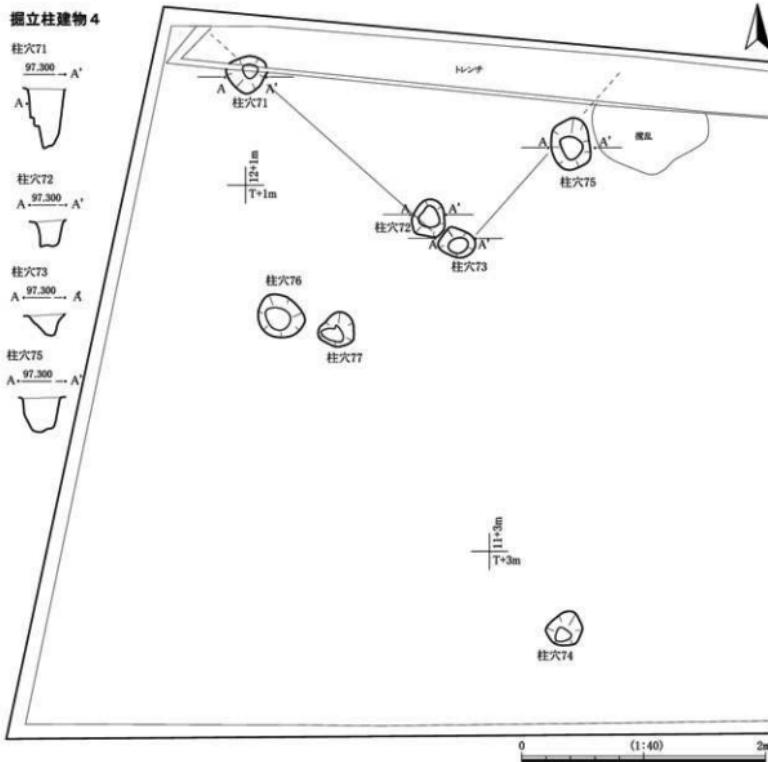
調査区南東に位置し、堀 3 の西に近接する土坑である。一部は南側調査区外へ延びる。やや不整な円から楕円形を呈するものと考えられる。本来は表土直下のⅡ層上面で検出される遺構であるが、検出面を下げた後に確認したため浅くなった。

埋土は上下 2 層のシルトからなり、いずれも自然堆積である。埋土および周辺から遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明である。また、その性格も不明である。

**掘立柱建物 4（第 29 図）**

調査区北西隅に位置する。建物の大半は現道下に存在するものと想定される。3 個の柱穴から建物を想定したものである。構成する柱穴は P71・73・75 であり、P73 を隅柱と考えた。P73 と P71 の柱間と P73 と P75 の柱間を比較すると、後者の方が短い寸法を探っていることからこれが梁行方向である可能性が考えられ、前者が桁行方向であると考えられる。

柱穴からは出土遺物が認められず時期不明である。しかし、想定建物の軸方向が堀 1・2 と合わないため堀とは異時期であると思われる。調査区外の現道下では堀と近接・重複している可能性がある。その他周辺で 7 個の柱穴を確認したが、分散傾向にあり規則性もない。出土遺物もない。



第 28 図 掘立柱建物 4

## V 境 遺 跡

### 1 概要と層序

#### (1) 概要

境遺跡の発掘調査は、間野村遺跡(令和3年度)の発掘調査と並行して実施した。調査範囲は紫波橋から続く県道の拡幅分を対象とするため、現在の県道北側に隣接し、これに沿う形の長い調査区である。北上川に近く、自然堤防上に立地する。間野村遺跡の西端部に横たわる低湿地部分と接しており、この低湿地が後背湿地に該当するものと考えられる。調査区の標高は地表面で94.5mであり、間野村遺跡の遺構分布域より約1m低位であるが、後背湿地よりも約1m高位であると考えられる。この東西方向に長い調査区は、現況では広い畑の一部となっていた。

調査では平安時代の竪穴住居2棟、土坑2基、溝1条などを検出した。竪穴住居は調査区内ですべてを確認することができなかったため、残地である北側隣接地へも続くものとみられる。良好に残存する竪穴住居の存在から周辺にも多くの竪穴住居が眠っている可能性が高い。また、平安時代の遺物や十和田a火山灰を含む遺物包含層からも同様のことが推測される。出土遺物の多くは遺構内より出土しているが、遺物包含層中にも同時期の土器片が含まれている。

#### (2) 層序

調査範囲で確認できた遺跡の基本的な層序は、I～VII層に区分可能である。これら層順は調査区南側壁面で観察しており、おおむね平坦な現地表面に対して、下位の層序から調査区中央付近がわずかな窪地となっていることを確認した。この窪地は同一層であっても西側と東側に比べ、層厚が増している。層序の断面はA・B・Cの3箇所で断面を設定している(第28図・写真図版45)。III層以下は同質の堆積が互層となっており、同様の堆積環境が繰り返され、自然是防を形成したと考えられる。

I層：暗褐色シルトを主体とする表土である。おもにしまりのない耕作土である。

II層：暗褐色シルトを主体とする近現代の堆積層である。

III層：黒褐色粘質シルトを主体とし、平安時代の土器を含む古代の遺物包含層の上層である。洪水等による流入土というよりも懸濁水の滞水後、離水・沈殿した土壤である。すなわち、包含された土器は周辺より巻き込まれた懸濁水に含まれたものが残存したものと考えられる。この層下部で十和田a火山灰が散見される。

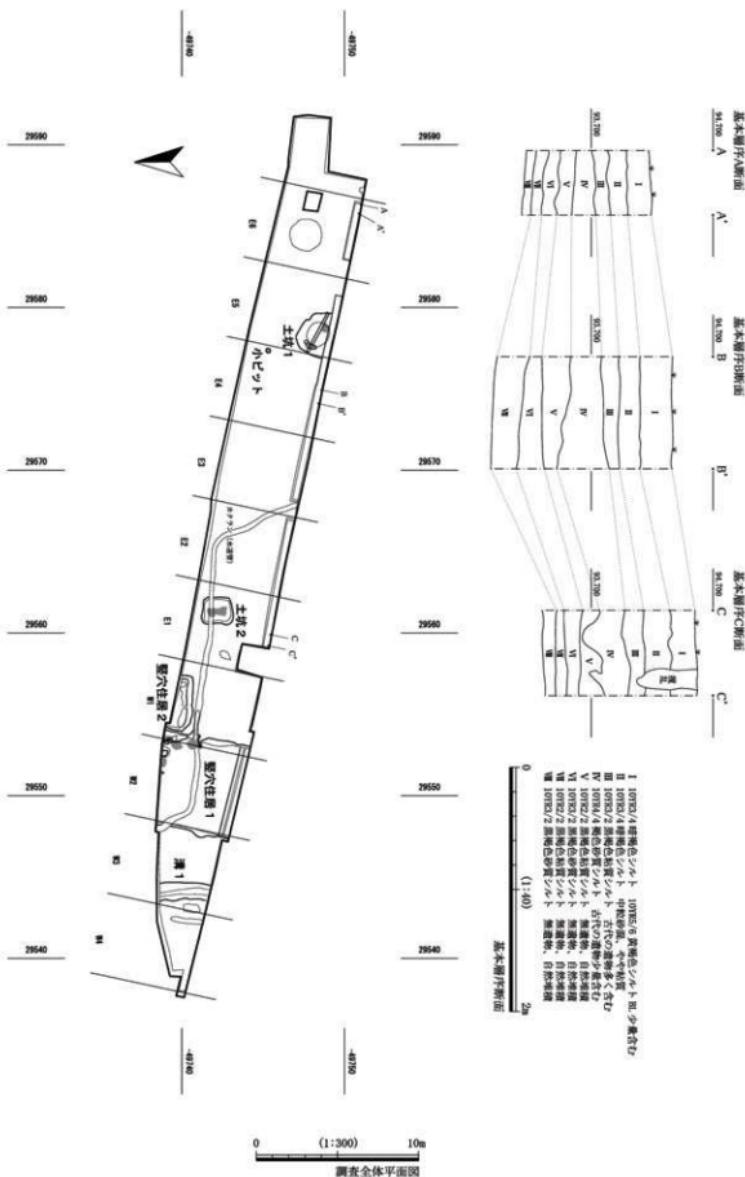
IV層：褐色砂質シルトを主体とし、平安時代の土器を含む古代の遺物包含層の下層である。上層と異なり、細かな砂粒が顕著であることから沈殿した土壤ではなく、洪水時初期段階の流入土壤である可能性が考えられる。

V層：黒褐色粘質シルトの地山であり、沖積作用により自然堤防を形成している土壤であると考えられる。形成時期は遺物等を含まないため不明であるが、平安時代以前であると考えられる。この上面において平安時代の遺構が検出可能である。

VI層：黒褐色砂質シルトの地山である。V層より砂粒が多く、上面にラミナが確認できる。

VII層：黒褐色粘質シルトの地山である。V層と同質であり、同じ堆積環境を示している。

VIII層：黒褐色砂質シルトの地山である。VI層と同質であり、同じ堆積環境を示している。



第29図 遺構配置

## 2 遺構と遺物

検出した遺構はいずれも平安時代の遺構である。竪穴住居や土坑からは、いずれも9世紀の土器を中心多くの遺物が出土している。また、遺構以外では、遺構の分布する調査区中央部の遺物包含層(Ⅲ・Ⅳ層)より、やはり9世紀代の土器が出土している。この遺物包含層を除去すると遺構を検出すことができるため、遺物包含層は9世紀以降に周辺の土器片を内包しながら堆積したものであると考えられる。なお、遺物包含層は調査区中央付近にある電柱を起点として5m単位で東西へそれぞれ区画し、遺物を取り上げた。西方向はW1～W4、東方向へはE1～E6と区画名を与えていた。

### (1) 竪穴住居

#### 竪穴住居1(第31図 写真図版46～49)

竪穴住居1は調査区中央よりやや西側に位置する。遺物包含層であるⅢ層およびⅣ層をW2で遺物包含層を掘削・除去した後にV層上面で方形の不明瞭なプランを確認した。この検出面は調査開始当初の調査区南端に入れたトレンチの断面で切り込みを確認したものである。他の遺構とは直接切り合はは認められないが、竪穴住居を東西方向に継続するように現代の水道管が攪乱している。この住居東に隣接する竪穴住居2は調査範囲内での切り合はは認められない。ただし、両者は非常に近接しているため併存は考えられないが、現段階では新旧を特定することは困難である。

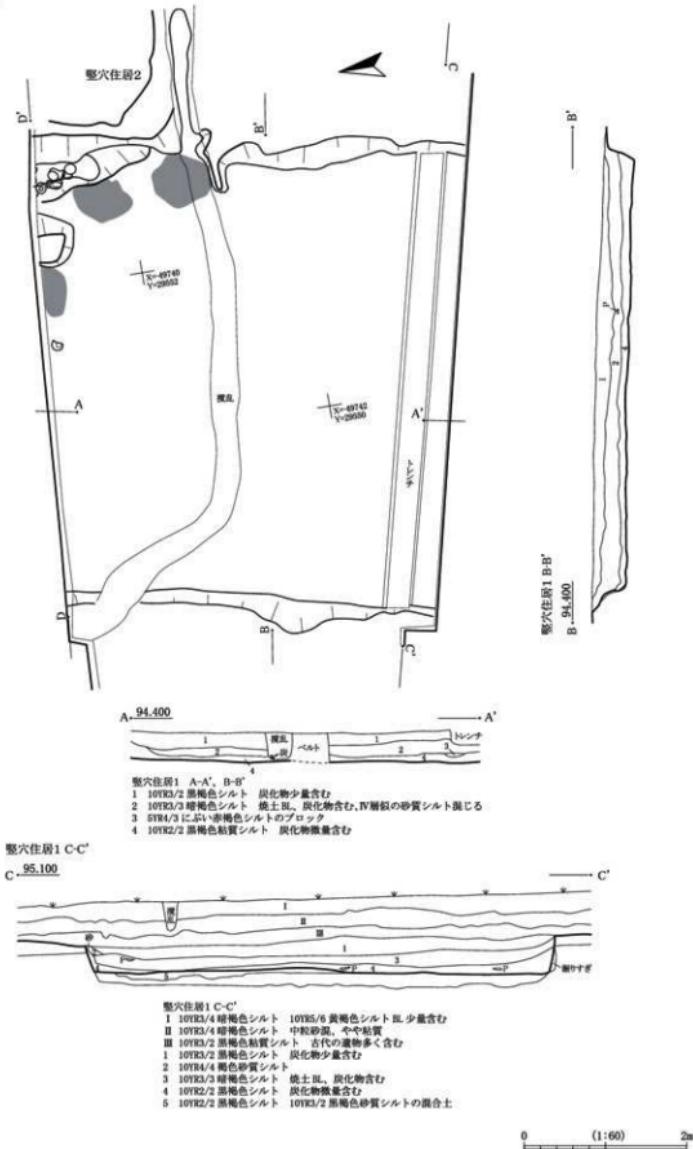
平面形態は方形であると考えられる。調査範囲内で検出できた規模は東西5.9m、南北5.1mである。ただし、南北長は南北とも調査区外へ続いているが、完全な長さは不明である。深さは50cmである。壁は急角度で検出面まで立ち上がっており、上端部の崩壊は最小限度であった可能性が高い。床面は埋土よりわずかに縮まっているものの顯著な硬化はみられない。平滑な床面の下には堀方が存在しており、この堀方が埋め貼床として機能していたようである。

埋土は大きく上・中・下の3層になり、いずれも自然に流入したものである。竪穴住居南半の埋土上層は黒褐色シルトに少量の炭化物が認められるが、北半は同一層であるが、炭化物と焼土ブロックが多く混在する。埋土中層は、埋土中において土器片などもとも遺物が多く含まれる。これは埋没過程で周辺域から流入した、あるいは廃棄されたものであると考えられ、同時期に営まれた竪穴住居等が調査範囲外にも多く存在することを示唆している。

カマドは、燃焼部と考えられる3箇所の焼土範囲を床面北東で検出した。いずれも中央がわずかに凹み、赤変・硬化している。焼土周辺およびこれを覆う覆土には土器片・カマド構築土・炭化物・焼土ブロックが多量に認められるが、構築された袖が残存するのは北辺に位置するカマド3のみである。東辺中央部に位置するカマド1とした焼土南側には地山が削り出された袖基底部が確認できる。また、これに沿うように煙道へと続く地山のラインがあり、その先で竪穴住居の東壁が途切れている。カマド1とカマド3の間には、カマド2が位置しているが、この焼土に付随する施設が確認できないため、これのみ地床炉であった可能性が考えられる。カマド1は地山削り出しの袖基底部が存在すること、その他の構築物が確認できることなどから、竪穴住居構築当初に使用され、その後使われなくなつたと考えられる。一方、カマド3はそのカマド1廃絶後、新設されたカマドであることは、構築された袖の残存等から推測できる。この竪穴住居は、最初期に東辺中央や北寄りにカマドが設けられ、その後北辺のカマド3へと変遷するとみられる。東カマドから北カマドへ転じた竪穴住居であったと考えられる。

煙道はカマド1に付随するものを確認している。しかし、水道管埋設堀方によって大半が失われて

## 竪穴住居 1

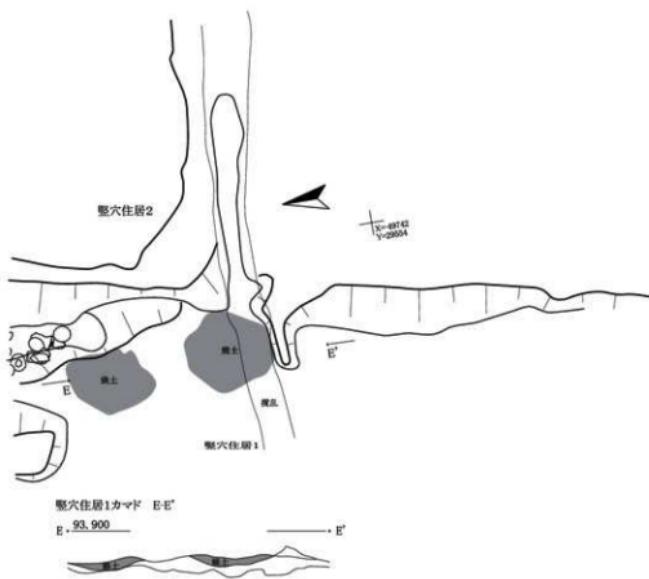


第30図 竪穴住居 1

## 竪穴住居 1



## 竪穴住居 1 カマド



第31図 竪穴住居1、焼土

おり、規模や形状は不明である。

貯蔵穴と考えられる不整形の落ち込みを床面北東隅で検出した。完形の土師器壺が内包されていることから貯蔵穴はカマド3機能時に併存していたものであると考えられる。また、調査区北側断面においてもカマド3との層位的な関係に矛盾は認められない。土器の残存状況や出土状況から考えて、壁上にあった棚状部分に置かれていたものが転落したことが推測される。

規模の大きな建物であるため柱穴があることを念頭に確認したが、柱穴はみられなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器が多く出土した。土器以外では土錘が1点出土した。土器類は埋土中でも多く認められたが、住居北東側のカマド周辺では床面、貯蔵穴等から非常にまとまった出土量であった。土師器は壺、甕、鉢などの器種があり、須恵器は壺、壺などの器種がある。詳細は遺物の報告で後述するが、おおむね9世紀半ば頃の構成であると考えられる。

この堅穴住居は約6m四方の中規模住居であると推測される。平安時代の9世紀半ばに機能し、後半には廃絶したものと考えられる。

#### 堅穴住居2(第33図、写真図版49)

調査区中央よりやや西側に位置する。堅穴住居1と土坑2に挟まるよう存在する。遺構の大半は調査区外北側へ続いている。堅穴住居1と近接しているが、調査範囲内での相互の切り合いは認められない。近接距離が短いため両者併存は考えられない。Ⅲ・Ⅳ層を除去すると、V層上面で検出される。

規模は東西長が3.4mであり、方形を呈するものと考えられる。やや小規模な堅穴住居であるとみられる。深さは49.5cmである。

東西両壁は比較的急角度で立ち上がるが、南側壁はやや緩やかな立ち上がりである。床面は平滑であるが、平面では砂質シルトの中に斑状に粘質シルトがみられる。貼床は南端壁際で顯著な堀方が認められる。堀方は不規則な凹凸が認められ、これを砂質の土壤と粘質の土壤が混雜した状態で充填し、貼床としている。

埋土は、上・中・下の3層に区分できる。いずれも自然堆積であり、おおむねレンズ状に堆積する。周辺から水とともに流入した土砂が窪地に残された状況を示している。埋土の上層は炭化物を少量含むが、中層には焼土粒も認められる。これらは周辺の居住域に起因するものとみられる。

出土遺物は、須恵器壺・須恵器壺・土師器甕などである。これらの特徴から9世紀前半から半ば頃の土器構成であると考えられる。堅穴住居1との切り合いは不明であるが、出土遺物の明確な時期差は認められないが、須恵器壺はやや古い可能性がある。

以上のようにこの堅穴住居2とした遺構は、平安時代の9世紀前半から半ば頃の小規模な堅穴住居である。断定はできないが、隣接する堅穴住居1よりわずかに古く、調査区外では堅穴住居1に切られている可能性がある。

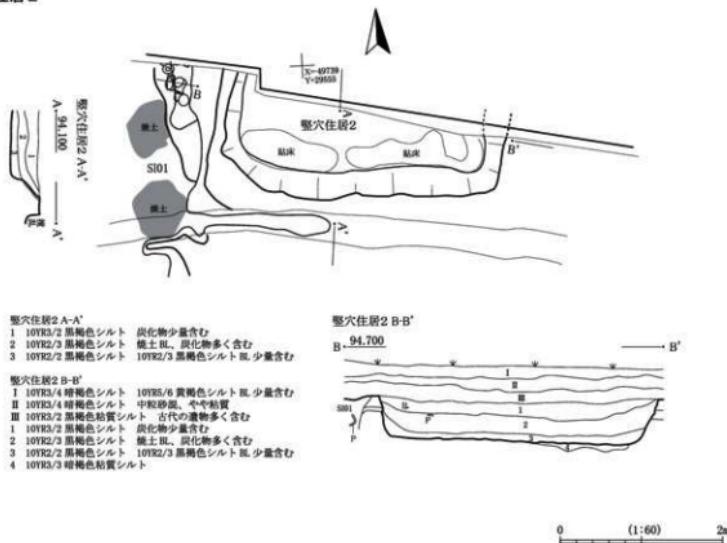
#### (2) 土 坑

##### 土坑1(第34図、写真図版50)

調査区東側(E5)に位置する。周囲には小ピットが1基存在する以外は遺構の存在は認められない。検出面は、遺物包含層(IV層)を除去したV層上面である。検出時は略長方形の炭化物や土器片の散乱する黒褐色シルトの広がりである。わずかに調査区南端外側に続くとみられる。

形態は平面やや不整形な方形である。規模は、長軸2.92m、短軸は調査範囲内で確認できる長さが、2.4m以上である。

堅穴住居2



第32図 聚穴住居2

側壁は、緩やかに立ち上がり、豊穴住居等の立ち上がりとは異なる。底面は緩やかな凹みであり、東側に脆弱な煉土が形成されている。また、炭化物の集中範囲についても東側底面に広がる。

埋土は4層に区分でき、最上層は黒褐色シルトを主体とする。土器や焼土・炭化物を含む。上層は暗褐色シルトが帶状に堆積している。やはり焼土・炭化物が含まれる。下層は暗褐色シルトで、炭化物、焼土塊がより多く含まれる。最下層は地山に近い黒褐色シルトであるが、焼土粒や炭化物小粒がわずかに認められるため遺構埋土としたが、この上面が機能時の面である可能性が高い。

埋土より一定量の土師器が出土した。器種は壺、鉢、甕である。いずれも9世紀前半から半ばにかけてのものである。

底面に広がる焼土の存在から土器焼成遺構である可能性が考えられる。また、出土遺物から平安時代、9世紀前半から半ばの時期が考えられる。なお、遺構内の焼土を覆う炭化物の年代測定をおこなっており、上述年代を含む年代測定値が示されている（V章分析参照）。

### 土坑2(第34図、写真図版51・52)

調査区は中央(E 1)に、堅穴住居2の東側に位置する。現代の水道管理設の堀方によって切られているが、その他の遺構との切り合い関係はない。

検出面は、遺物包含層(Ⅲ・Ⅳ層)を人力で除去したV層上面で検出した。IV層掘削中およびV層上面精査中、IV層が平面方形の形状にとどまり、除去できないことでこの遺構を認識した。すなわち、IV層が遺構の凹みを含めた周囲を被覆堆積したものと考えられる。IV層の堆積によって最終的に埋没したことがわかる。

平面形態は長方形であり、規模は東西長1.6m、南北長1.9mである。深さは最深部でも13cmであり、かなり浅い遺構である。検出状況を考えると、ほぼ当時の遺構面であることから本来的に浅い構造であったとみられる。

壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩やかに凹む。底面の広い範囲では、赤化と硬化が顕著な焼土が形成されていることが認められる。焼土化には厚みもあり、比較的の高温で長時間被熱したものと推測される。

埋土は、遺構面を覆う遺物包含層であるIV層であり、埋土より出土した土器類もこれに含まれている。したがって、遺物自体はこの遺構とは直接関わらないものとして捉えることができる。

出土した土器は9世紀前半から半ばの土師器であり、遺物包含層中に含まれている土器と大きく違わない時期である。

遺構底面でしっかりと焼土が形成されていることから、内部で何らかの焼成がおこなわれたものとみられる。土坑1とは異なる点もあるが、現段階では平安時代、9世紀代の土器焼成遺構である可能性がもっとも高いと考えられる。

### (3) 小 ピ ッ ト

#### 小ピット(第35図、写真図版52)

調査区東側(E4)に位置する極小規模な凹みである。遺物包含層(IV層)を除去し、V層上面での精査をおこなっている最中に検出した。土器片がいくつかまとまって顔を出していること、IV層が局所的に深くなることから遺構であると考えた。平面円形であり、筒形の遺構である。IV層によって埋没したものと推測され、出土遺物もこれに含まれる。したがって、IV層の堆積時に開放していた小ピットに遺物包含層が流入して完全埋没したものとみられる。出土遺物は土師器と礫(軽石)が出土した。これらはこの小さな凹みに詰まっており、土壤よりも遺物の占める割合の方が多い。同様の規模の小ピットは、これ以外に認められないことから柱穴でないことは明らかであるが、その性格については不明である。ただし、時期は土坑などと同様の堆積状況であることから平安時代、9世紀代の凹みであることは間違いない。

### (4) 溝

#### 溝1(第35図、写真図版53)

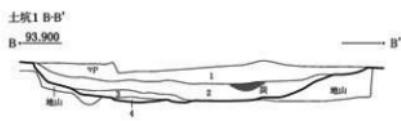
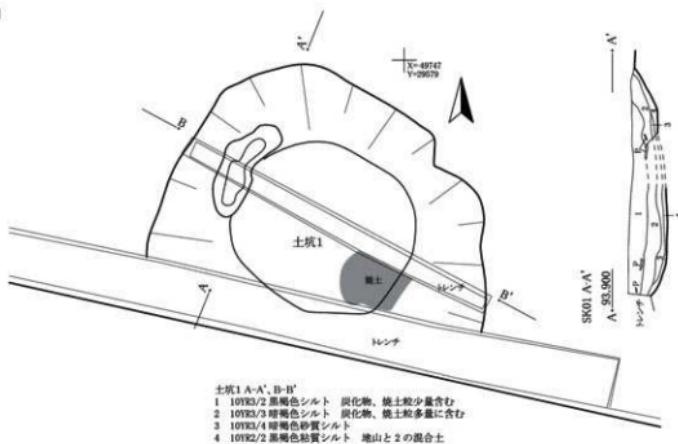
溝1は調査区西側(W3)に位置する南北方向の溝である。調査初期段階に掘削した調査区南端部の層序確認トレンチで、遺構であることを確認した。その後、遺物包含層(IV層)を人力で除去し、V層上面を精査すると、帯状にIV層が残存することで平面プランを検出した。なお、このエリアは、遺物包含層のうち上層にあたるIII層が分布していない。

規模は、上幅1.49m、下端幅45cm、深さ42cmである。平面は直線的に南北方向へ延び、断面は「U」字形を呈する。

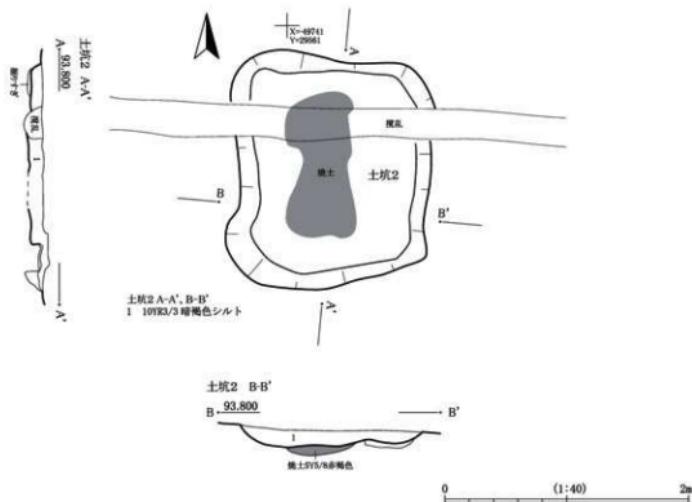
埋土は、おおむね4層に区分できるが、上部2層はIV層由来の流入土壤である。遺物も若干量含まれるが、遺物包含層であるIV層に含まれるものであると考えられ、この溝とは直接関わらない遺物であると思われる。下層には部分的にラミナの形成が認められることから、わずかながらも流水があつたことが想像できる。ラミナの向きからみて、南から北へ向けて水が流れた可能性が考えられる。

土坑などの遺構と同じく、遺物包含層であるIV層の堆積が最終的な埋没となっていることから同一の時期である平安時代、9世紀代に機能し、その後自然埋没したものと考えられる。機能は不明であ

## 土坑 1

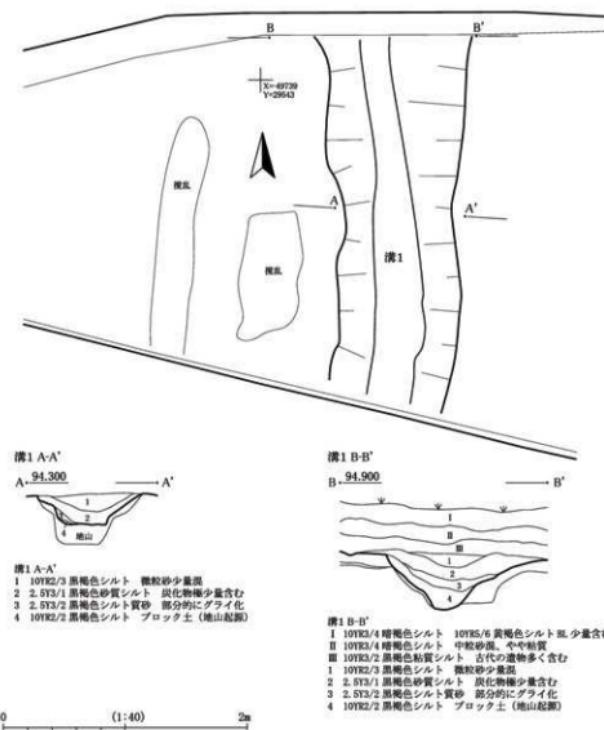


## 土坑 2

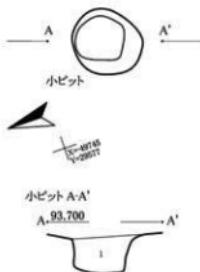


第 33 図 土坑 1・2

溝1



小ビット



小ビット  
1 10Y3/4 棕褐色シルト 10Y3/4 増褐褐色シルト混合土 (撲土 B. 灰化物多く含む) 上部片多量

0 (1:20) 1m

第34図 土坑1、小ビット

るが、流水痕跡があることから排水等のために設けられた溝、あるいは集落域で何らかの区画を意図して設けられた溝などの可能性が考えられる。

#### (5) 遺物包含層

##### 遺物包含層（第29図、写真図版45）

表土除去後に検出した遺物包含層は、おおむね調査区全体に認められるが、調査区東のE 5・E 6、調査区西側のW 3・W 4を除いた調査区中央に遺物が包含される自然堆積層である。

今回の調査では、基本層序のⅢ層およびその下位のⅣ層がこの遺物包含層に該当する。遺物が含まれるE 4～W 2の範囲では層厚もやや厚い。このエリアが東西端に比べると遺物包含層の堆積前にやや凹んだ地点であったことがわかる。

上層のⅢ層と下層のⅣ層には間層を挟まないが、それぞれ土質が異なる。最初に堆積した下層は砂質で、その後に堆積した上層は粘質シルトである。この性質の差は、堆積の過程によって異なるものであると考えられる。下層はそれほど流速の速くない流水による堆積であり、洪水時の初期段階の流入土であるとみられる。一方、上層は洪水時において一時に滞水していた状況で周辺の表面土壤を浸食しながら低地部分に沈殿するように堆積したものであると考えられる。このことから基本的に上層も下層もほぼ一度の水害によって形成されたものであるとみられる。その氾濫の時期は、上層であるⅢ層上位で部分的に十和田a火山灰がみられることから10世紀前半よりやや古い時期の氾濫とみるのが妥当である。特に氾濫が、周辺から火山灰を集めて堆積させた様子は認められないため、水成の堆積がすでに落ちていた後に十和田a火山灰の降下を迎えたと考えられる。すなわち、氾濫は9世紀後半～10世紀初頭に起こったものと理解され、調査で検出された集落内の遺構は、すでに機能を停止し埋没がかなり進んだ後に、氾濫が生じ遺物包含層を形成したと解釈できる。

出土遺物は上層と下層に分けて取り上げたが、いずれの層位出土遺物も結果的に間野村遺跡・境遺跡の集落の土器と大きな隔たりはない。出土遺物は土器のみで構成され、多くは上層から出土し、下層出土遺物は極めて少なかった。この遺物量の差異についても堆積の状況差に起因するものと考えられる。

遺物包含層で認められた上層と下層の土質差は、遺物包含層のさらに下層でも互層となって認められることから、この地点では同様の堆積が繰り返されていたものと考えられる。しかし、これより下層において遺物が確認されないことを勘案すれば、古代以前において周辺には、人の営みがあまりなかったことを示している。北上川の流路の推移や流量・流速などの変化もあったと考えられ、9世紀以降に集落がこのエリアに進出したものとみられる。出土遺物や周辺の集落の様子からみて、徳丹城機能時期に展開する集落であると考えられ、少なくとも志波城の水害以降に成立した集落だったとみられる。

#### (6) 遺 物

出土遺物はほぼすべてが遺構および遺物包含層から出土した古代の土器類である。特に多くの土師器・須恵器は堅穴住居1で出土したものである。

##### 堅穴住居1出土遺物（第36～40図、写真図版54～58）

1～71の土器、97の土縫はいずれも堅穴住居1の出土遺物である。1～32は土師器壺、33～38は須恵器壺、39～68は土師器甕、69は土師器小形壺、70・71は須恵器甕である。器種の組成をみると、大半が土師器壺であり、これに土師器甕が次ぐ組成であり、須恵器類がやや少ない傾向である。出土

状況としては、残存率の高い個体ほど床面やカマド周辺貯蔵穴といった、より堅穴住居の機能時に近く、なおかつ完形個体あるいは略完形の個体は貯蔵穴内で多く認められる。これらの個体は廃絶直前の遺棄された様相を伝える集合体として捉えることができる。

1 ~ 32 はロクロが用いられた土師器坏であり、これらのうち 1 ~ 15までは黒色処理された坏であり、大半が内面のみの処理である。ただし 6・8 は外面にも全面ミガキがみられることから外面も黒色処理された坏である可能性が高い。5 は外面に墨書があるが、大半が欠損しているため字句は不明であるが、後述する 19 の土師器坏外面にみられる墨書が「万」であることからこの墨書も「万」の 2 画目・3 画目の下半部である可能性が考えられる。底部の残存する個体はいずれも回転糸切りによる切り離しがなされている。16 ~ 32 はいずれも黒色処理されていない坏である。完形個体も含まれるが、焼け歪みとなっている個体も定量含まれるのが特徴である。19 は外面に正位方向で「万」の一文字が墨書されている。やや太めの筆致で、2 画目が 1 画目と 3 画目の結節部から開始されているという特徴がある。21 は 2 次的な被熱によるものか内外の器表面にクレーター状の剥離が多くみられる。また、口縁部に炭化した縁取りがみられることから逆位で置かれ、台として二次利用されたものと考えられ、カマド燃焼部で煮沸形態の支脚として用いられた経歴を有するものと考えられる。23 と 25 は特異な器形の坏である。いずれも腰の張る椀形の形態を呈しており、その他の通常の坏とは形態的に大きく異なる。23 は深みもあり、器高も 7cm と高い。26 は体部外面上方に明瞭な段があり、口縁部の強いナデによって生じた段であるかもしれないが、類例がなく器形とともに特徴的である。

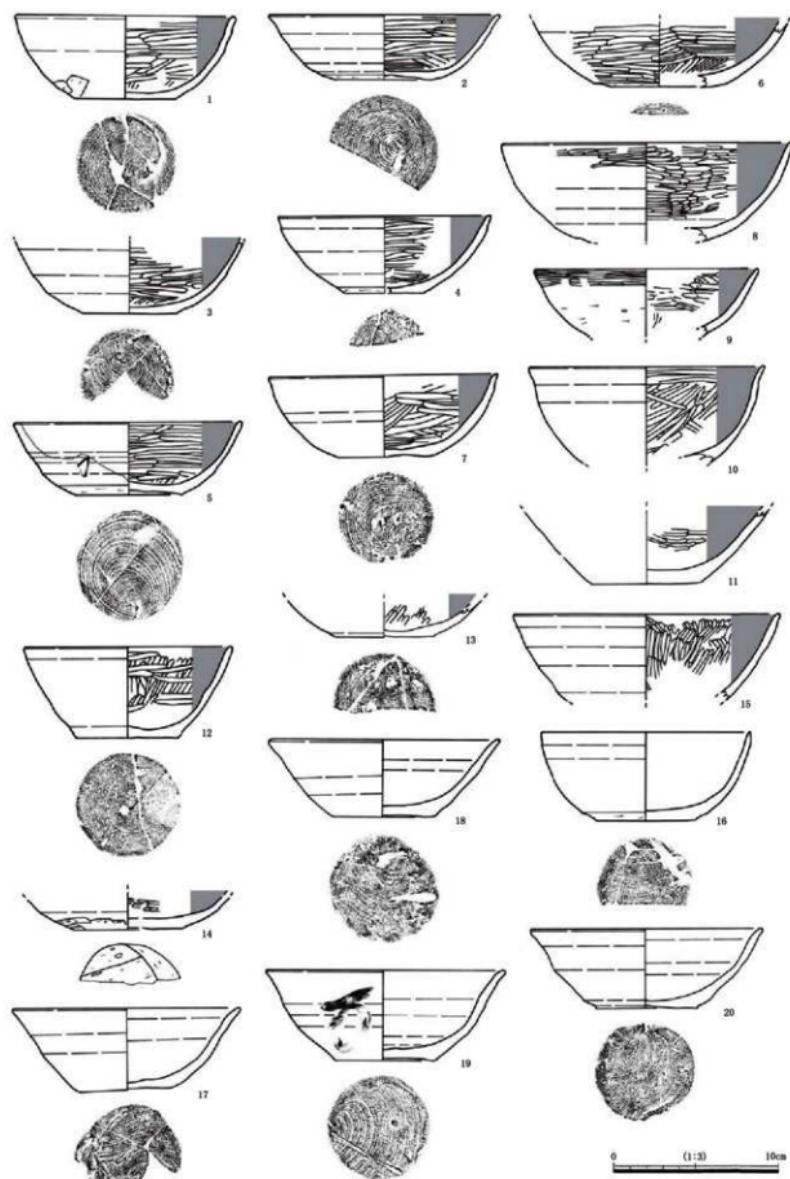
33 ~ 38 は須恵器坏である。いずれも底部回転糸切りであり、胎土は精良である。色調は青灰色のものと灰黄褐色のものも存在する。土師器坏よりも器壁がやや薄い傾向にある。

39 は土師器鉢である。ロクロによる回転力が用いられた調整がなされており、内面はミガキ調整が施され黒色処理されている。口縁部や体部外面の形態は土師器壺に近いが、胎土は壺と異なり大きな砂粒を含まず非常に精良であり、黒色処理された土師器坏に近い胎土である。焼成も土師器壺よりも黒色処理された土師器坏に近い焼成空開気である。

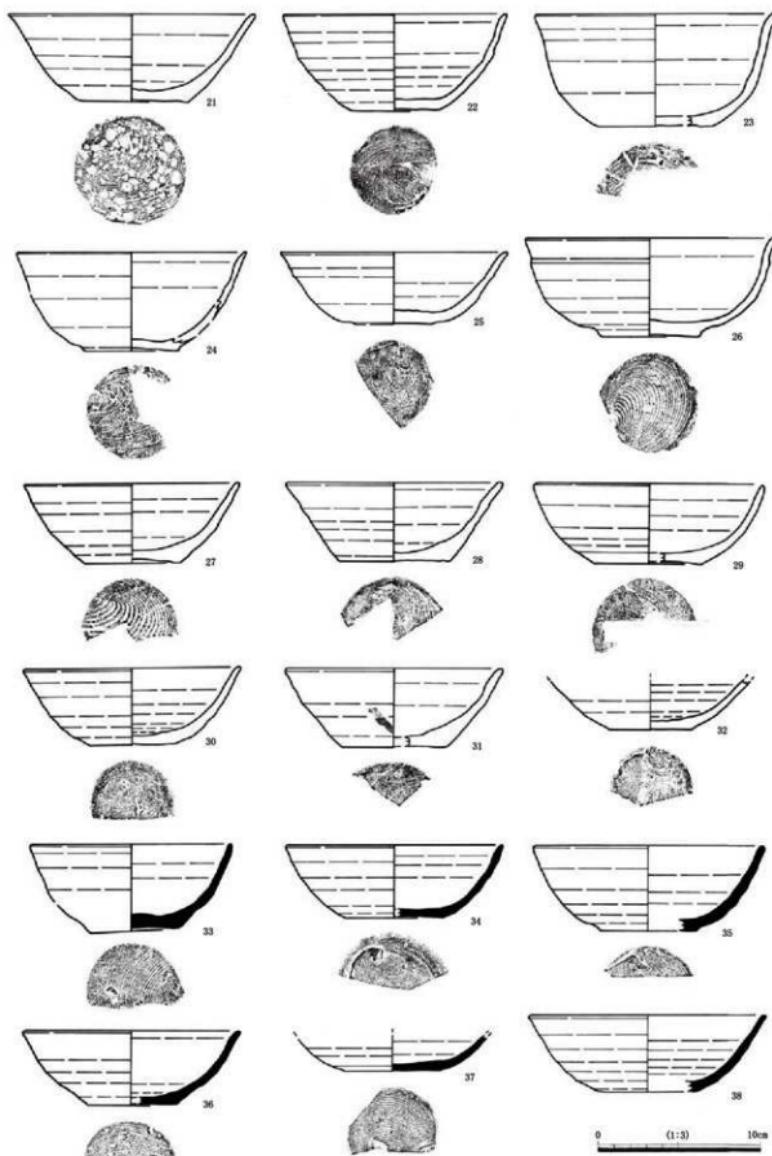
40 ~ 46 は土師器小形器種であると考えられる。いずれもロクロが用いられている。器形や大きさにはばらつきがあり、安定して生産・使用されたものではないと考えられる。これらのうち、40 は体部上位に最大径がある広口の壺形である。41 は土師器小形ロクロ壺の相似形であり、壺と呼称しても問題ない形態である。42 は 40 の相似形であり、さらに小形である。体部外面には刻書が認められるが、文字かどうか不明である。43 は 53 のような浅めの小形壺の相似形である。

47 ~ 65 はロクロが用いられた土師器壺である。煮沸形態である土師器壺の 90% を占めており、特異な組成となっている。47 ~ 52、55 ~ 62、64・65 は小形壺である。口縁部が極端に屈曲する形態のものと緩やかに外反するものとに分類できる。前者は比較的直線的に体部が立ち上がり、器高もやや高く器壁が薄いが、後者は体部が比較的緩やかに丸みを帯び、器高も低く器壁もややあついものが多い傾向である。また、前者は褐色や灰褐色などの色調を呈するものが多く、後者は黄橙色など明るい色調を呈するものが多い。48 は体部外面に焼成前の刻書がみられるが、文字かどうかは判断できない。

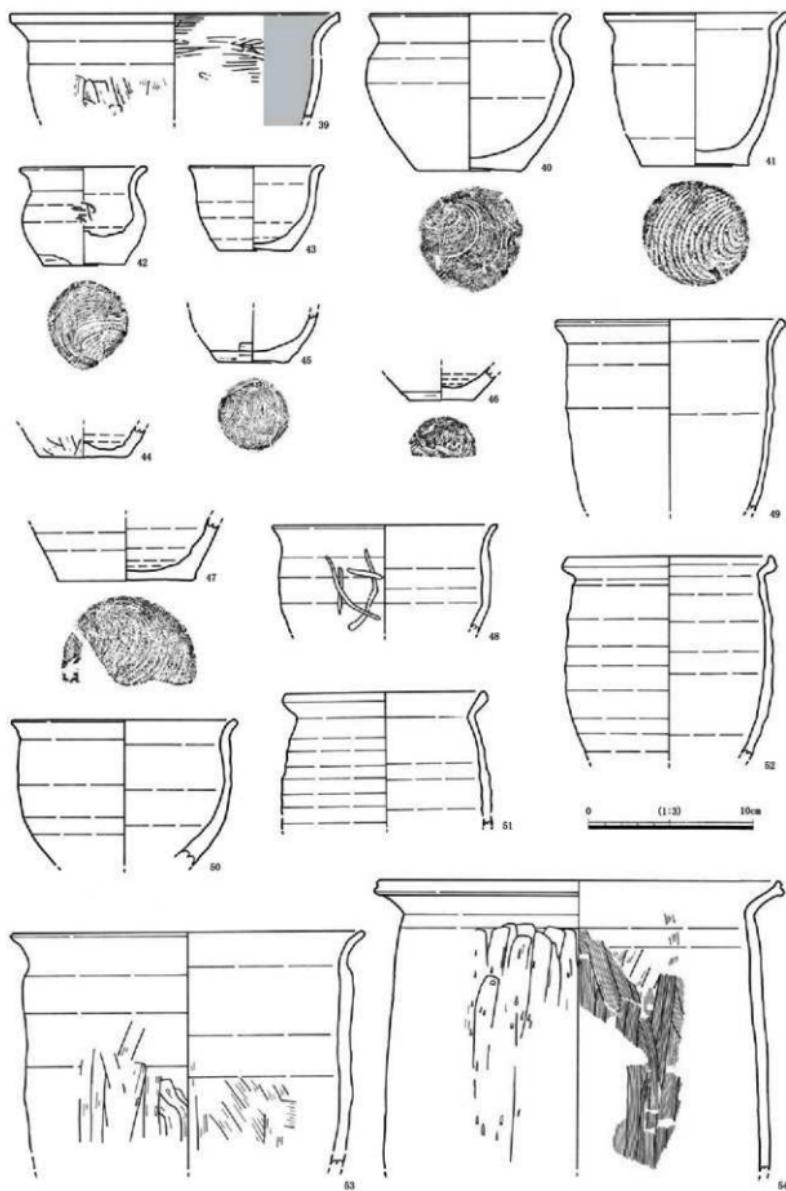
53・54、56 ~ 58、63・68 はいずれも大形の土師器壺である。調整にロクロが用いられており、外面下半はタテ方向の工具を用いた調整、外面上半はロクロ目が認められる個体が多い。しかし、57 はロクロの用いられた壺であるが、外面には全面的にタタキがみられる。タタキは平行のタタキ目を有する工具であるが、異なる方向から施されているため、切り合いで斜格子状になる範囲が存在する。回転方向を変えたか、持ち手を変えたかわからないが、入念にタタキが施されている。底部



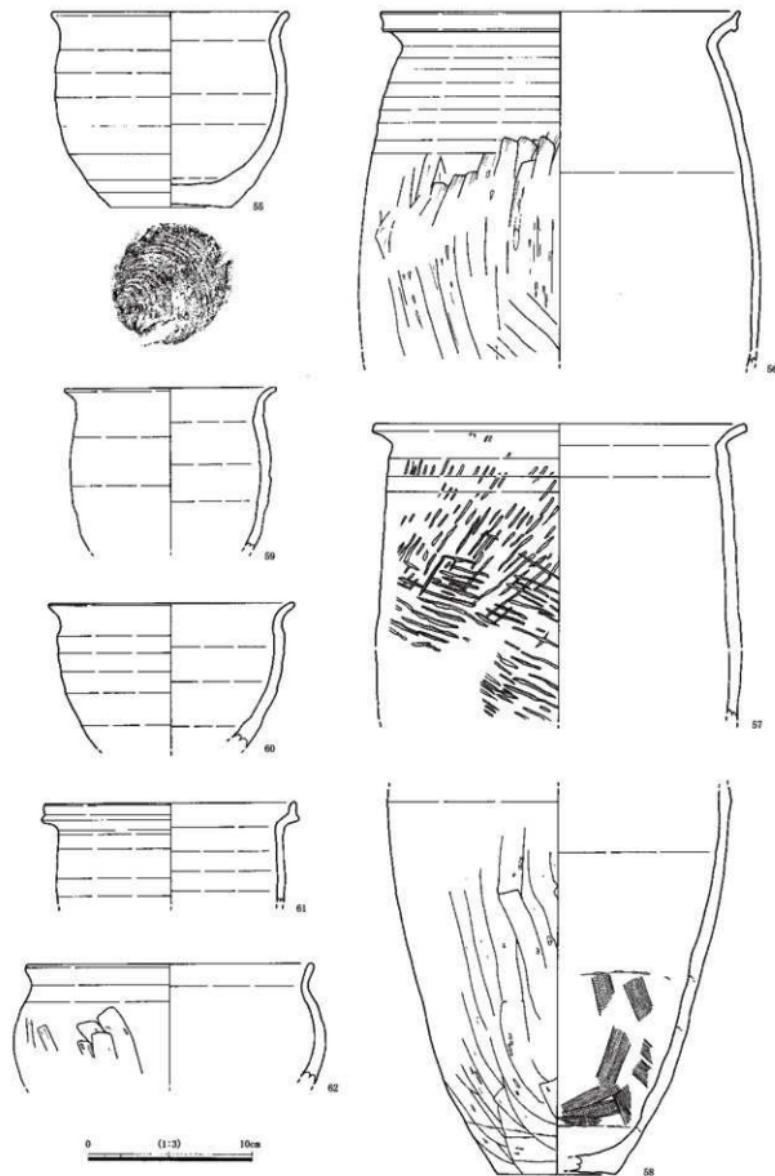
第35図 積穴住居1出土遺物(1)



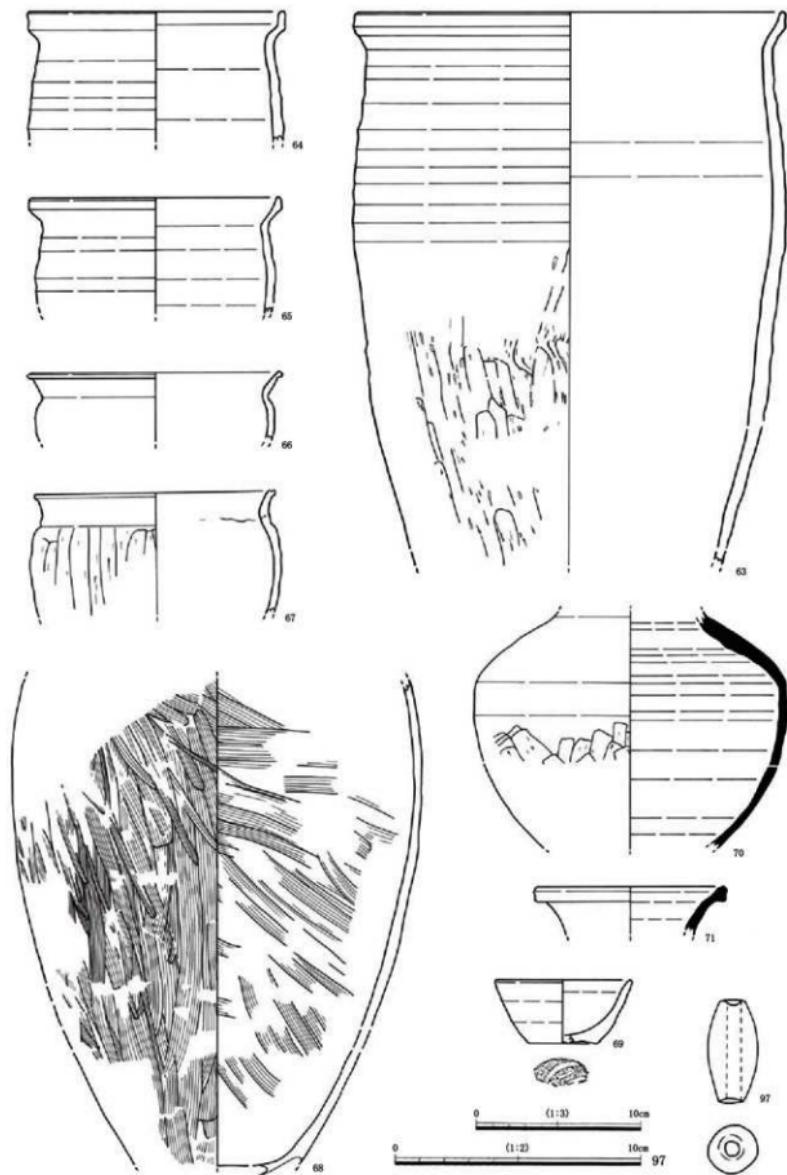
第36図 壁穴住居1出土遺物（2）



第37図 積穴住居1出土遺物（3）



第38図 穂穴住居1出土遺物(4)



第39図 穂穴住居1出土遺物(5)

はみられないが、丸底に近い形態である可能性も考えられる。

66～68はロクロが用いられていない土師器壺である。66・67は小形であるが、68は大形である。68は内外面ともに細かなハケ調整が施されている。70・71は須恵器長頸瓶である。70は体部片である。外面中位には不定方向のケズリ調整がみられる。部分的に焼成不良の箇所が認められるが、硬質・良好に焼成されている箇所は肩部に濃緑色の自然釉も認められる。71は口縁部である。焼成良好で堅致である。

69は小形の土師器であるが、器種は不明である。坏か鉢を意識したものであると思われる。ロクロによる調整のみならず、底部には回転糸切りの痕跡も認められる。

97は土師質の土錘である。中央の膨らむ管状の形態である。焼成は良好であり、大粒の砂粒も含まない胎土である。色調はやや淡い黄橙色である。漁労具であると考えられる。

#### 竪穴住居2出土遺物(第41図 写真図版58)

72～75は竪穴住居2出土遺物である。すべて9世紀代の土器である。器種は須恵器壺、土師器壺、須恵器壺である。

72・73は須恵器壺である。両者の口径はほぼ同じであるが、器高は73の方が低い。両者ともに底部には回転糸切り痕がみられる。72には口縁部に暗色帯があり、明瞭な重ね焼きの痕跡であると考えられる。

74は土師器壺である。小形でロクロが用いられている。口縁部は外方へ屈曲し開いた形状である。

75は須恵器長頸瓶の口縁部片である。青灰色で焼成良好、堅致である。

#### 土坑1出土遺物(第42図 写真図版58～60)

76～86・98は土坑1出土遺物である。大半は埋土上層より出土しており、遺物包含層由来の土壤中に含まれるものであると考えられる。

76～80は坏類である。76は内面にミガキ調整と黒色処理が施された土師器壺である。77・79・80も土師器壺であるが、内外面ともにミガキ調整および黒色処理は施されていない。79は体部最下端に回転ヘラケズリが認められる。78は須恵器壺である。やや焼成不良のためか淡い灰黄褐色を呈する。

81は土師器鉢の体部下半片であると考えられる。一見すると土師器壺のような形態・胎土であるが、通常の坏類の2倍の大きさである。体部外面下半にはヘラケズリ、内面には細かなミガキ調整が施されており、内面黒色処理されている。底部は回転糸切りである。上半部は坏のような形態になるのか甕のような形態になるのか不明であるが、残存部最上部は非常に器壁が薄いという特徴を有する。

82～86は土師器壺である。82・85は調整にロクロの回転力が用いられていない壺である。あまり大きな形態ではないものと思われる。83・84・86は調整にロクロの回転力が用いられている壺であり、

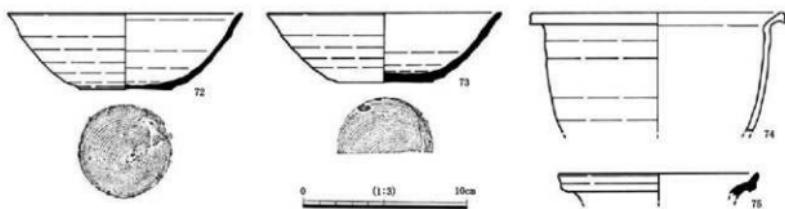
83は体部中位から下半部片、84は下半片である。86は口縁部から体部下半片である。いずれも外面の体部下半はタテ方向のヘラケズリで仕上げられている。86の口縁部は、短く屈曲し、内面側は平滑であるが外面側は肥厚する。

98は軽石の研磨器である。上面は内彎しており、何らかの研磨によって表面が滑らかになっている。彎曲しているため曲面を有する利器の研磨に用いられた可能性が考えられる。

#### 土坑2出土遺物(第43図 写真図版60)

87・88は土坑2出土遺物である。いずれも埋土上層より出土しており、遺物包含層由来の土壤中に含まれるものであると考えられる。

87は土師器壺である。内面ミガキ調整、黒色処理が施されている。体部最下端は回転ヘラケズリが巡る。底部は回転糸切りの痕跡を残す。



第40図 穫穴住居2出土遺物

88・89は土師器壺である。88は半身ながら口縁部から底部まで残存する。器壁が薄いことが大きな特徴の一つである。外面調整は体部上半クロコによる回転ナデ、体部下半はタテ方向のヘラケズリである。口縁部は端部を上方に引き出す受け口状口縁である。体部形態は中位からやや上に最大径を持ち、緩やかに膨らみ底部に向かって窄まる形態である。灰黄褐色の色調を呈し、外面には煮沸に使用された痕跡を残す。89は口縁部から体部上半までの破片である。体部最上部の頸部付近には明瞭なロクロ目を有しており、回転ナデが施されている。これより下部は外面ヘラケズリがタテ方向に認められ、かなり上方までヘラケズリが及んでいることがわかる。そのことから体部下半はあまり長く伸びず、器高は大形の壺より低い中形程度の器形であると推測される。口縁部から頸部形態については、頸部で「く」の字形に屈曲し、外方へ開く口縁部を有する。この口縁部が土器最大径となっている。全体的に黄橙色を呈するが、非常に堅致に焼成されている。

#### その他の出土遺物(第43・44図 写真図版60)

ここでは、その他小ピット出土遺物、遺物包含層出土遺物についてまとめて記述する。小ピット内からは土器片が多数出土したが、土器1点、石製品1点のみ図化掲載した。遺物包含層からも一定量遺物が出土した。出土遺物は土師器片や須恵器片であり、遺構出土遺物の帰属時期との時間的な隔たりはほとんどないものとみられる。出土量は上層であるⅢ層の方が下層であるⅣ層よりも多く、E 1～3に多く分布する。

99は多孔質の輕石でできた凹石である。小ピット内に土器片とともに出土しており、98のものに石質は近いが、磨痕は顯著ではない。中央が凹んでおり、これが使用痕であると考えられるが、用途は不明である。

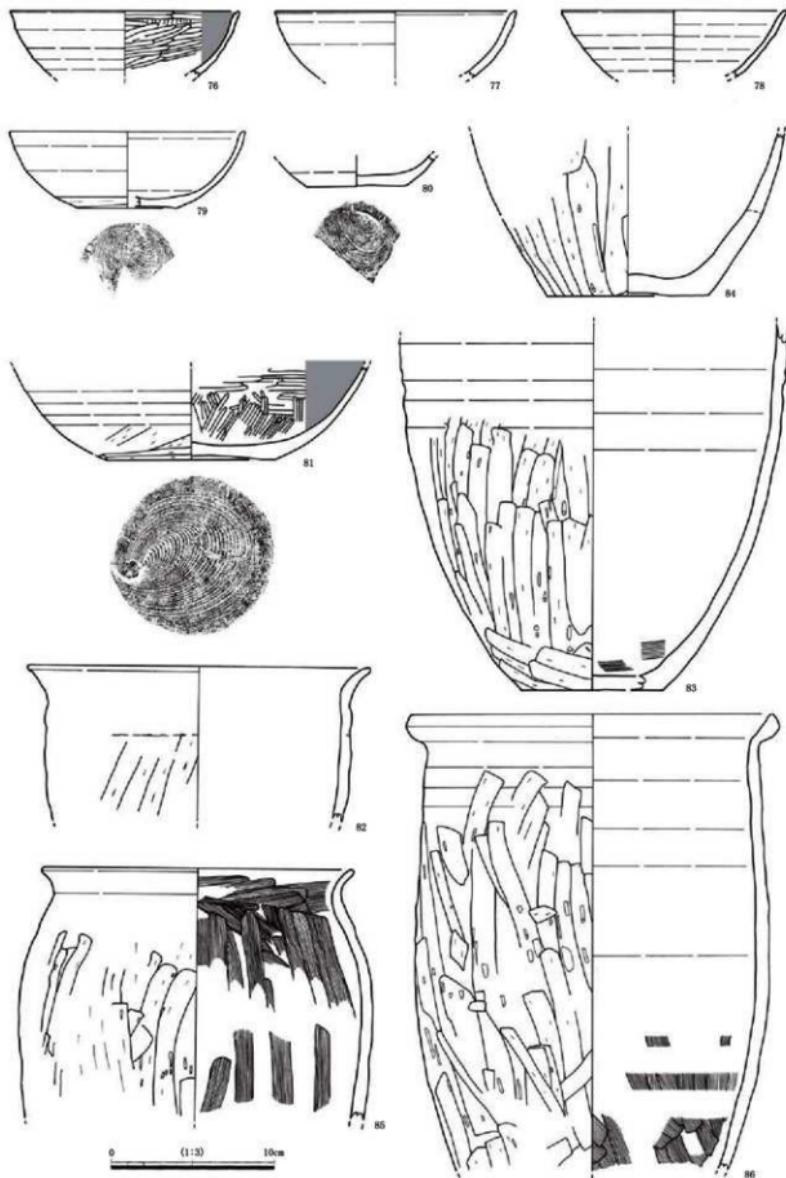
90～95は土師器壺である。

90は遺物包含層出土である。体部下半から底部にかけて残存する。内面はミガキ調整および黒色処理が施されている。底部は回転糸切りが施されていると考えられるが、軟質な仕上がりのうえ、摩滅しており判然としない。

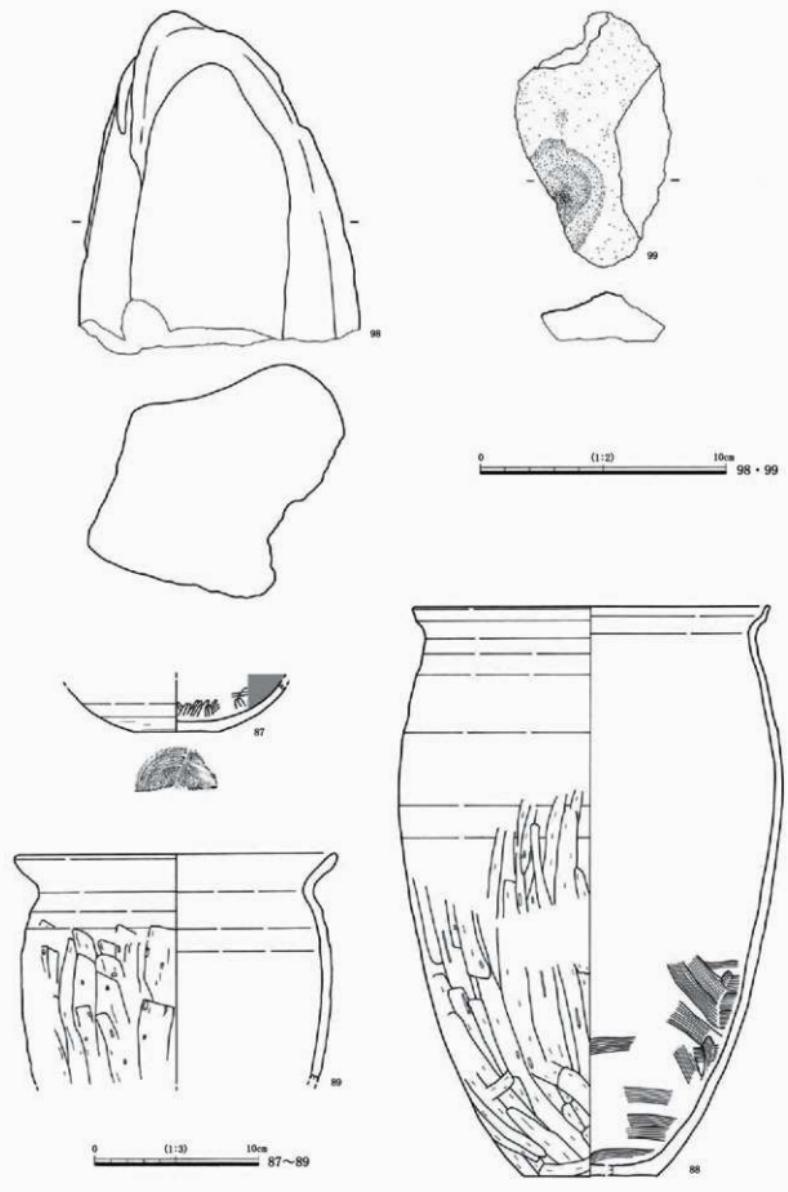
91も遺物包含層出土である。体部下半から底部にかけて残存する。内面はミガキ調整および黒色処理が施されている。体部最下端には回転ヘラケズリが施されている。底部は回転糸切りの痕跡が鮮明に認められる。

92も遺物包含層出土である。口縁部から体部の破片である。内面にはミガキ調整と黒色処理が施されているが、摩滅等で不鮮明である。やや丸みを帯びた形態である。

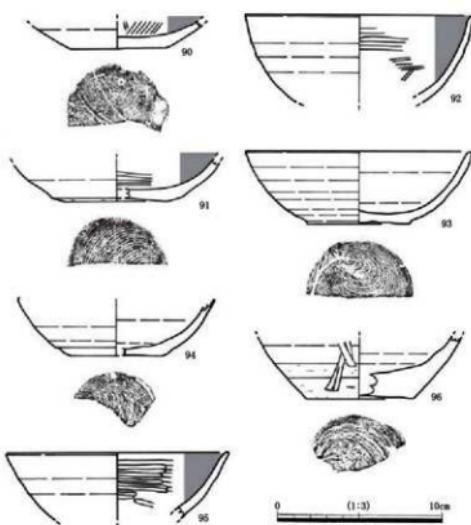
93は小ピット埋土により他の土器片とともに出土した。赤褐色であり、器高低めの形態である。極端に大きな砂粒は認められないが、他の土師器壺よりも白色極小砂粒が目立っている。土師器壺よりも須恵器壺に近い特徴を有するが、器厚は須恵器よりもやや厚い。



第41図 土坑1出土遺物(1)



第42図 土坑1(2)・土坑2・小ビット出土遺物



第43図 その他の遺物

94は遺物包含層出土である。ややクリーム色を帯びた黄橙色である。底部は回転糸切りの痕跡が認められる。

95は遺物包含層出土である。口縁部から体部までの破片である。内面にミガキ調整が認められるが、黒色処理は酸化のためか消失している。口縁部端部がやや外反する傾向である。

96は土師器壺の体部下半から底部にかけての破片である。非常に厚い底部が特徴的である。体部は内外面ともにロクロの回転力による回転ナデが施されており、ロクロ目が明瞭である。体部外面の下端部には回転ヘラケズギが2段認められ、全周しているようである。外面には焼成前のものとみられる刻線が深くみられるが、全体が残存していないため字句かどうかの判断はできない。

### 3 小 結

境遺跡は発掘調査によって平安時代の遺構・遺物が認められた。検出遺構は2棟の竪穴居、2基の土坑、溝1条、小ピット1基である。出土遺物は土師器・須恵器を主体とする古代の土器である。土器以外では土錘1点、磨石1点、凹石1点である。図化し、本書に掲載した土器は96点である。

検出遺構および出土遺物から平安時代、9世紀前葉から半ばにかけて営まれた集落であったものと考えられる。この集落は北上川の川原やその氾濫原に接した自然堤防上に立地しており、東側の後背湿地を挟んだ低位段丘縁辺部には間野村遺跡の平安時代集落が存在する。間野村遺跡も9世紀前半であり、併存していた可能性も考えられるが、遺物からは間野村遺跡の方がやや古段階である可能性がある。境遺跡の集落は廃絶後間もなく河川の氾濫によって埋積した土壤によってパックされ、集落の形を良好に留めている。これは堆積の良好な地点であるため、近現代の耕作に際しても、掘削が遺構面まで達していないからである。同一の地形面、特に北側にこの集落は広がっていると考えられる。

2基の土坑はいずれも明らかの焼成を伴う遺構であったことが判明しており、現段階では土師器の焼成に関わるものと推測している。周辺にも同様の遺構や土器未製品の廃棄土坑、ロクロピットなどが存在している可能性があり、今後注意が必要である。また、土錘の出土は北上川での漁労活動を想起させ、川に近い集落の生業の一端を示している。

第5表 境遺跡（令和3年度）掲載遺物一覧（土器）

編號 No.	種別 器種	出土遺構	位置・層位	特徴的箇所	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			備考
								口径	器高	底径	
1	土 壺	堅穴住居1	南東理土中層、理土上層	下半ハラケズリ	精良	良好	黄褐色	(13.0)	6.2	5.1	
2	土 壺	堅穴住居1	理土下層	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(14.0)	(6.0)	4.0	
3	土 壺	堅穴住居1	カマド1北邊物集中、カマド2北側中ベルト理土上層	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	-	(5.8)	<4.5>	
4	土 壺	堅穴住居1	南東理土上層、南西理土上層 カマド2北側中ベルト理土上層	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(13.0)	(4.8)	4.75	
5	土 壺	堅穴住居1	北半ベルト上層	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(13.8)	6.4	4.5	
6	土 壺	堅穴住居1	北半ベルト上層	内外面ミガキ	精良	良好	褐褐色	-	(6.0)	<4.0>	
7	土 壺	堅穴住居1	カマド3西座敷	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	(14.0)	(5.8)	5.0	
8	土 壺	堅穴住居1	北西理土上層、区1→W3-4層	内外面ミガキ?	精良	良好	黄褐色	(17.8)	-	<6.1>	
9	土 壺	堅穴住居1	北東理土北東理土中層カマド1南被床底	下半ハラケズリ	精良	良好	黄褐色	(13.6)	-	<4.2>	
10	土 壺	堅穴住居1	カマド1北邊物集中	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	(14.3)	-	6.0	
11	土 壺	堅穴住居1	南東理土上層	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	-	6.8	<4.5>	
12	土 壺	堅穴住居1	南東理土上層、南西理土上層	底部回転ヘラケズリ	精良	良好	赤褐色	13.0	6.2	5.6	
13	土 壺	堅穴住居1	南西理土同窓	内面ミガキ	精良	やや不良	黄褐色	-	(6.1)	<2.25>	
14	土 壺	堅穴住居1	南東理土上層、北西理土上層	底部・体部下端ヘラケズリ	やや粗	良好	灰黃褐色	-	(3.6)	<2.0>	
15	土 壺	堅穴住居1	南東理土中~下層、カマド上覆土	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	(16.4)	-	<5.3>	
16	土 壺	堅穴住居1	カマド1北邊物集中、南東理土最下層、貯藏穴	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(12.8)	(6.0)	5.4	内面黒色処理の可能性あり。
17	土 壺	堅穴住居1	カマド上覆土、カマド焼土、被覆層	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	14.0	5.7	5.3	
18	土 壺	堅穴住居1	貯藏穴理土	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	14.1	6.4	4.8	
19	土 壺	堅穴住居1	貯藏穴理土	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	14.7	6.2	5.7	墨書き「万」。
20	土 壺	堅穴住居1	貯藏穴理土	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	14.0	6.2	4.9	
21	土 壺	堅穴住居1	北東理土理土上位	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	15.3	7.1	5.6	二次被熱。
22	土 壺	堅穴住居1	カマド1南被前床底、SH01を切る水道管 カクラン	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	(14.0)	5.5	7.0	
23	土 壺	堅穴住居1	カマド3直理土上層、カマド上覆土	回転ナデのみ	精良	良好	赤褐色	(15.0)	(7.2)	7.0	
24	土 壺	堅穴住居1	SH01を切る水道管カクラン	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	(14.3)	5.9	6.2	
25	土 壺	堅穴住居1	北東理土上層	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	(14.2)	(5.0)	4.45	
26	土 壺	堅穴住居1	ベルト西理土上層、北西理土中層、ベルト焼土(理土)	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	(15.4)	(6.2)	6.65	
27	土 壺	堅穴住居1	カマド3被覆層、カマド北(調査区跡) 後土面被覆層	回転ナデのみ	精良	良好	赤褐色	(13.9)	(6.0)	4.95	
28	土 壺	堅穴住居1	カマド3上覆土、カマド焼土被覆層	回転ナデのみ	精良	良好	黄褐色	(13.6)	(7.0)	4.9	
29	土 壺	堅穴住居1	カマド1南被前床底、 南西焼附出面(焼上か?)	回転ナデのみ	精良	良好	赤褐色	(14.3)	(6.6)	4.95	
30	土 壺	堅穴住居1	ベルト東理土上層	回転ナデのみ	やや粗	良好	黄褐色	(13.4)	(5.2)	4.75	

第5表 境遺跡（令和3年度）掲載遺物一覧（土器）

編號 No.	種別 器種	出土遺構	位置・層位	調整・文様	胎土	焼成	色調	寸法 (cm)			備考
								口径	器高	底径	
31	土 壺	堅穴住居1	南西壁土中層、南東壁土中層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(13.9)	(6.6)	4.9	墨書き。
32	土 壺	堅穴住居1	カマド上覆土	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	-	(5.2)	<3.1>	
33	瓶 壺	堅穴住居1	北東壁際北東理土中層、カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	やや不良	灰色	12.6	5.8	5.5	
34	瓶 壺	堅穴住居1	南西壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	(13.6)	(6.2)	4.5	
35	瓶 壺	堅穴住居1	カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	やや不良	灰褐色	(14.3)	(6.0)	5.3	
36	瓶 壺	堅穴住居1	ベルト東壁土中層、北半ベルト上層	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	(13.6)	(5.7)	4.6	
37	瓶 壺	堅穴住居1	北東壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	灰褐色	-	(6.0)	<2.2>	
38	瓶 壺	堅穴住居1	北東壁付近縦上層、北東壁際北東理土中層、カマド上覆土、カマド1断削	回転ナゲのみ	精良	良好	灰褐色	(14.5)	-	4.45	
39	土 舟	堅穴住居1	床直、カマド1袖前	内面ミガキ、体下平ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(20.2)	-	<6.6>	
40	土 舟	堅穴住居1	北東壁土中層、カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	良好	赤褐色	(12.3)	6.4	9.7	小形
41	土 瓢	堅穴住居1	北西壁土中層、北西床面直上	回転ナゲのみ	精良	良好	赤褐色	(11.0)	6.6	9.4	小形
42	土 瓢	堅穴住居1	埋土下層	回転ナゲのみ	精良	良好	赤褐色	(7.7)	5.0	6.1	小形、刻書？
43	土 舟	堅穴住居1	貯蔵穴埋土	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	8.1	4.5	5.2	小形
44	土 瓢	堅穴住居1	南西壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	-	(5.4)	<1.9>	
45	土 瓢	堅穴住居1	北東壁土中層	回転ナゲのみ	精良	良好	赤褐色	-	4.4	<3.2>	
46	土 瓢	堅穴住居1	南東壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	-	(4.0)	<2.0>	
47	土 瓢	堅穴住居1	ベルト西壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	-	(8.4)	<3.9>	
48	土 瓢	堅穴住居1	カマド1壇土被覆層 区画1 to east 植出面	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(13.8)	-	<6.7>	
49	土 瓢	堅穴住居1	北東壁土中層、北東壁際、北東理土中層、 カマド1上覆土、カマド1壇土被覆層	回転ナゲのみ	やや粗	良好	赤褐色	(13.6)	-	<11.8>	
50	土 瓢	堅穴住居1	カマド1壇土被覆層上層、カマド1上覆土、 W1(包含層)	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(13.8)	-	<9.0>	
51	土 瓢	堅穴住居1	南西壁土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(12.2)	-	<8.3>	
52	土 瓢	堅穴住居1	カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(12.4)	-	<12.5>	
53	土 瓢	堅穴住居1	北東壁土上層、北東理土中層、カマド燒 土被覆層	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(21.6)	-	<14.5>	
54	土 瓢	堅穴住居1	カマド1上覆土、カマド1南袖前床直、カ マド1断削	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(24.6)	-	<17.9>	
55	土 瓢	堅穴住居1	カマド1北遺物集中、カマド1北(調查 区画) 壱土面覆土	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(14.4)	6.5	12.1	
56	土 瓢	堅穴住居1	貯蔵穴埋土	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(22.0)	-	<22.0>	
57	土 瓢	堅穴住居1	南東壁土中層、北東理土中層、カマド1 北遺物集中、1断削	外周タキ	精良	良好	黄褐色	(23.2)	-	<18.3>	
58	土 瓢	堅穴住居1	南東壁土上層、ベルト北下層、E1(包含層 (上))	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	-	(7.4)	<2.8>	
59	土 瓢	堅穴住居1	カマド燒土被覆層、カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	やや不良	赤褐色	(13.0)	-	<10.0>	
60	土 瓢	堅穴住居1	カマド燒土被覆層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	(15.0)	-	<8.9>	

第5表 境遺跡（令和3年度）掲載遺物一覧（土器）

編號 No.	種別 器種	出土遺構	位置・層位	調整・文様	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			備考
								口径	器高	底径	
61	土	甕	堅穴住居1	カマド1北遺物集中	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	15.0	-	<6.2>
62	土	甕	堅穴住居1	北集巾ベルト埋土上層、カマド焼土被覆層、カマド1北遺物集中	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	17.8	-	<7.4>
63	土	甕	堅穴住居1	南東理土上層、カマド1直面土上層、北東理土上層、北東理土中層、北集中ベルト埋土上層、ベルト被覆土上層、カマド上層土、東ベルト中層	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	26.2	-	<34.0>
64	土	甕	堅穴住居1	南東理土上層、ベルト東理土中層、カマド上層土、カマド1新削	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	15.4	-	<7.9>
65	土	甕	堅穴住居1	カマド上層土、カマド1南袖前床底	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	15.2	-	<7.15>
66	土	甕	堅穴住居1	カマド1新削	ナテ	精良	良好	黄褐色	15.2	-	<4.1>
67	土	甕	堅穴住居1	カマド1新削	外面ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	14.9	-	<7.55>
68	土	甕	堅穴住居1	東煙けむ床底集中部。カマド1新削	内外面ハケ	精良	良好	黄褐色	-	(9.4)	<30.5>
69	土	壺	堅穴住居1	カマド焼土被覆層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	8.2	(4.2)	4.9 小形
70	頬	甕	堅穴住居1	北東理土窓穴?、カマド焼土被覆層、カマド1北遺物集中、蔚森穴埋土	下半ヘラケズリ	精良	良好	青灰色	-	-	<14.7>
71	頬	甕	堅穴住居1	北西理土中層	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	11.4	-	<2.9>
72	頬	壺	堅穴住居2	ベルト(埋土)、(北側)理土下層	回転ナゲのみ	精良	良好	灰色	14.4	5.8	4.7
73	頬	壺	堅穴住居2	ベルト(埋土)、(東面(北)上層、(北側)埋土中層	回転ナゲのみ	精良	良好	灰色	14.4	(5.8)	4.25
74	土	甕	堅穴住居2	ベルト上層 ベルト南北理土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	15.4	-	<7.35>
75	頬	甕	堅穴住居2	ベルト上層	回転ナゲのみ	精良	良好	青灰色	12.2	-	<1.6>
76	土	壺	土坑1	理土上層、ベルト内理土下層	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	13.9	-	<4.0>
77	土	壺	土坑1	ベルト南北理土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	14.6	-	<4.1>
78	頬	壺	土坑1	ベルト理土上層	回転ナゲのみ	精良	やや不良	黄褐色	13.7	-	4.1
79	土	壺	土坑1	南北理土中層、理土上層、ベルト南北理土上層、ベルト理土上層、ベルト内理土下層	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	14.4	(6.0)	4.7
80	土	壺	土坑1	ベルト南北理土上層	回転ナゲのみ	精良	良好	黄褐色	-	(6.0)	<1.9>
81	土	鋤	土坑1	ベルト南北理土上層	内面ミガキ、体下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	-	(10.2)	<5.7>
82	土	甕	土坑1	ベルト南北理土上層、ベルト内理土下層	ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(23.0)	-	<9.5>
83	土	甕	土坑1	ベルト南北理土上層、ベルト内理土下層、南北理土下層	下半ヘラケズリ やや糊	良好	赤褐色	-	(8.8)	<22.5>	
84	土	甕	土坑1	ベルト内理土下層	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	-	(9.9)	<10.0>
85	土	甕	土坑1	南東理土中層、理土上層、ベルト南北理土上層	外面ヘラケズリ、内面ハケ	精良	良好	黄褐色	(19.2)	-	<15.4>
86	土	甕	土坑1	南東理土中層、理土上層	下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(22.4)	-	<28.0>
87	土	壺	土坑2	理土	内面ミガキ	精良	やや不良	黄褐色	-	(5.2)	<3.15>
88	土	甕	土坑2	理土	下半ヘラケズリ、内面ハケ	精良	やや不良	黄褐色	(22.0)	(8.3)	35.0
89	土	甕	土坑2	理土	下半ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	(20.0)	-	<14.1>
90	土	甕	遺物包含層	E1 植出面	内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	-	(5.8)	<1.7>

第5表 境遺跡（令和3年度）掲載遺物一覧（土器）

編號 No.	種別	器種	出土遺構	位置・層位	調整・文様	胎土	焼成	色調	寸法(cm)			備考
									口径	高さ	底径	
91	土 壺	遺物包含層	W 1 Ⅲ層		下端回転ヘラケズリ	精良	良好	黄褐色	-	(6.0)	<2.5>	
92	土 壺	遺物包含層	W 1 Ⅲ層		内面ミガキ	精良	良好	黄褐色	(14.0)	-	<5.4>	
93	土 壺	小ビット	埋土		回転ナテのみ	精良	良好	米褐色	(13.6)	(6.4)	4.5	
94	土 壺	遺物包含層	W 3 Ⅲ層		回転ナテのみ	やや粗	良好	黄褐色	(12.0)	(5.6)	<3.5>	
95	土 壺	遺物包含層	E1 トレンチⅢ・Ⅳ層		内面ミガキ	精良	やや不良	黄褐色	(13.6)	-	<4.2>	
96	土 壺	遺物包含層	W2 S802上面Ⅴ層		下半回転ヘラケズリ	やや粗	良好	黄褐色	-	(6.5)	<3.9>	難判

種別欄：土…土器類、壺…瓶・壺

第6表 境遺跡掲載遺物一覧（土製品・石製品）

編號 No.	種別	出土遺構	位置・層位	寸法(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
97	土錠	堅穴住居1	南西壁上上層	42	20	2.0	
98	磨石	堅穴住居1	土坑1 稲土上層	<14.0>	12.5	9.6	輕石
99	凹石	小ビット	埋土	<10.4>	<6.4>	<2.4>	輕石

## VII 分析

### 1 分析試料と分析目的

発掘調査をおこなった間野村遺跡および境遺跡ではそれぞれ各種理化学的な分析を委託し、実施した。ここでは、それら各項目と実施した意図について述べる。

間野村遺跡では、火山灰分析・放射性炭素年代測定・胎土分析・土壤の種実遺体の洗い出しをそれぞれパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

火山灰分析は、堅穴住居1の埋土に含まれる火山灰を試料として用いた。この試料は現地での発掘調査中に発掘調査担当者が堅穴住居の断面(北側調査区境壁面)より採取したものであり、密封可能なビニール袋に入れて持ち帰り、そのまま分析者へ送付したものである。堅穴住居は出土遺物から9世紀前半に築かれたものと考えられ、その埋土中位に認められる灰白色の火山灰は十和田a降下火山灰(915年)であると想定された。周辺の北上川東岸域での十和田a降下火山灰分析はあまり事例がないことから今回分析を実施したものである。また、この火山灰が十和田a降下火山灰であれば、出土遺物との時間的関係に矛盾も生じないばかりか、堅穴住居廃絶後の堆積環境や堆積状況を推測する材料になり得る。

放射性炭素年代測定は、試料1~5の5点の炭化物を提供した。試料1は堅穴住居1に付属する石組みの煙出基底石の下位に散乱していた炭化物である。試料2は堅穴住居2埋土に認められた炭化物である。試料3は堅穴建物(中世)の床面焼土の上面で検出した炭化物を用いた。試料4は堀1埋土最上面で検出した炭化物である。試料5は試料1とほぼ同一地点で採取した別の炭化物塊を用いた。いずれの試料も遺構に伴うものであり、遺構の年代を知るための参考としたいため実施した。

胎土分析は、堅穴住居1より出土した人頭大の灰白色粘土塊を試料に選んだ。比較目的で土師器微細片1点、須恵器微細片1点を選び、これらも試料とした。粘土塊は用途不明であるが、土器生産との関わりの可能性を考え、土器とともに分析を依頼した。

土壤の種実遺体は、堅穴住居埋土の土壤を試料とした。肉眼では細かな粒状の炭化物があるように見えたため、洗い出して、植物遺体が抽出できるのではないかと思いつき依頼した。抽出できれば周辺の植生や食物としての雑穀などを確認できる。しかし、今回の洗い出しでは、残念ながら種実等の明確な植物遺体は検出されなかった。したがって、その結果報告についての本文は割愛した。

境遺跡では、放射性炭素年代測定のみ測定を依頼した。測定は株式会社加速器研究所によっておこなわれた。堅穴住居等古代の遺構に伴う炭化物を測定試料として提供した。これら試料は発掘調査において発掘調査担当者が現地で採取したものである。測定試料は2点である。試料1は、平安時代の堅穴住居である堅穴住居1の貯蔵穴から採取した炭化物である。この貯蔵穴では完形や略完形の土師器壺などが出土しており、これら土器の年代を知る手がかりとなる可能性があり、また、土器編年との比較および検討が可能である。試料2は、土坑1の埋土下層に多く認められた炭化物を送付した。これも埋土中に土器を多く含む遺構であるため、これら土器とのクロスディテイリングが可能であると考えた。

以上、理化学的な分析および測定に関しての前提条件を記述した。各分析とも分析担当機関から届けられた結果を次節より掲載する。なお、掲載に当たっては遺構名・層名等および書式・体裁を最終的にこちらで改めた箇所があることをあらかじめ断つておく。

## 2 火山灰分析

### (1) 試 料

試料は、紫波町に所在する間野村遺跡の堅穴住居1とされた遺構の埋土の中部付近にブロック状に認められた褐色を呈する砂質シルトから採取された火山灰サンプル1点である。同埋土層の下部からは、9世紀頃とされる土器片が出土している。

### (2) 分 析 方 法

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子(石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など)である。

さらに、本分析では火山ガラスと斜方輝石の屈折率を測定し、テフラ同定の指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

### (3) 結 果

結果を表1、図1に示す。重鉱物組成は、斜方輝石が最も多く、約55%を占め、次いで不透明鉱物が約35%程度を占め、他に少量の單斜輝石と極めて微量の角閃石が含まれる。火山ガラス比では軽石型火山ガラスが30%程度含まれ、極めて微量のバブル型火山ガラスも含まれる。

火山ガラスの屈折率を図2に示し、斜方輝石の屈折率を図3に示す。火山ガラスの屈折率のレンジはn1.503-1.508であり、モードはn1.506である。斜方輝石の屈折率は、3つのレンジが認められるが、主要なレンジはγ1.706-1.709であり、これよりも低屈折率のレンジのγ1.699-1.700と高屈折率のレンジのγ1.716-1.718とが少量ずつ含まれる。

なお、分析処理の過程において、試料からは多量の軽石が検出された。軽石は、最大径約1.0mmであり、白色を呈し、発泡は良好なものと同色で発泡やや良好なものとが混在する。

### (4) 考 察

試料は、細粒の軽石および火山ガラスを主体とし、斜方輝石と不透明鉱物を主要な重鉱物組成とするテフラであると考えられる。添付資料にある埋土断面の状況からは、住居跡の埋積が進行中のある時期に地下堆積したテフラが、その後の擾乱を受けながらも埋土層中にブロック状に残存したことが窺える。また、埋土の下部から9世紀頃とされる土器片が出土していることも考慮するとテフラの地下堆積は9世紀以降であった可能性が高い。この噴出年代観と上述した碎屑物の諸特徴および間野村

遺跡の地理的位置に、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981:1984)、Arai et al. (1986)、町田・新井(2003)などを考慮すると、試料は、十和田カルデラより噴出した十和田aテフラ(To-a)の降下堆積物であると考えられる。

To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火碎流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火碎流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている(町田ほか,1981)。また、その噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。上述したように、テフラは住居が廃絶されて埋積が進行している時期に降下した可能性が高いと考えられる。したがって、住居の機能していた時期は新しくとも10世紀初頭よりは古いと考えることができる。

なお、町田・新井(2003)に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496～1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は、南方へは広がらず、十和田カルデラ周辺とその東方地域に分布が限られるとされている(町田ほか,1981)。今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられる。To-aの斜方輝石の屈折率について、町田・新井(2003)では $\gamma$  1.706-1.708とされており、本分析試料の主要なレンジとはほぼ一致する。本分析試料で検出された低屈折率および高屈折率の斜方輝石は、To-aとは異なるテフラに由来する斜方輝石の遊離結晶が混入したものと考えられる。

#### 引用・参考文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986.Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido - .Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21.223-250.
- 古澤 明.1995.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- 早川由紀夫・小山真人.1998.日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-.火山,43,403-407.
- 町田 洋・新井房夫.2003.新編 火山灰アトラス,東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広.1981.日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦.1984.テフラと日本考古学-考古学研究と関連するテフラのカタログ-,渡辺直経(編)古文化財に関する保存科学と人文・自然科学.同朋舎,865-928.

表1 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料名	カンラン石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
火山灰サンプル	0	138	24	3	0	0	0	85	0	250	2	0	68	180	250

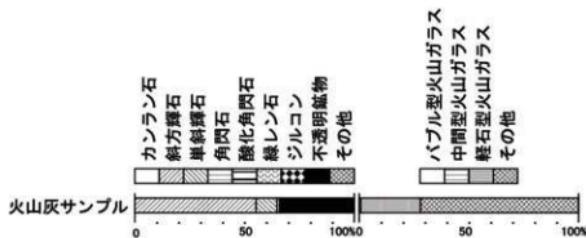


図1 重鉱物組成および火山ガラス比

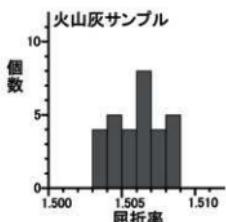


図2 火山ガラスの屈折率

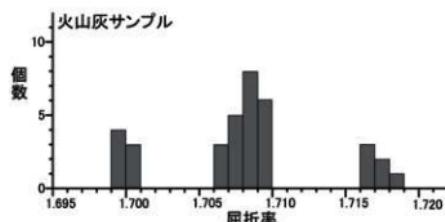
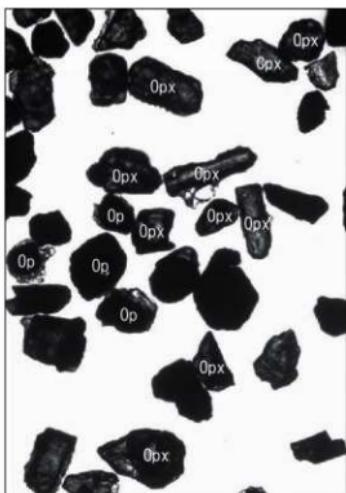
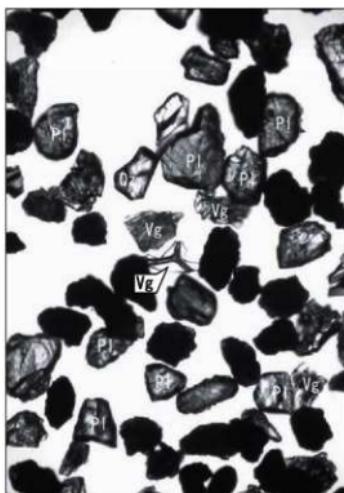


図3 斜方輝石の屈折率

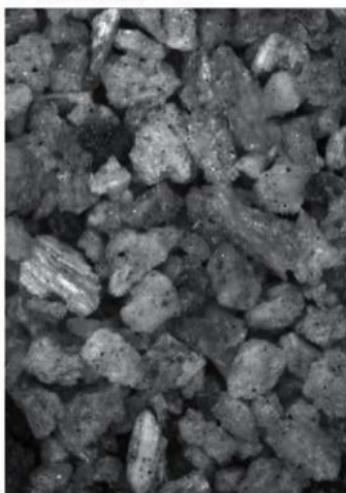
図版1 重鉱物・軽鉱物・軽石



1. 重鉱物(火山灰サンプル)



2. 軽鉱物(火山灰サンプル)



3. 軽石(火山灰サンプル)

Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Op: 不透明鉱物, Vg: 火山ガラス, Qz: 石英, Pl: 斜長石.



### 3 放射性炭素年代測定(間野村遺跡)

#### はじめに

本分析調査では、間野村遺跡(岩手県紫波郡紫波町犬吠森字境所在)から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定を実施し、遺構の構築時期に係る資料を得る。

#### (1) 試 料

試料は、平安時代前期と推定される竪穴住居の付帯施設や埋土、竪穴建物の床面焼土、中世の可能性がある溝の埋土等から出土した炭化材 5 点(AIN-20 試料 1 ~ 5)である。炭化材は、水洗後乾燥させた後に選別採取された竪穴建物の床面試料を除き、全て土壤が付着した状態である。

#### (2) 分 析 方 法

炭化材を双眼実体顕微鏡で観察しながら、土壤等の不純物が付着した周囲を削り取り、必要量(50mg)に調整する。試料は塩酸(HCl)や水酸化ナトリウム(NaOH)を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸(AAA)処理)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、No.5 は試料が化学的に脆弱で、炭素の損耗が激しいため、アルカリの濃度を薄くした(AaA と記載)。他の 4 点は通常の濃度(塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L)で処理を行う(AAA と記載)。

処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置を用いて、14C の計数、13C 濃度(13C/12C)、14C 濃度(14C/12C)を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の 13C 濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach, 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。

曆年較正是、OxCal4.4 (Bronk, 2009) を使用し、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線(Intcal20 : Reimer et al., 2020)を用いる。曆年較正結果は  $1\sigma \cdot 2\sigma$  ( $1\sigma$  は統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲)の値を示す。

#### (3) 結 果

結果を表 1、図 1 に示す。同位体補正を行った結果は、試料 1 が  $1185 \pm 20\text{BP}$ 、試料 2 が  $270 \pm 20\text{BP}$ 、試料 3 が  $330 \pm 20\text{BP}$ 、試料 4 が  $85 \pm 20\text{BP}$ 、試料 5 が  $1205 \pm 20\text{BP}$  である。曆年較正是、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地

球磁場の変動による大気中の<sup>14C</sup>濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14C</sup>の半減期 5730 ± 40 年)を校正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差  $2\sigma$  の暦年代は、試料 1 が calAD772 ~ 941、試料 2 が calAD1523 ~ 1794、試料 3 が calAD1490 ~ 1638、試料 4 が calAD1694 ~ 1917、試料 5 が calAD773 ~ 885 である。

調査所見によれば、試料 1・2・5 は帰属年代として平安時代前期が推定されているが、試料 2 は 3 試料中では明らかに新しい年代を示している。また、9世紀以降と推定される試料 4 も近世以降の年代を示した。2 試料はいずれも遺構埋土中から出土した炭化材であり、後者は埋土上層から採取されており、溝上面には現代の搅乱が覆うとされているため、履歴の異なる炭化材である可能性を考えられる。なお、試料 3 は中世とされる堅穴建物床面焼土より出土した炭化材であり、15世紀末~17世紀前半までの暦年代範囲が得られ、調査所見を概ね支持する。

#### 引用・参考文献

- ABronk RC. 2009. Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.  
Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S. 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.  
Stuiver, M., and Polach, H. A. 1977. Discussion Reporting of <sup>14</sup>C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

表1 射性炭素年代測定および曆年較正結果

試料	性状	方法	補正年代 (曆年較正用) BP (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正年代						確率 %	Code No.	
					年代値								
試料1	炭化材 数孔材	AAA (IM)	1185 ± 20 (1183 ± 21)	-28.94 ± 0.53	$\sigma$	cal AD 778	-	cal AD 787	1172	-	1163	calBP	10.2
					$2\sigma$	cal AD 826	-	cal AD 886	1122	-	1065	calBP	58.1
試料2	炭化材 数孔材	AAA (IM)	270 ± 20 (270 ± 20)	-25.18 ± 0.50	$\sigma$	cal AD 1529	-	cal AD 1540	421	-	411	calBP	12.6
					$2\sigma$	cal AD 1635	-	cal AD 1659	316	-	291	calBP	55.7
					$\sigma$	cal AD 1523	-	cal AD 1572	428	-	378	calBP	308
試料3	炭化材 コナラ類	AAA (IM)	330 ± 20 (332 ± 20)	-24.23 ± 0.44	$\sigma$	cal AD 1630	-	cal AD 1665	321	-	286	calBP	61.6
					$2\sigma$	cal AD 1785	-	cal AD 1794	165	-	156	calBP	30
					$\sigma$	cal AD 1502	-	cal AD 1528	448	-	422	calBP	18.7
試料4	炭化材 コナラ類	AAA (IM)	85 ± 20 (84 ± 20)	-29.08 ± 0.41	$\sigma$	cal AD 1551	-	cal AD 1598	404	-	352	calBP	36.1
					$2\sigma$	cal AD 1616	-	cal AD 1634	338	-	317	calBP	135
					$\sigma$	cal AD 1490	-	cal AD 1638	460	-	313	calBP	95.4
試料5	炭化材 数孔材	AaA (0.05M)	1205 ± 20 (1205 ± 20)	-26.84 ± 0.44	$\sigma$	cal AD 1700	-	cal AD 1721	250	-	229	calBP	23.7
					$2\sigma$	cal AD 1815	-	cal AD 1834	138	-	117	calBP	21.7
					$\sigma$	cal AD 1890	-	cal AD 1908	61	-	42	calBP	22.9
					$2\sigma$	cal AD 1694	-	cal AD 1725	256	-	225	calBP	27.4
					$\sigma$	cal AD 1811	-	cal AD 1917	140	-	33	calBP	68.0
試料1	炭化材 数孔材	AAA (IM)	1185 ± 20 (1183 ± 21)	-28.94 ± 0.53	$\sigma$	cal AD 786	-	cal AD 792	1166	-	1158	calBP	7.6
					$2\sigma$	cal AD 800	-	cal AD 812	1151	-	1139	calBP	11.7
試料2	炭化材 数孔材	AAA (IM)	270 ± 20 (270 ± 20)	-25.18 ± 0.50	$\sigma$	cal AD 818	-	cal AD 834	1132	-	1117	calBP	15.8
					$2\sigma$	cal AD 845	-	cal AD 877	1105	-	1074	calBP	33.1
試料3	炭化材 コナラ類	AAA (IM)	330 ± 20 (332 ± 20)	-24.23 ± 0.44	$\sigma$	cal AD 773	-	cal AD 885	1177	-	1066	calBP	95.4
					$2\sigma$	cal AD 800	-	cal AD 886	1122	-	1057	calBP	58.1
試料4	炭化材 コナラ類	AAA (IM)	85 ± 20 (84 ± 20)	-29.08 ± 0.41	$\sigma$	cal AD 1700	-	cal AD 1721	250	-	229	calBP	23.7
					$2\sigma$	cal AD 1815	-	cal AD 1834	138	-	117	calBP	21.7
試料5	炭化材 数孔材	AAA (0.05M)	1205 ± 20 (1205 ± 20)	-26.84 ± 0.44	$\sigma$	cal AD 1890	-	cal AD 1908	61	-	42	calBP	22.9
					$2\sigma$	cal AD 1694	-	cal AD 1725	256	-	225	calBP	27.4

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68.2% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA は試料が堅密なため、アルカリの濃度を薄くして処理したこと示す。
- 5) 曆年の計算には、Excel v4.4 を使用
- 6) 曆年の計算には、1 術目まで示した年代値を使用。
- 7) 計算データセットは、IntCal20 を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 術目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$  が 68.2%、 $2\sigma$  が 95.4% である

OxCal v4.4.3 Brink Ramsey (2021); c5 Atmospheric data from Reimer et al (2020)

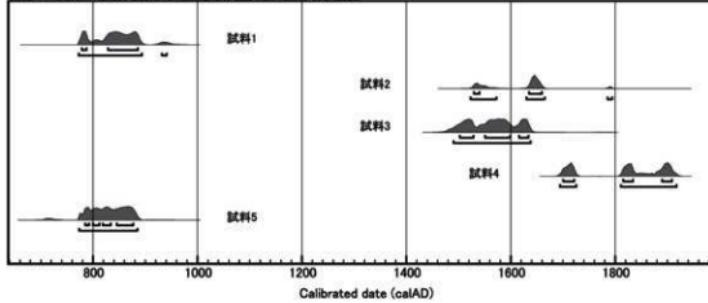


図1 曆年較正結果

## 4 放射性炭素年代測定（境遺跡）

### 1 測定対象試料

境遺跡は、岩手県紫波郡紫波町大吠森字境 128-5 に所在し、北上川東岸の自然堤防上に立地する。測定対象試料は、貯蔵穴（竪穴住居の床面で検出）と土坑から出土した木炭 2 点である（表 1）。9 世紀代と推定されている。

### 2 測定の意義

試料が出土した貯蔵穴、土坑からは、残存良好な土器が出土しており、年代測定によってクロスティングを行う。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「Aaa」と表 1 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素

と同等以上)の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度とともに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.3\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下1桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定の較正曲線、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、試料1が  $1240 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料2が  $1200 \pm 20\text{yrBP}$  である。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、試料1が  $703 \sim 825\text{cal AD}$ 、試料2が  $780 \sim 883\text{cal AD}$  の間に各々2つの範囲で示される。推定年代と重なる結果となっている。

試料の炭素含有率はいずれも 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C} (\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-211596	試料1	S101貯蔵穴 下層	木炭	AAA	-26.98 $\pm$ 0.20	1,240 $\pm$ 20	85.67 $\pm$ 0.24
IAAA-211597	試料2	SK01 下層 (炭化物層)	木炭	AAA	-24.79 $\pm$ 0.20	1,200 $\pm$ 20	86.18 $\pm$ 0.23

[IAA登録番号:#B050]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正値、曆年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-211596	1,270 ± 20	85.32 ± 0.23	1,242 ± 22	703calAD - 740calAD (36.3%) 788calAD - 825calAD (32.0%)	680calAD - 745calAD (45.4%) 760calAD - 779calAD (4.3%) 785calAD - 878calAD (45.8%)
IAAA-211597	1,190 ± 20	86.21 ± 0.23	1,195 ± 21	780calAD - 790calAD (9.0%) 822calAD - 883calAD (59.3%)	774calAD - 887calAD (95.4%)

[参考値]

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon 62(4), 725-757  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. Radiocarbon 19(3), 355-363

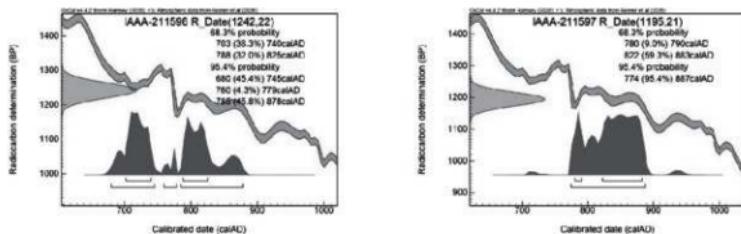


図1 曆年較正年代グラフ（参考）

## 5 出土粘土塊等の自然科学分析

### はじめに

紫波町に所在する間野村遺跡は、北上低地帯北部の北上川左岸の低地に位置する。これまでの発掘調査により、平安時代を中心とする堅穴住居や墓壙などの遺構が確認されている。

本報告では、平安時代とされる堅穴住居跡より出土した粘土塊を対象とした分析を行い、同遺跡より出土した土器片と比較することにより、土器材料としての可能性について検討する。

### (1) 試 料

試料は、堅穴住居跡より出土した粘土塊1点と、土師器片1点および須恵器片1点の合計3点である。それぞれ順に胎土試料1、胎土試料2、胎土試料3とされている。試料の一覧を表1に示す。

### (2) 分析方法

ここでは、薄片作製観察により各試料中に含まれる碎屑物の性状を明らかにし、比較することによってその関係を考える。手順を以下に示す。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

薄片観察結果は松田ほか(1999)の方法に従って表記する。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下にその手順を述べる。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

### (3) 結 果

結果を表2、図1、2に示す。以下に鉱物・岩石組成、粒径組成、碎屑物の割合の順に述べる。

#### 1) 鉱物・岩石組成

3点の試料ともに石英の鉱物片が多く、少量の斜長石の鉱物片を伴い、少量の複数種の岩石片も含まれる。岩石片の種類は、流紋岩・デイサイトと多結晶石英が3点に共通して含まれ、花崗岩類が胎土試料1と胎土試料2の2点に共通して含まれ、火山ガラスが胎土試料1と胎土試料3の2点に共通して含まれる。他に、胎土試料1では斜方輝石や不透明鉱物などの鉱物片およびチャートや珪化岩が含まれ、胎土試料2では頁岩や安山岩などが含まれ、胎土試料3では凝灰岩が含まれる。

#### 2) 粒径組成

胎土試料1では粗粒砂の割合が最も高く、次いで中粒砂、極粗粒砂の順に多い。胎土試料2は粗粒

砂の割合のみが突出して高く、他の粒径は同程度で低い割合である。胎土試料3では、極細粒砂の割合が最も高く、次いで中粒砂、細粒砂の順に多い。

### 3) 砕屑物の割合

3点の試料ともに15~20%程度の範囲に入るが、詳細にみれば胎土試料1の割合は、他の2点に比べてやや低い。

## (4) 考察

胎土試料1とされた粘土塊に含まれる砕屑物の鉱物・岩石組成は、粘土塊が採取された場所の地質学的背景を示唆している。また、石英の鉱物片や多結晶石英の岩石片が多いことは、それらが物理的化学的変質に対する抵抗性の高い砕屑物であることから、岩石の風化や水流による運搬などの作用を経て堆積した河川砂などの堆積物に由来する可能性のあることを示していると考えられる。その場合、出現する岩石の種類によって、流域にそれらの岩石からなる地質が分布している河川砂に由来することが推定される。胎土試料1の岩石組成からは、チャートなどを含むいわゆる古生層の堆積岩類からなる地質と新第三紀以降の流紋岩・デイサイト質火山岩類からなる地質および花崗岩類からなる地質の大きく分けて3種類以上の地質の分布する背景が推定される。

ここで、間野村遺跡の位置する北上低地帯の地質学的背景を吉田ほか(1984)などにより概観すると、北上川の左岸側の北上山地には北部北上帯と呼ばれる古生代後期~中生代の堆積岩類が広く分布し、また中生代白亜紀に貫入した花崗岩類も分布する。一方、北上川右岸側の奥羽山脈には新第三紀の流紋岩質火碎岩が広く分布している。胎土試料1の岩石組成から窺える地質学的背景とほぼ一致することから胎土試料1の粘土塊は間野村遺跡の立地する周辺で採取された可能性が高いと考えられる。

一方、土師器である胎土試料2の岩石組成から窺える地質学的背景についても、頁岩の堆積岩類や流紋岩・デイサイトおよび花崗岩類が含まれるなど、上述した胎土試料1における岩石組成との共通性が高いと言える。したがって、胎土試料2の土師器の材料となった粘土や砂などの堆積物も間野村遺跡の立地する北上低地帯北部周辺で採取された可能性は高いと考えられる。ただし、胎土試料1とされた粘土塊が、胎土試料2とされた土師器の原材料であったかについては、現時点で判断することは難しい。少なくとも、砕屑物の粒径組成や砕屑物の割合が若干異なることから、粘土塊のみで土師器が作られた可能性は低いと考えられるが、材料の一部として使用された可能性はあると考えられる。

胎土試料3の須恵器については、流紋岩・デイサイトや火山ガラスなど胎土試料1の粘土塊に含まれる砕屑物の種類において共通性は認められるものの、砕屑物の粒径組成が胎土試料1の粘土塊のそれとは明確に異なることから、粘土塊が原材料であった可能性は低いと考えられる。なお、胎土試料3の須恵器の製作地については、周辺地域での須恵器窯の確認と窯跡出土試料の分析事例との比較検討が必要であろう。

## 引用・参考文献

- ▼ 松田順一郎・三輪若菜・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察 - 岩石学的・堆積学的による -, 日本国文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.
- 吉田 尚・大沢 権・片田正人・中井順二, 1984, 20万分の1 地質図幅「盛岡」, 地質調査所

表1 試料一覧

試料名	試料の種類	出土位置等
胎土試料1	粘土塊	-
胎土試料2	土師器	AIN-20 SI02 南西 検出面~埋土上層
胎土試料3	須恵器	AIN-20 SI02 下段 検出面~埋土上層

表2 薄片観察結果

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成										合計	
		鉱物片			岩石片				その他				
		石英	斜長石	鈍方輝石	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	變質岩	珪化岩
胎土試料1 (粘土塊)	砂	細繩	1										1
		極粗粒砂	7	2						2		1	12
		粗粒砂	9	2	1		1		1	5			19
		中粒砂	8	2	1				2	2	1		17
		細粒砂	7			1							8
		極細粒砂	2										2
		粗粒シルト											0
		中粒シルト											0
		基質											793
		孔隙											16
備考		基質は、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。バブル型火山ガラスあり。											
胎土試料2 (土師器)	砂	細繩											0
		極粗粒砂							1		1		2
		粗粒砂	3				1		2	1	1		9
		中粒砂	1	1					1		1		4
		細粒砂	2	1						2			5
		極細粒砂	1	3									4
		粗粒シルト	3	1									4
		中粒シルト											0
		基質											243
		孔隙											5
備考		基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石で埋められる。孔隙は局所的に弱い配向性を示す。											
胎土試料3 (須恵器)	砂	細繩											0
		極粗粒砂											0
		粗粒砂	2						1	2			5
		中粒砂	3					1	1	3		1	9
		細粒砂	4	1				1	1	1			8
		極細粒砂	10	1							2		13
		粗粒シルト	4	1									5
		中粒シルト	1										1
		基質											378
		孔隙											17
備考		基質はややシルト質で、粘土鉱物、雲母鉱物、石英、斜長石、炭質物で埋められる。半斜輝石有り。											

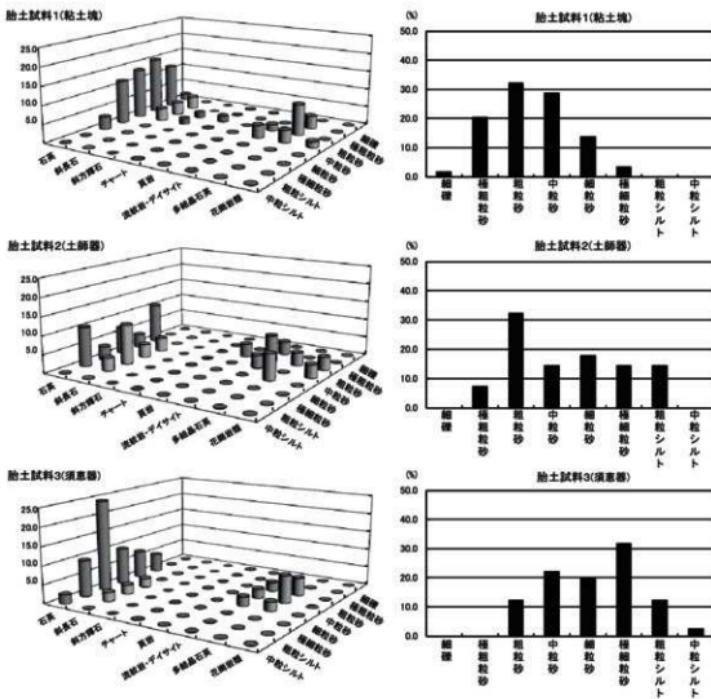


図1 砕屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成

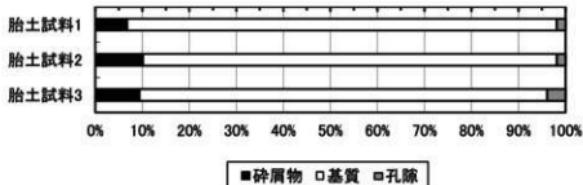
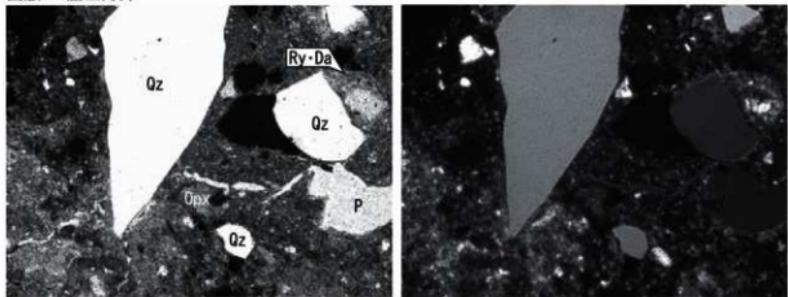
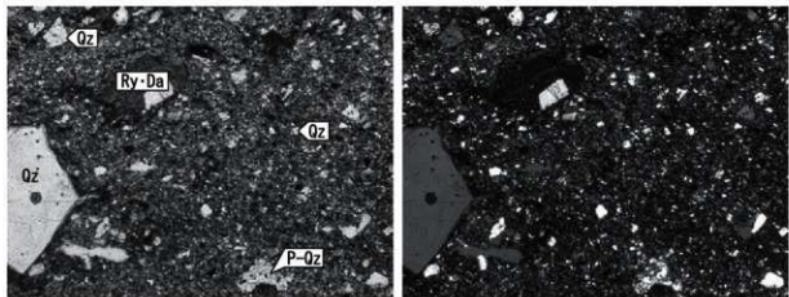


図2 砕屑物・基質・孔隙の割合

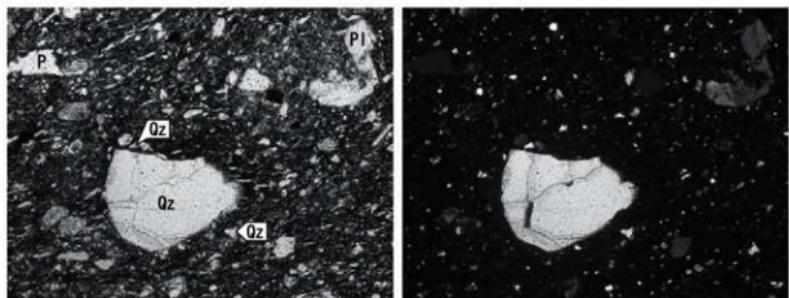
図版1 胎土薄片



1. 胎土試料1(粘土塊試料)



2. 胎土試料2(AIN-20 S102 南西 検出面～埋土上層)



3. 胎土試料3(AIN-20 下段 検出面～埋土上層)

Qz:石英, PI:斜長石, Opx:斜方輝石, Ry-Da:流紋岩・デイサイト.  
P-Qz:多結晶石英, P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

## 6 各分析結果を受けて

間野村遺跡・境遺跡では、火山灰分析・放射性炭素年代測定・粘土塊の分析を委託した。これらの結果を受けて発掘調査結果を加味した評価を記す。

### (1) 火山灰分析

火山灰分析では、間野村遺跡の竪穴住居2の埋土に層状にみられる火山灰を分析試料とした結果、火山ガラスの屈折率等から10世紀に噴出した十和田湖を起源とする十和田a火山灰であると同定された。のことから、この竪穴住居が少なくとも10世紀以前に営まれたものであることを証明している。調査では考古学的にも9世紀前半の竪穴住居であると考えられ、埋土上層に十和田a火山灰が認められることと矛盾しない。さらに、この竪穴住居が9世紀前半に廃絶した後、約100年かけて最終埋没したという推論が導き出せよう。遺跡の立地や古代集落のあり方を考えるうえで重要な成果が得られた。

放射性炭素年代測定は9世紀の遺構内で得られた炭化物を試料とし、AMS法による年代測定を実施した。その結果、9世紀よりも約100年古く出た。その原因については不明であるが、土器および落下火山灰の年代と一致しない。今後、このような結果になる原因が解明されることを期する。

### (2) 放射性炭素年代測定

AMSによる放射性炭素年代測定は、間野村遺跡で5点、境遺跡で2点の試料を提供し測定を依頼した。両者は同じくAMSによる測定であるが、測定機関は実施年度が異なるため前者がパリノ・サー・ヴェイ株式会社、後者が(株)加速器研究所である。

間野村遺跡の暦年較正年代は試料1が $1185 \pm 20$ BP、試料2が $270 \pm 20$ BP、試料3が $330 \pm 20$ BP、試料4が $85 \pm 20$ BP、試料5が $1205 \pm 20$ BPである。

試料1と試料5は間野村遺跡の竪穴住居2煙出しに敷設された石組みの下部で検出した炭化物を測定試料とした。煙道や煙出しの石組みが施された直前に混入した木炭であると推測される。測定値が示す年代は試料1が745～785年、試料5が725～765である。発掘調査成果から9世紀前半の竪穴住居であると考えられるため、想定よりもやや古い年代が得られたと思われる。これは竪穴住居が、最も近い年代である試料1の785年頃(8世紀後半)に構築され、9世紀前半まで存続した可能性もある。しかし、8世紀後半に位置付けられる遺物は出土していないため、約50年の測定値の誤差として捉えてもいいかもしれない。また、試料2は竪穴住居2の埋土中の炭化物を提供したが、予想に反して17世紀後半の測定値であった。これに関しては、なぜこのような新しい年代値が出たのか不明である。

試料3は中世の竪穴住居床面で採取した炭化物で測定した。これも予想に反して17世紀前半の測定値であり、調査結果とは異なる。かなり削平が及んでいた遺構であったためその後の攪乱等が床面にまで及んでいた可能性も考えられるが、古い方の値を考慮すれば1600年であるため15世紀後半からこの年代であれば、あり得る値である。

試料4は他の試料に比べてもかなり新しい19世紀という年代値である。これは堀の埋土最上層の炭化物を提供したが、攪乱に含まれた試料であった可能性も考えられる。

境遺跡の暦年較正年代はそれぞれ試料1が $1242 \pm 22$ yrBP、試料2が $1,195 \pm 21$ yrBPという値となっている。

試料1は竪穴住居1の貯蔵穴の下位に認められた炭化物を用いている。この炭化物は土器溝まり直下に位置しており、竪穴住居の機能時から廃絶時頃の炭化物であると推定している。年代は703～825年であり、発掘調査結果の9世紀前半よりも古い値であった。

一方、試料2は土坑1の底面近くで採取した炭化物を試料としており、出土遺物から9世紀代と見込まれた。測定結果の年代は780～883年と示されており、概ね違和感の無い測定値である。

以上のように各年代測定を再考したが、考古学的な年代観と異なる結果が一定数含まれており、今後も同様の測定とその検討が必要であろう。

### (3) 粘土塊の分析

間野村遺跡の竪穴住居2で出土した白色の粘土塊を対象に自然科学的分析を試みた。まず、この粘土塊の由来についてであるが、北上川東岸域に立地する遺跡であるため、地域特有の碎屑物や鉱物組成が認められるかどうかである。結果として岩石組成からチャート・流紋岩・ディサイト・花崗岩などの地質的な背景が看取される。このことからこの地域で採取された粘土であることが想定される。

次に、土器などの原材料の粘土である可能性を探るために、今回の発掘調査で出土した土師器細片と須恵器細片をそれぞれ試料として同様に分析した。その結果、土師器に関しては岩石等の組成は概ね粘土塊と合致することから、遺跡周辺で採取された粘土が原材料として用いられている可能性がある。一方、須恵器にも一部岩石組成の共通性は認められるが、粒径組成が異なるようであり、完全な一致ではない。これは製作工程で土師器と須恵器の原材料粘土の差を示している可能性もあるため、ただちに生産地を特定するのは困難であろう。今後、窯試料との比較が必要であると考えられる。

## VII 総括

### 1 間野村遺跡のまとめ

#### (1) 遺構

間野村遺跡の発掘調査では、縄文時代から近・現代に至るまでの遺構が認められた。これら遺構を時代順に記述する。

縄文時代は土坑を 11 基と陥し穴を 3 基検出した。いずれも削平されたⅣ層上面で検出したが、明確な掘り込み面は不明である。ただし、いずれも埋土にⅡ層以上の層が混入しておらず、なおかつⅢ層由来と思われるこれに酷似した層での埋没が考えられる。よって、これら土坑の埋没時期は縄文時代でも相当古い時期のものであると推測される。土坑 9 では頁岩製のフレイクが 1 点出土している。平面形態は円形基調で底面は平坦ではなく丸みがある。土坑の性格は不明であるが、平面的な配置は一定のエリアでまとまっている。一方、陥し穴は細く長い溝状のものである。先述した土坑との切り合い関係から土坑群よりも新しい時期の所産である。埋土も黒色土や黒褐色土の土壤が認められるため切り合い関係と矛盾しない。出土遺物は無いため詳細な時期は不明である。

平安時代の遺構は、遺跡内の比較的標高の低い西側で 9 世紀代の堅穴住居 2 棟を検出したほか、小土坑を 2 基検出した。一方、比較的標高の高い調査区東側には、平面方形の土坑 3 基が存在する。遺跡の最西端で検出した堅穴住居 1 は、間野村遺跡と西側にある境遺跡の間に広がる低地帯に隣接する。堅穴住居 2 はこれよりやや高位であるが、やはり西側低地帯の始まりのような地点に位置する。そのためこの住居には後世の削平が及んでおらず、良好な残存状態で検出することができた。そのため、この堅穴住居の特異な煙道や煙出しもほぼ使用時と大きく変わらない状態であった。この特異な煙道および煙出しは大小の円錐や亜角錐を丁寧に組んだものである。盛岡市前野遺跡や堀根遺跡など盛岡市浅岸地区で類例が認められる。その構築方法は煙道・煙出しの形状に地山を掘削し、煙出し部は石組み井戸のような側面に石を積み上げる方法で構築されている。石組みは 4 段から 6 段の積み上げである。一方、煙道部は側壁に沿うように扁平な石を並べ立て、その上にやはり扁平な石を蓋石として架している。煙道部はトンネル状であるが、横穴式石室のような構造となっている。煙道部蓋石の上には粘土によって被覆されており、使用時の状態を伝えている。土坑は長方形基調のものが 3 基、調査区東側で認められる。出土遺物から西側で検出した堅穴住居と同時期であり、特に離れた堅穴住居 2 と遺構間で接合する土器も存在することからほぼ同時期であることは間違いない。土坑の性格は不明であるが、平面長方形の平面形態から墓壙の可能性も高いと考えられる。また、その場合居住域とある程度の距離を隔てているため、居住域と墓壙の占地のあり方を考える良好な材料である。

平安時代と推定した堀は、旧地形に沿って巡るとみられる。出土遺物が認められないため断定できないが、遺構外出土遺物の中に皿状を呈する土師器が出土している。12 世紀前半頃を想定したかわらけとしたが、11 世紀代のものである可能性も排除できない。

中世は堅穴建物を検出したが、残存不良の 1 棟のみである。柱筋通りの悪い掘立柱建物も検出した。これらの遺構のあり方から中世の村落の一部である可能性が考えられる。ただし、中世の遺物が少ないことから詳細な帰属時期が不明である。また、両者の共存関係も不明である。

## (2) 遺 物

調査で出土した遺物の大半は平安時代前半のもので占められるが、その他の時代の遺物もわずかに認められた。

縄文時代の遺物は縄文土器1点、石器1点であるが、土坑9出土の頁岩製フレイクの存在は、一連の時代・用途不明土坑が少なくとも遺構であることを示唆する遺物である。

最も質、量ともに豊富な9世紀代の遺物は、土師器・須恵器の土器類が中心である。土師器は壺・甕が多く、壺よりも小形の供膳具も少量認められる。地域的に城柵での出土が目立つ須恵器壺蓋の保有が認められ、さらにこの出土壺蓋は転用現の可能性が高く、使用痕跡からみて壺身の上でひっくり返して転用したと考えられることから、その使用作法についても既知のことであったようである。城柵やそれに連なる官衙等の公的な機関との繋がりが一定程度あったものと推測される。したがって、この集落もこの地域を代表するような拠点的な集落であったものとみられる。次に、この遺跡で注目されるのは土師器甕の一部に出羽側の土師器甕の特徴を示すものが一定量含まれている点である。先に述べた石組みの煙道を有する竪穴住居が多く認められる盛岡市浅岸地区の古代集落においても、出羽側の特長を持つ土師器甕が非常に多く認められる。そして、いざれも北上川東岸域に位置しており、盛岡市前野遺跡や堰根遺跡などの平安時代集落と間野村遺跡集落との間に何らかの関係性を保持していた可能性が考えられる。その他、11～12世紀を想定したかわらけ片は遺構外の出土であるためその帰属を決めかねるものである。

中世の出土遺物で確実に時期を特定できるのは、瀬戸・美濃産陶器皿である。端折口縁に内面菊花状のものである。瀬戸・美濃大窯Ⅳ期のものと推測され、戦国末期のものである。中世の竪穴建物や掘立柱建物の時期を示すかもしれないが、遺構に伴うものではないため積極的に評価できない。近在する星山館跡などとの関係も考える必要がある。

## 2 境遺跡のまとめ

### (1) 遺 構

境遺跡は、埋没した旧河道低地帯を挟んで間野村遺跡の西に隣接する。調査では平安時代の9世紀代の集落であることが判明した。境遺跡は今回の道路整備事業に伴う試掘調査で新たに確認された遺跡であるため、間野村遺跡と同様過去の調査履歴はない。境遺跡の範囲は概ね同一の地形面で設定されたようであり、周辺地域ではもっとも北上川に近い自然堤防上に立地する遺跡である。この立地は次の点で非常に重要な意味を持っている。9世紀の北上川の流れについての知見を得られる。次に、大河川に接する9世紀の集落のあり方を考察する材料となる。このような点を踏まながら境遺跡の調査成果をまとめたい。

今回の調査では、竪穴住居2棟、焼土面を伴う土坑2基、溝1条を検出した。現道の拡幅工事に伴う調査であるため、幅が狭く細長く延びる東西方向の調査区である。したがって、これら遺構のうち大半が今回の調査で完結せず、南北のどちらか、あるいは両側へ連続する。南側現道下や北側烟地下にも集落が続いているものと理解できる。2棟の竪穴住居は近接しているため調査区外で重複している可能性が高い。現段階では遺構断面や遺物からみて両者はあまり大きな時期差はないものと思われる。また、竪穴住居1は住居内に非常に多くの土器が残されていた。9世紀前半から半ば頃にかけての土器群であると推測でき、集落はこの時期に展開したものとみられる。一方、焼土面を伴う2基の

土坑はそれぞれ形態的な特徴は異なるが、土師器の焼成遺構である可能性が考えられる。今回の調査ではこれら土坑内で焼成されたと考えられる土師器は出土していないが、集落内で使用する土師器をこのような地面を掘りくぼめた施設で焼成したものと思われる。南北方向に延びる1条の溝は北上川の平行する軸線である。埋土にラミナが認められることから、実際に機能していた際には流水があつたものと考えられる。溝の機能や性格は不明であるが、集落内で排水等の機能を有することを意図して開削された溝であろう。

## (2) 遺 物

境遺跡の出土遺物は遺構や遺物包含層の時期と同様、すべて9世紀代のもので構成される。主体となるのは、土師器・須恵器といった9世紀代の土器である。この時期の土器組成として際だった点は、土師器壺の大半がロクロによる調整が施された製品で占められている点である。通常この時期の組成には一定の割合で同容量のロクロが用いられない壺が存在するが、この出土傾向とは異なっている。また、出羽側の特徴を備えた土師器壺があることは、間野村遺跡の集落と共通するところである。さらに特徴的な器種として土師器小形器種が挙げられる。これらは鉢のような形態であるが、かなり小形であり、その用途も含め不明な点が多い。しかし、間野村遺跡でも認められるためこの辺の集落に通有の器種なのかもしれない。他地域でも存在しないわけではないが、それほど目立った組成を示さない。土器以外では、1点のみ土錘が出土した。河川に接した集落ではしばしば認められる遺物であり、河川における漁労活動に密着した遺物であると考えられる。集落の生業形態の一端を示しているものと思われる。

## 3 二つの古代集落の関係

これまで述べたように、間野村遺跡と境遺跡に共通する時代は、平安時代の9世紀である。間野村遺跡の古代集落と境遺跡の古代集落はいずれも9世紀前半から半ばに存続した集落である。地形とその立地からみた二つの遺跡は高位の間野村集落、低位の境集落ではそのあり方が異なっている。これら両遺跡を隔てているのは、埋没した旧河道の低湿地である。これらは南北方向に横たわっており、概ね北上川と平行している。地形は東から西に向けて低くなる段丘縁辺(間野村遺跡)、そして埋没した旧河道の低湿地、それより安定した自然堤防上(境遺跡)の順で連なる関係である。遺跡を隔てる埋没した旧河道は調査の対象から外れているため堆積状況等の詳細は不明であるが、現状でも水路があり、現況は湿地帯である。挟間のデータの無い中ではあるが、より低位の境遺跡の堆積状況から発展させ、両遺跡の集落の関係性について考えてみたい。

今回の境遺跡の調査区は攪乱や削平がほとんど認められず、残存状態の良好な遺構面であったため当時の微地形を把握できる状態にあった。土坑と小ピットがそれぞれ1基存在する調査区東側と竪穴住居等その他の遺構が存在する西側の間にほど低位面が存在し、その隙地が自然埋没する過程で周辺から遺物が入り込んだものと考えられる(平安時代遺物包含層の形成)。今回検出した古代の遺構の最終的な埋没は、この遺物包含層の堆積と共時性を持つと考えられる。すなわち、境遺跡では古代の集落經營がスタートしてからの様子を概観すると、Phase 1：集落の展開(少なくとも2時期)、Phase 2：集落の癪絶、Phase 3：やや時間をおいて集落内を覆う氾濫による堆積と埋没、Phase 4：十和田a火山灰の堆積という過程を導くことができる。間野村集落ではPhase 3の周辺の氾濫による堆積が石組み煙道を有する竪穴住居2で認められないことである。これは両者の立地する標高差に

よるところが大きい。境集落よりも標高の高い間野村集落では氾濫による水や土砂による堆積があまり及んでいないことがわかる。すなわち、Phase 3 のイベントはこの住居の埋没に大きく影響していない可能性がある。しかし、埋土中位に流入土壤が見られるのは、この住居も埋没の過程ではあるが、浸水した可能性が考えられる。その後、間野村集落の石組み煙道を有する竪穴住居 2 の最終埋没は十和田 a 火山灰の降下時期である(Phase 4)。この降下火山灰は 915 年の降下が最有力視されている。間野村遺跡の竪穴住居は 10 世紀前半にはほぼ埋没し、わずかな窪地の状態であったと考えられる。一方、境集落の住居は顕著な火山灰はみられないため、Phase 3 のイベントではほぼ埋没が完了していた可能性が高い。これはより低位に立地する境遺跡のある意味宿命だったのだろう。もちろん、その時には現住家屋ではなかったであろうが。

このような集落の堆積イベントを比較しても両集落はほぼ同時期に存在しており、廃絶も大きな時間差はなかったものとみられ、同時に併存していた集落であったと考えられる。両集落廃絶後にこの地域を襲った氾濫(一度ではない)は埋没した旧河道を含め、懸濁した土砂の中に生活遺物を巻き込みながら広範囲を覆い、そして離水後に水以外の沈殿した物質が低い地点を中心に残されたのであろう。河川に近い低地帯における災害リスクを具現化したものを見ることができる。

#### 4 結語にかえて

間野村遺跡および境遺跡の発掘調査成果を記載してきたが、最後に周辺遺跡の発掘調査の展望を交えて結語にかえたい。今回の調査によって周辺域の未見あるいは未調査のでも同様の調査成果が認められる可能性が多いに考えられる。特に、これら 2 遺跡はそれぞれ立地が異なっている。それぞれの同一地形面において古代の集落が展開するものとみられる。繰り返しになるが、古代斯波郡、特に北上川東岸域は考古学的な資料が、西岸域よりも少ない傾向にある。今後の調査の進展に期待したい。

また、今回の調査ではあまり明らかにできなかったが、平安時代末期の様相も注目される。星山地域は、東に進めば紫波町遠山や赤沢を経由して早池峰の麓に通する。それより先は各峠道を踏み行けば沿岸地域へと導かれる。このような交通の要衝、言い換えれば起点ともなる場所でもある星山地区は平安時代末期の比爪氏が管理するに相応しい土地である。当然、その後の中世においても同様のことと言えるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 盛岡市教育委員会 1999 「前野遺跡 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」
- 盛岡市教育委員会 2008 「柿の木平・環根遺跡 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ」

# 写 真 図 版





（北から）



（南西から）

写真図版1 航空写真（1）



西半（直上から）



東半（西から）

写真図版2 航空写真（2）



（直上から）



（直上から）

写真図版3 航空写真（3）



調査区全景（西から）



調査区東端全景（東から）

写真図版4 調査区全景



基本層序A断面（西から）



基本層序B断面（北から）



基本層序C断面（北から）



基本層序D断面（南から）



土坑群検出（南西から）

写真図版5 基本層序A～D、土坑群



土坑1断面（南から）



土坑2断面（南から）



土坑3断面（南から）

写真図版6 土坑1～3



土坑1完掘（南から）



土坑2完掘（南から）



土坑3完掘（南から）



土坑4断面（南から）



土坑4・5穴掘（南から）



土坑5断面（東から）

写真図版8 土坑4・5



土坑4完掘（南から）



土坑4・5完掘（南から）



土坑5完掘（南から）

写真図版9 土坑4・5



土坑6断面（南から）



土坑7断面（南から）



土坑8断面（東から）

写真図版 10 土坑6～8



土坑6完掘（南から）



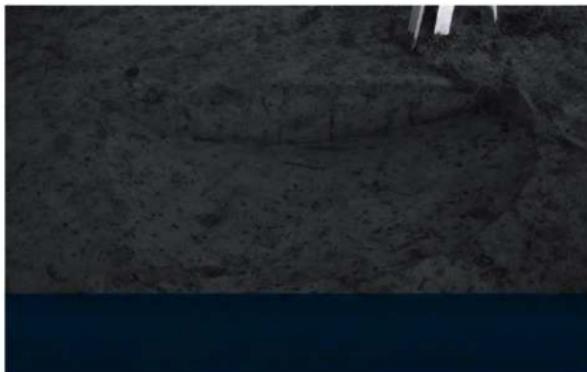
土坑7完掘（南から）



土坑8完掘（東から）



土坑9断面（南から）



土坑10断面（南西から）



土坑11断面（南から）

写真図版 12 土坑9~11



写真図版 13 土坑9~11



土坑 12 断面（南から）



土坑 13 断面（南から）



土坑 14 断面（東から）

写真図版 14 土坑 12～14



土坑 12 完掘（南から）



土坑 13 完掘（南から）



土坑 15 断面（東から）



土坑 14・15 完掘（南から）



陥し穴 1 断面（南から）



陥し穴 3 断面（東から）

写真図版 16 土坑 14・15、陥し穴 1・3



陥し穴1完掘（南から）



陥し穴2断面（北から）



陥し穴3完掘（西から）



写真図版 18 縦穴住居 1 (1)



竪穴住居 1  
土坑 2 断面（南東から）



竪穴住居 1  
焼土 1 棟出（北から）



竪穴住居 1  
P6 断面（北から）

写真図版 19 竪穴住居 1 (2)



写真図版 20 竪穴住居 2 全景



竪穴住居2南北断面（西から）



竪穴住居2東西断面（南から）



竪穴住居2東西断面（南から）

写真図版 21 竪穴住居2（1）



竪穴住居2土坑1断面（西から）



竪穴住居2 P2断面（西から）



竪穴住居2 P3断面（西から）



竪穴住居2土坑状贴床断面（南から）



竪穴住居2完掘（西から）

写真図版 22 竪穴住居2（2）



竪穴住居2煙道検出（西から）



竪穴住居2煙道検出全景（西から）

写真図版23 竪穴住居2（3）



竪穴住居 2  
煙道煙出断面（南から）

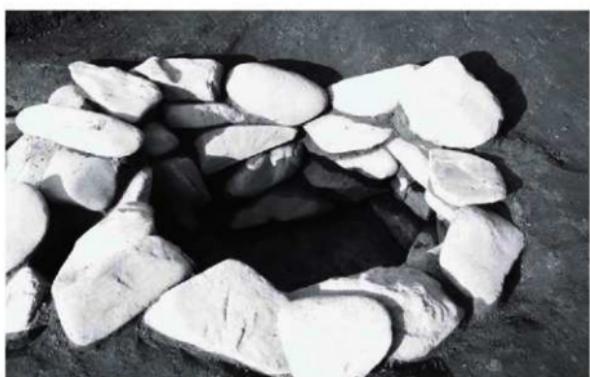


竪穴住居 2  
煙道煙出断面（南から）



竪穴住居 2  
煙出奥壁（西から）

写真図版 24 竪穴住居 2 (4)



写真図版 25 竪穴住居 2 (5)



土坑 26 完掘（南西から）



土坑 26 西面（東から）



土坑 27 断面（東から）

写真図版 26 土坑 26・27



土坑 27 遺物出土（東から）



土坑 27 完掘（東から）



土坑 28 完掘（西から）

写真図版 27 土坑 27・28



土坑 27・28 断面（東から）



土坑 29 西面（南から）



土坑 29 完掘（南から）

写真図版 28 土坑 27～29



土坑 30 断面（南東から）



土坑 30 完掘（南から）



土坑 30 潟物出土（南から）

写真図版 29 土坑 30



溝1断面（東から）



溝1完掘（西から）



溝2断面（南から）



溝2完掘（北から）



溝1断面（南から）



溝1・溝2断面（東から）



溝2断面（南から）



溝2断面（東から）

写真図版 30 溝1・2、堀1・2



堀1・2検出（北東から）



堀1・2発掘（東から）



竪穴建物 1 完掘（南西から）



竪穴建物 1 断面（南から）



竪穴建物 1 断面（東から）

写真図版 32 竪穴建物 1



写真図版 33 土器 (1)



写真図版 34 土器（2）



15



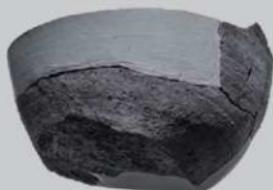
16



17



24



18

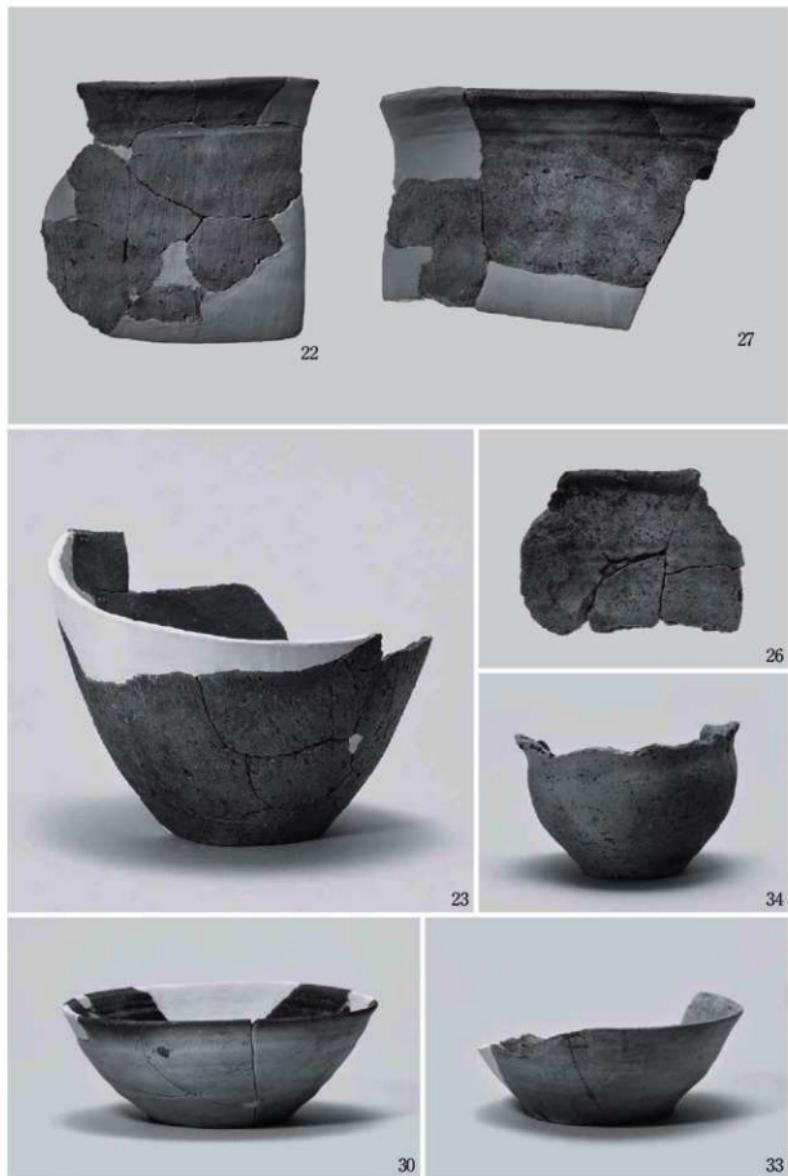


25

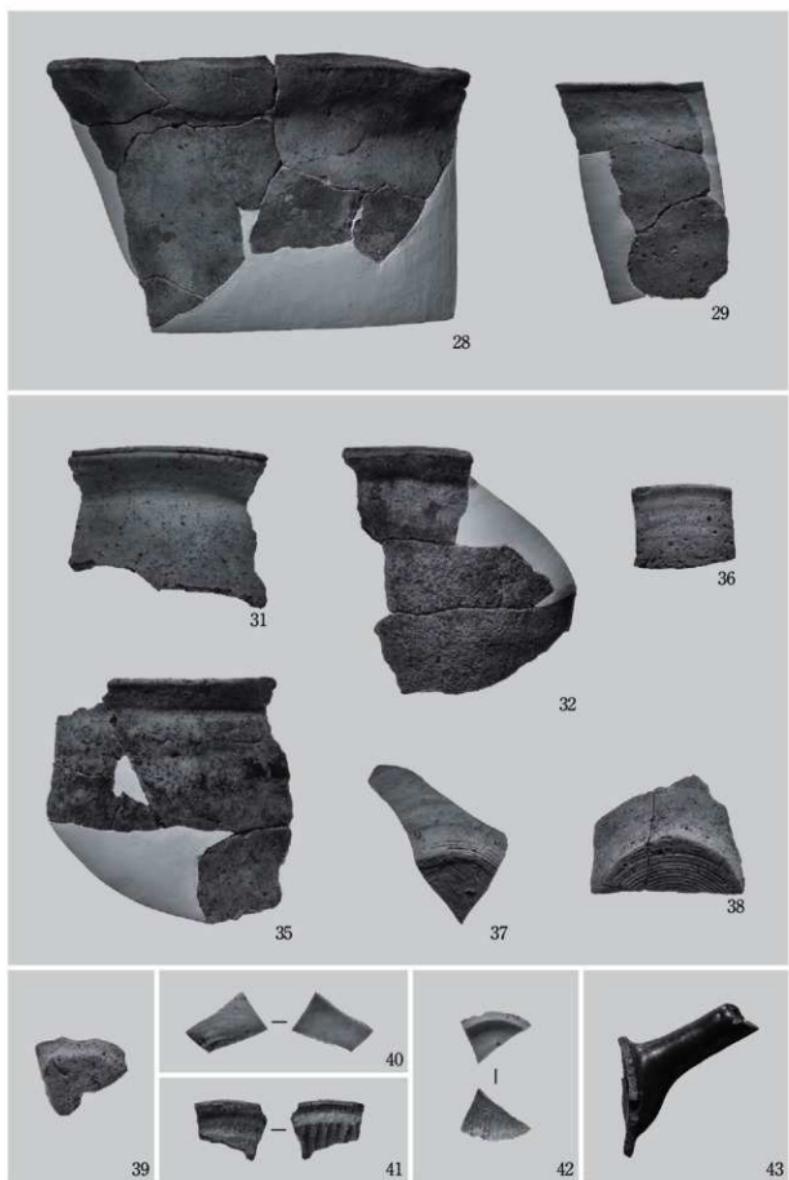


21

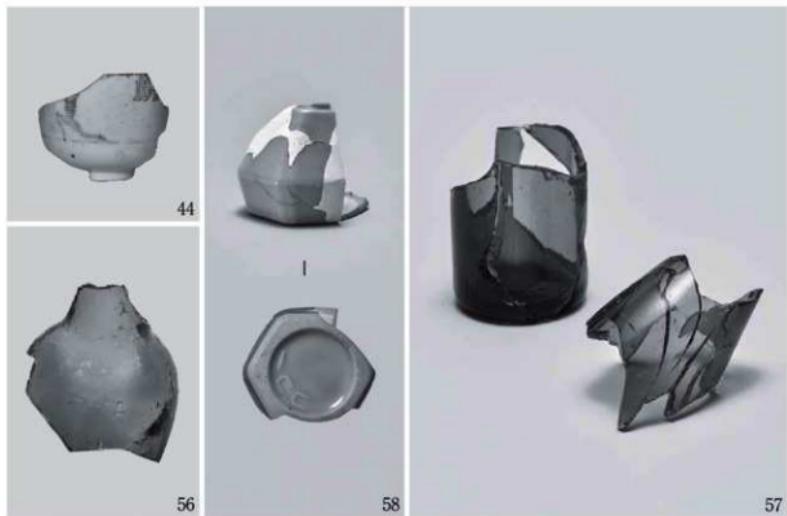
写真図版 35 土器（3）



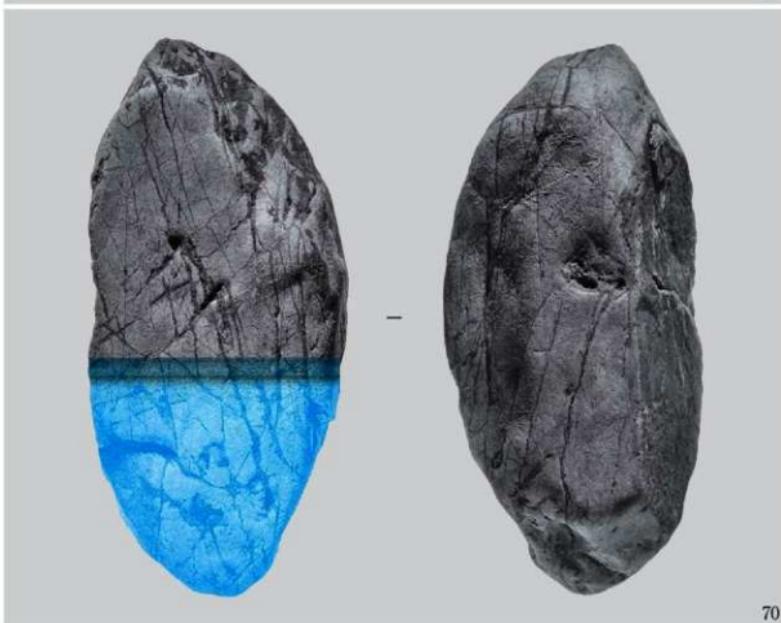
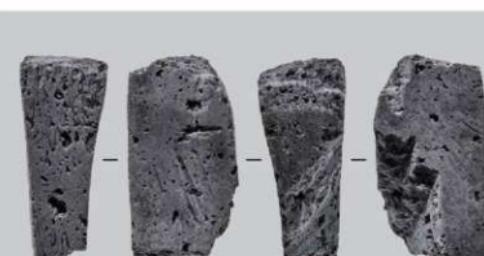
写真図版 36 土器 (4)



写真図版 37 土器（5）・陶磁器（1）



写真図版 38 陶磁器（2）・ガラス製品



写真図版 39 石器



間野村遺跡 (AIN-22) 航空写真1



間野村遺跡 (AIN-22) 航空写真2

写真図版 40 航空写真



調査区全景調査前（西から）



調査区全景終了時（西から）

写真図版 41 調査区全景



堀3断面（北から）



堀3全景（南東から）



土坑31断面（北から）

写真図版 42 堀3、土坑31



境遺跡 航空写真 1



境遺跡 航空写真 2

写真図版 43 航空写真



境遺跡 調査区全景調査前(東から)



境遺跡 調査区全景終了時(東から)

写真図版 44 調査区全景



E 1 断面 (北から)



E 4 断面 (北から)



E 5 断面 (北から)

写真図版 45 基本層序

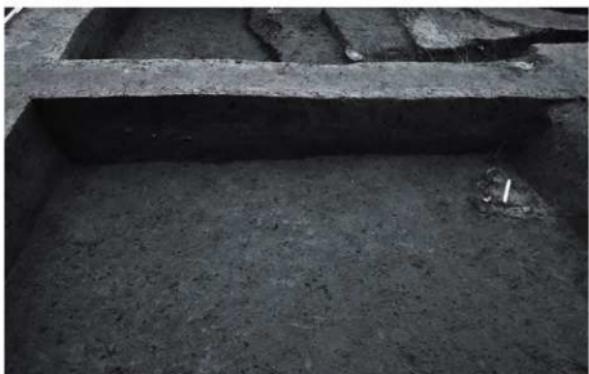


竪穴住居1 全景（西から）



竪穴住居1断面（北から）

写真図版 46 竪穴住居1 (1)



写真図版 47 竪穴住居 1 (2)

後遺跡



カマド1・2（南西から）



貯藏穴（南から）



カマド周辺土器（南から）

写真図版 48 穂穴住居 1 (3)



写真図版 49 竪穴住居1 (4)、竪穴住居2



土坑1全景（南西から）



土坑1短断面（東から）



土坑1長断面（南から）

写真図版 50 土坑1



土坑2全景（南西から）



土坑2断面（西から）



土坑2断面（南から）

写真図版 51 土坑2 (1)



土坑2断面・遺物出土  
(南西から)



土坑2焼土断面 (南から)



小ビット全景 (南から)

写真図版 52 土坑2(2)・小ビット



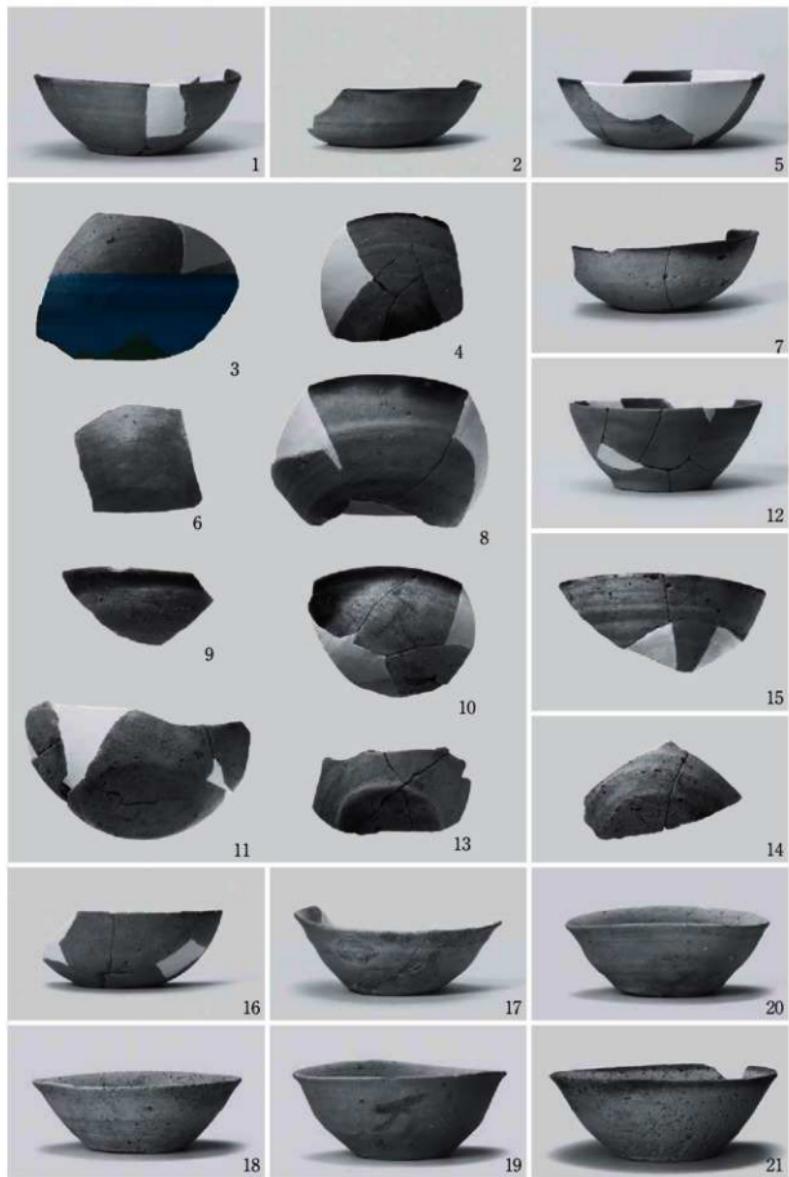
溝1全景（南から）



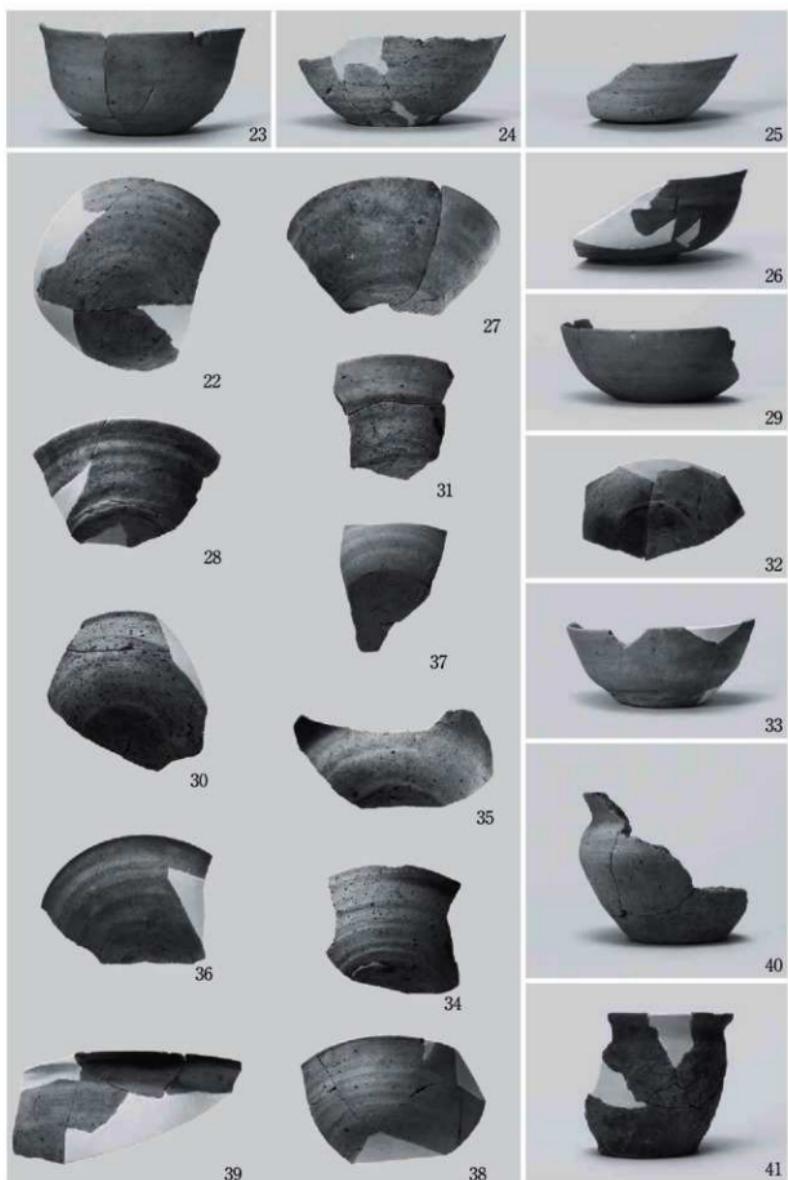
溝1断面（南から）



溝1断面（南から）



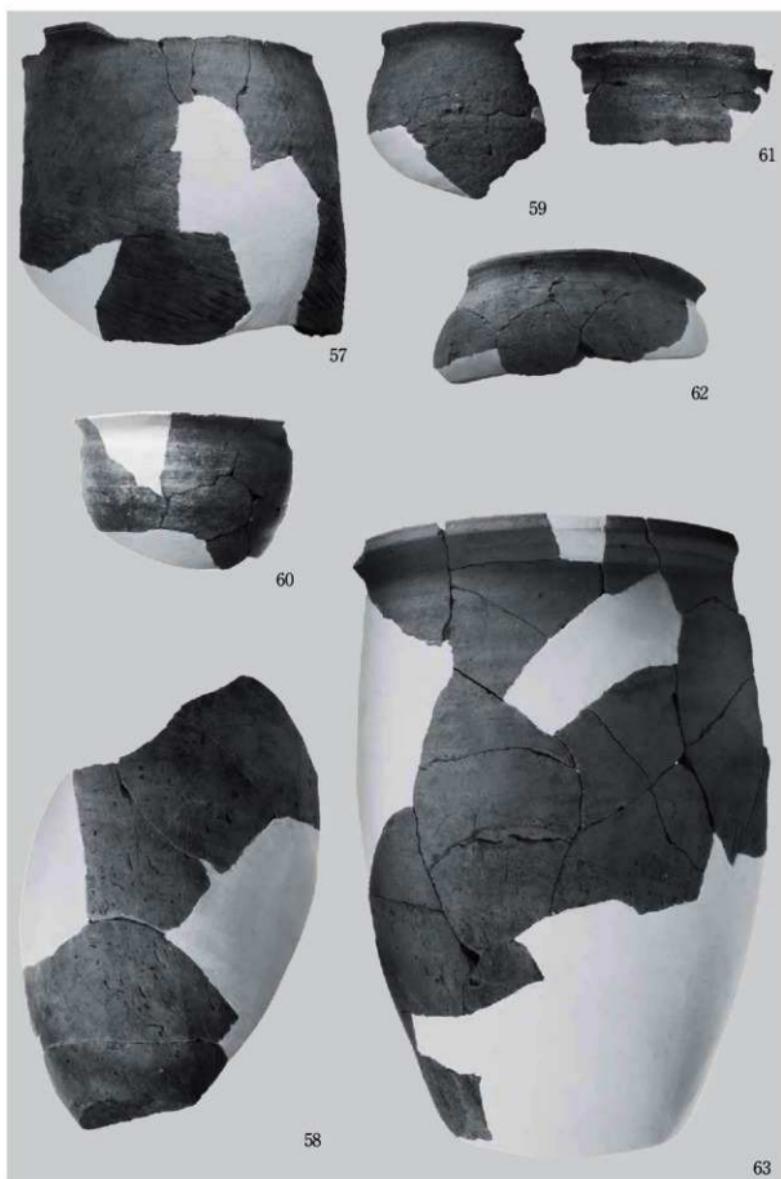
写真図版 54 土器 (1)



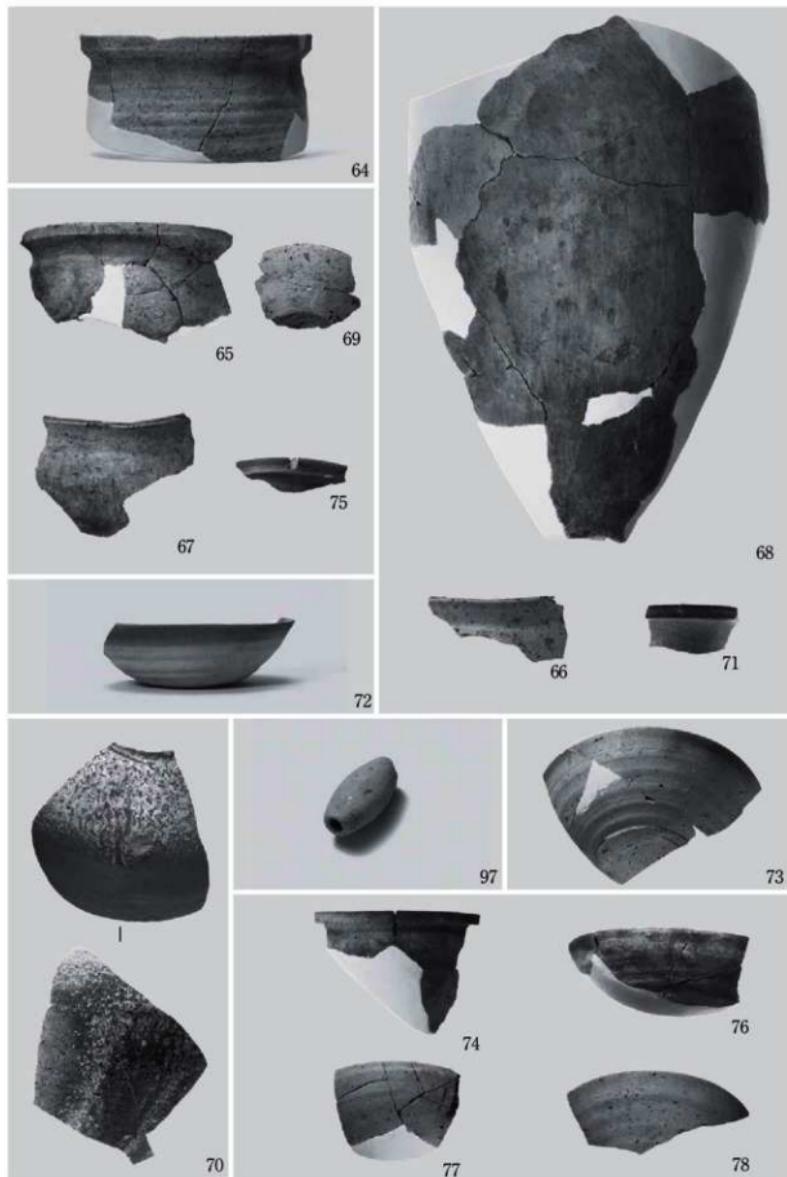
写真図版 55 土器 (2)



写真図版 56 土器 (3)



写真図版 57 土器 (4)



写真図版 58 土器 (5)・土製品



79



81



80



83



82



84



85



86

写真図版 59 土器 (6)



写真図版 60 土器 (7)・石製品

## 報告書抄録

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 737集  
**間野村遺跡・境遺跡発掘調査報告書**

主要地方道紫波江繁線星山地区道路改良工事関連遺跡発掘調査

印 刷 令和5年2月28日

発 行 令和5年3月10日

編 集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185  
電話 (019) 638-9001

発 行 岩手県盛岡広域振興局土木部  
〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 11 番 1 号  
電話 (019) 629-6630  
(公財) 岩手県文化振興事業団  
〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号  
電話 (019) 654-2235

印 刷 有限会社セーコー印刷  
〒 020-0877 岩手県盛岡市下ノ橋町 2 番 23 号  
電話 (019) 351-3606

---